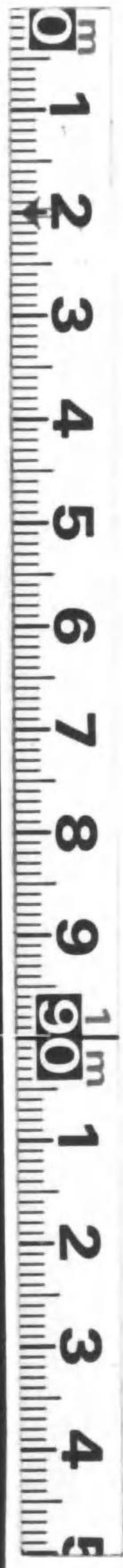


修養
禪話

白隱禪師言行錄

高橋竹迷著



始



特225
221



高橋竹迷著

白隱禪師言行錄



東京 大洋社 版

序

白隠禪師に關する著書は決して鮮くない。而もその傳記は未だ歴史的に研究されてゐない。従て其の眞面目が眞箇に紹介されてゐない。斯の如きは其の兒孫として甚だ忠實なる所以ではない、且つ禪師のために誠に惜むべきことである。本書は此の缺陷を補ふことに最も眼めた。

本書は元より歴史的缺陷を補ふことに眼めたとは云へ、唯だ是れ一般の讀者に白隠禪師の言行を納得せしむるを目的とした故に。研究的事項は概ね避けて、平易に其の生涯を叙述するやうにした。但しそれを機會として私は白隠禪師の研究に非才を盡すつもりである。

白隠禪師の逸話は随分多く人口に膾炙して居る。が、今は叙述の都合で多

く取捨した。その代り餘り世間に流布されてゐない逸話を間々挿入した。それは重に長安寺住職通山翠巖師の賜物である。師は白隠禪師が開創の道場たる龍澤寺に剃髪せられ、前後三十年も行住せられたので、山門不出の祕書や地方特種の傳説に依て、惜氣なく語られた。而も私は此の時に初めて師を知つたのである。特に師の寛大なる厚意を謝する次第である。

白隠禪師は實に臨濟宗中興の祖である。故に禪師を知らんとせば正に臨濟宗を知らねばならぬ。然るに私は不幸にして臨濟宗の知識に頗る乏しい。而し幸にして禪師の生涯に最も因縁の深い美濃に生れた。乃ち禪師が美濃の因縁を説いて稍や盡くせるは、或は臨濟宗を説いて足らざるあるを補ひ得たことゝ信じて居る。

禪は元是れ不立文字、教外別傳である。而して白隠禪師は實に是れ五百年

間出の禪僧である。その提唱された「隻手の聲」は、眞に是れ禪の第一義である。銀山鐵壁、能く文字語言の攀ち得る處であらう。徒に閑言語話を弄して白隠禪師に相見せんと擬すれば、既に是れ白雲萬里である。余素より禪師の眞面目を學示すとは云はぬ。纔に是れ眞龍の片鱗を描き得て、初學者のために禪師の門牆を窺はしめ得ば望外の至幸である。

枉げて黄葉を以て兒啼を止めしむるは亦是れ接化の手段である。姑らく第二義門に降つて白隠禪師の音容を髣髴せしめんとした。然るに種種の約束があつて、所期の十一も盡くすことが出来なかつたは、自ら深く遺憾とする所である。但し本書の足らざる處は、親しく禪師の語録に就いて、速に眞消息に徹底されんことを望むのである。

本書の著述に關し、頗る先輩知友の示教を受けたるのみならず、更に材料

の照會に就いては東光寺豐田愚中師、蔭涼寺青木徹成師等の手を煩はした。
茲に謹んで其の道誼を謝す。

香魚肥ゆる長良川の涯なる郷家に在りて

著者誌す

修養
禪話
白隱禪師言行錄 目次

第一章 總序

一 白隱の搖籃……………一

 瑠璃盤上に明珠を盛る……………富士山と浮島が原……………富士山と白隱……………木花咲耶姫と
 富士山……………觀世音菩薩と淺間菩薩……………觀世音菩薩と白隱……………白隱の典故……………濃州
 富士山記……………白隱の富士山觀……………普慈と不二……………扶桑鎮護と宗門の中興……………七

二 白隱の出世時代……………七

 元祿の盛時……………綱吉の入府……………家光と綱吉……………桂昌院と祐天上人……………學問の獎勵
 ……………お傳の方の跋扈……………女流文學者常磐井局……………元祿文學の勃興……………儒教中心の
 文學……………三

三 白隱出世時代の佛教……………三

 江戸佛教の分水嶺……………日本の政治史と佛教史……………幕府佛教……………崇傳と天海と存應
 ……………幕府の佛教政策……………秩序の保全と學問の獎勵……………臨濟宗の狀態……………宗門中興……………一

の祖師……叢林寂寞の時代

四 白隠出世の本懐……………一五

白隠の使命……白隠の慷慨……似非知識の痛罵……念佛禪の排斥……見性の筋力なき現證……蝙蝠の如き禪徒……眞風衰滅の大兆……慈悲大悲の血涙

五 白隠の生涯……………二〇

宗教的天才……宗教的天才の幼時……活動の權化……修行時代の前半生……應化時代……後半生の時代區劃……偉業の完成

第二章 出家以前の白隠

一 白隠の母……………二四

母の愛と力と信仰……誕生の日……白隠の家系……日殿上人と地獄心……因果の道理に怖る……浴槽の中に地獄を畏る……教へてから髪を結へ……信仰の指導……母の死……亡き母の追善

二 白隠の發心……………二九

岩様が起つた……浮雲を見て無常を悟る……法材の發芽……白隠の無常觀……刈

蒼と熊谷の發心……敬虔なる信仰

三 自隠と專念行者……………三三

專念行者の修行……行者の感化……養生の三秘訣

四 白隠の天神信仰……………三五

天神經の讀誦……演箭の遊戲……掛軸の破損……頼み甲斐なき天神様……香烟に心願を籠む

五 白隠の觀音信仰……………三七

苦患脫離の煩悶……幼き人生の目的……緣人形を見て感奮す……日蓮上人の信仰……法華の行者……出家の決心……柳澤山に登る……刀を提げて水を渉る

第三章 出家と修行

一 白隠の出家……………四一

大磐石の如き決心……松蔭寺に入て剃髮す……名を慧鶴と改む……師僧單微和尚……初發心の大誓願……佛教に疑着を挟む

二 文字に耽溺す……………四四

禪叢寺に掛錫す……江湖風月集を聴く……巖頭渡子話に惑ふ……出家を悔ゆ……
苦痛と煩悶……詩書に耽る……高塚四娘孝記……假名文字の説……秦の焚書……
漢家の興學……弘法大師のいろは歌

三 馬翁と禪關策進……………四七

美濃の荒馬……瑞雲寺と穰上座……瞑目して一卷を攪る……禪關策進を見る……
慈明の引錐に感奮す……馬翁の鉗鎚に觸る……馬翁、白隱を看破す……瑞雲寺の
一年

四 美濃の行脚……………五〇

觀音化縁の國土……保福寺に南禪和尚を訪ふ……靈松院に萬休和尚を敲く……大
巧和尚を東光寺に見ゆ……愚堂禪師の因縁……愚堂の機鋒……愚堂と大愚

五 四十二章經と精進勇猛……………五三

杉山の正宗寺……四十二章經……精進勇猛……姑婆……大愚禪師の筆蹟……書畫
筆墨を焼く……精進の權化……禪堂の本尊

六 伊豫より故郷へ……………五六

文彩縱横の活衲僧……備後より伊豫へ……故郷に歸る旅……備前の岡山……精進

第四章 大悟と菩提心

一 英巖寺の大悟……………六一

心火の爆發……高田の英巖寺……人天眼目……豁然大悟の一夜……巖頭和尚は健
在……慢心の天狗……新到の安居僧……無頼漢の屯所ではない……信州の宗格……
……宗格の識見……正受老人を知る

二 正受老人の鉗鎚……………六四

正受庵と道欽禪師……正受老人を訪ふ……相光と商量……學得底と見得底……趙
州の無……銀山鐵壁……命懸の勝負……縁下に蹴落す……親切骨髄に徹す……惡
辣なる機鋒……飯山の托鉢

三 正受老人の依囑……………六六

夢中の母……苦惱の問答……母を慕ふ心……拈華の消息……相續者宗格……養氣
を知らぬ……息道和尚の酒氣……歸郷の決心……餞別の垂誠……離別の悲哀……
大器の完成

四 肺金を病む……………三
 動靜の矛盾…命根未だ斷ぜず…洞山の傳授…再來の手形…洞山五位秘訣を編す…一大懊惱

五 白幽真人を訪ふ……………七
 心神の困倦…十二種の凶相…病軀の行脚…慧極禪師を訪ふ…仙人還丹の秘訣…本來の面目…老僧が頭を切り持ち去れ…白幽真人の生涯…白河の山中…清絶なる風致…我は山中の半死人…醫治し難き禪病…内觀の功を積み

六 夜船閑話の獲得……………八
 内觀の秘訣…生を養ふは國を守るが如し…大道と眞丹…長生久視の大神仙…無觀を正觀とす…養生の至要…起死回生の妙薬…靈と肉との復活…重病の憂愁…不死の神術…頑空無智の守屍鬼…金剛不壞の大仙身…養生の綱領…生身の觀世音菩薩…出生入死の端的…心源湛寂の處…養生の秘訣と摩訶止觀

七 菩提心の發起……………八
 松蔭寺に内觀を修練す…不安と恐怖…死ぬまで遣る…心火の遡上…逆氣

第五章 悟後の修行

は止んだ…復活の新生涯…悟後の修行…敬虔なる信仰の人…大善人の再來…菩提心の尊貴…癡福は三世の癡…衆生無邊誓願度…生涯の一轉機

一 荷葉團々の頌……………九
 伊勢より日向へ…荷葉團々頌…眞妄不二の境界…廓然として入得す…古月の家風…若狭行…未見の知己

二 蔭涼寺の夜雪……………九
 火中の蓮…蔭涼寺の鐵心…一心の光明…壽鶴に逢ふ…鐵心の遺風…壽鶴の驚喜…白隱の精進…接心端坐…雪夜の大悟

三 大燈語録と一隻眼……………九
 破竹の勢…保福寺の夏…大燈語録の文字禪…桃安國語…岩崎の靈松寺…放逸の衆と精進白隱…大安樂の境界…萬休と量…自分の眼に氣を付けよ

四 岩瀧山の隠棲……………一〇
 目次

山居の地……虎溪山……夢窗國師の山居……岩瀧山に入る……鹿野徳源……山中の危巖……深夜の巨人……樵夫との問答……微妙の音楽を聴く……内魔と外魔……何が怖いのだ……妖怪同士の苦樂一如……雪中の山居

五 松蔭寺の歸坐……………104

岩瀧山の一年……故郷の使者……父の病氣……松蔭寺の荒廢……子の行衛……下僕七兵衛の忠言……孝順は至道の法なり……故郷に歸る……歸家穩坐の消息……父の死

六 法華經の大悟……………110

寺の人……故郷の幸福……夢中の母……二面の古鏡……心の眼が開いた……法華經に契當す……妙法華經の解釋……花の君子……善巧方便の譬喩……常在靈鷲山……金剛不壞の人

第六章 機鋒と教義

一 佛國土の因縁……………115

準備時代……遠離行……煩惱魔軍の戦陣……佛國土の因縁……微妙の大壯嚴……十年の接化……豪邁の氣象……努力主義の權化

二 孤危険峻なる機鋒……………118

白隱の禪機……鷓林の家風……老婆の臭乳……内は即ち靈なり……雨中の托鉢……禪徒の痛罵……第二義門の接化……遂翁の大悟……不惜身命の覺悟

三 見性と内觀……………123

松蔭寺の旗幟……且つ戦ひ且つ耕す……虚堂の眞風……飢饉中の參學……妙道と黄金……見性を主一とす……内觀の修養

四 『神社考』と垂迹說……………126

排佛論の先驅……林羅山の思想……垂迹說の信仰……觀音の應現……壁生草明神……金剛の正體……宗門滅亡の猛火

五 三教一致の思想……………129

儒道の抱擁……佛法護持の菩薩……排佛の妬眼……因陋なる儒者を嗤ふ……佛道の源底と仁道の根本……至善に止まるに在り……三教の一致……儒佛の名と大道の實……本具の佛性……聖人は有言の天地なり……三世通貫の思想と禪

六 隻手の聲……………134

魔軍摧伏の旗幟……開國中興の功臣と偽れ……古今獨歩の隻手の聲……耳を以て

聴くべからず……六通の神境……六度萬行體中に圓なり……白隠の清淨法身……
お三婆の入得

第七章 應化と示寂

一 『十句觀音經』『五位口訣』及び『槐安國記』……………一三九

井上平馬と十句觀音經……五位の徹證……洞山の五位……白隠の識見……日本の
碧巖集……大燈語錄の因縁……白隠の暖皮肉

二 三大 供養……………一四三

三所の大法會……宗休禪師の法語……虛堂禪師の語言三昧……白隠と美濃……瑠
璃光寺の大會……寶鑑胎照の著述

三 無量寺と龍澤寺……………一四六

白隠の獅子吼……無量寺の創建……龍澤寺の建立……龍澤寺と禪昌寺との關係……
……白隠が墳墓の地……痛快なる報讎

四 普門示現の利益……………一五〇

池田侯の歸敬……插鉢の所望……黍餅の垂示……白隠の現身說法……池大雅の參

附 録

得……大橋女の接化と觀世音菩薩……在家化導の白隠

五 江戸の教化……………一五三

江戸に入る……臨川寺の留錫と落首……小出侯の屏風……東嶺と至道庵……再び
江戸に入る

六 大 吽 一 聲……………一五六

龍澤寺の正月……松蔭寺に病を示す……大吽一聲の臨終……巖頭と白隠……大吽
一聲と隻手の聲……努力の一代……勇猛の二字……賜號の追諡……當在不滅の法身

七 鶴 林 の 門 下……………一六一

遂翁と東嶺……遂翁の參學……和尙は召すとも我れは召さず……寧ろ急に失する
も緩に失すること勿れ……東嶺と宗門無盡燈論……雪中庵蓼太の參見……東嶺の
機鋒……微細綿密の行持……鶴林の龍象……古月禪材……人物の養成

八 白 隠 の 詞 藻……………一六五

禪は不立文字なり……禪文學者の第一人

夜船閑話……………一六九

遠羅天釜……………一八八

遠羅天釜續集……………二六五

坐禪和讃……………二九四

大道ちよぼくれ……………二九五

御洒落御前物語……………三〇〇

見性成佛丸方書……………三〇一

御代の腹鼓……………三〇七

施行歌……………三〇七

安心ほこりたゝ記……………三〇九

子守唄……………三二四

白隠禪師略年表……………三二四

目次—終—

修養 禪話 白隠禪師言行録

高橋竹迷著

第一章 總序

一 白隠の搖籃

神洲の正氣、凝つて芙蓉の峰となり、勢三州を雄壓して、徳、扶桑を鎮護す。仰げば萬三千尺、崢嶸として玉を削り、千秋の古雪、玲瓏として遠く崑崙黒漠の邊を照し來る處、東海の波濤、渺茫として長天を涵し、天地渾然として光を含み、怡も金剛有力の大偉人あつて、瑠璃盤の上に明珠を盛るが如し。

見渡せば雲路も迷ふ天の原、千鳥鷗の沖つ浪、田子の浦回到續く青松白沙、與々と吹く靈籟

白隠の搖籃

瑠璃盤上に明珠を盛る

白隠の搖籃
に、自ら鳴る天樂の音。紛々と翻へる異香に、自ら降る天花の雨。天人も來りて月宮の舞を作し、神仙も遊んで不老の藥を種うる自然の靈境。こゝに一碧の鏡奩を開き、波も靜かに富士の倒影を照し、「かけひたす沼の入江に富士の根のけぶりも雲も浮島が原」と「東關紀行」に謳はれた浮島が原はある。この莊嚴雄大なる自然の大殿堂が、五百年間出の高邁雄偉なる白隠の搖籃である。

磅礴たる富士山の靈氣は、純潔なる白隠の精神に宿つた。富士の人格化せるものは白隠にして、白隠の神格化せるものは富士である。富士の外に白隠なく、白隠の外に亦た富士なく、乃ち白隠と富士と、富士と白隠と、渾然として相融和して父子の如く、又恰も分身の如く、玲瓏として異彩を放つた。故に三國無雙の富士が、駿河の誇なると共に、五百年間出の白隠も亦た駿河の大いなる誇である。

駿河には過ぎたるものが二つあり

一に富士山、二に原の白隠

と、誦はれたるもの即ち是れである。白隠と富士とは、兆載永劫に離るべからざる大因縁があ

白隠は、富士山を仰いで生れ、富士山に對して育ち、而して富士山を睨んで死んだ。白隠が八十四年の全生涯は、多く富士山を離れてゐない。白隠を知らんとせば先づ富士山を知らねばならぬ。

富士の靈神は、淺間大菩薩で、その本地は阿彌陀如來であるが、その應身は木花咲耶姫である。木花咲耶姫は、過去久遠劫の昔、尊き國王の宮殿に、華麗なる花と咲き給うた姫君の一人であつたが、父君が散り行く花に果敢なき世の無常を感じさせられて、頓に出家求道し給ひし折、多くの御子と共に齊しく、姫も亦た緑の黒髪を惜氣もなく剃つて出家得道された。然しその後、釋迦牟尼如來出世あらせられ、靈鷲山に説法し給ひし砌、深く觀世音菩薩に歸依せられ、その説法授記の大功德に依つて、三國無雙の名山の靈神となられたのである。

さても紫雲鬘鬘として天地に棚曳き、妙香馥郁として鬘陀羅華を雨らし、天鼓撃たざるに自然に響き、簫、笛、琴、篳篥、篳篥など、數々の聲添へて鳴り渡る中に、幢幡瓔珞、七寶莊嚴の樓閣、巋乎として半空に湧出し、大地忽ち六種に震動せるの時、さつと輝く光明に、仰げば

白隱の搖籃

端嚴微妙の觀世音菩薩、冉冉たる白雲の上に靜に結跏趺坐し給ひ、肅々たる諸佛諸菩薩、天龍八部衆の來迎を受け給ふ。その時、淺間大菩薩は歡喜踊躍禮拜して「南無大慈大悲の觀世音菩薩、今この娑婆五濁の世界に止りて、當富士山を守護し我等を哀愍し給へ」と、一心に稱名し給ふや、雲中縹緲として微妙の御聲美るはしく「汝、安かれ。心を淨うして一たび我が名を唱ふれば、無間獄中に墮つるものも、亦た蓮華淨世界に往生せしめ、火坑は變じて池と成り、怨賊は却て慈心を起さむ。常に甘露の法雨を注いで煩惱の焰を滅除し、世間諸の苦を救ふべし」と告げ給ひ、かき消す如く失せ給へば、早や白日の光四方に輝きて、谷間に囀る鳥の音さへも、娑婆の化縁を讚談するものゝ如くであつた。これより後、富士山は長く觀世音菩薩化縁の道場となつた。即ち富士山の分身たる白隱の信仰が、初めより敬虔にして且つ熱烈なる觀音信仰であつて、而も其の唯一の開山所たる龍澤寺を、圓通山と號して、觀世音菩薩を本尊とした如き、決して偶然ではない。況んや白隱が信仰の第一歩たる天滿天神の本地は、十一面觀世音菩薩なるに於てをやだ。白隱は觀世音菩薩の化現と云つても可い。白隱の觀音信仰は、即ち是れ富士山信仰であつた。白隱の信仰對象は、實に是れ富士山であつた。故に白隱は、一刻も富士山を

離れることが出来なかつた。白隱と富士と、富士と觀世音と、觀世音と白隱とは、三にして即ち一、一にして即ち三、恰も是れ法、報、應の三身であり、體、相、用の三大であり、天、地、人の三才である。

白隱、名は慧鶴、享保三年、三十四歳にして妙心寺に出世し初めて白隱と號したのである。それにも亦た富士山との因縁がある。

白隱、朝夕富岳に對して自ら怡ぶ、一日、富岳いづくにか隠れて眸中に映じ來らず。因つてつらく四邊を視るに、富岳前後に圍繞せり。時に白隱、自ら號して白隱と呼ぶこと三たび、富岳數歩を退きて固坐するを感ず。けだし富岳つねに雪に隠れて白きを以てなり云々（近世

禪林言行錄）

と、白隱は富士に迷ひ、富士に悟つた。而して富士を理想として、自ら竊に靈界の富士山を以て任じてゐた。

白隱は後に、鹿野徳元居士のために『濃州富士山記』を作り、その冒頭に、至道の極、昏昏黙黙。至道の精、杳杳冥冥。昏冥纒に動いて兩儀斯に在り、清虛なるものは

白隱の拈筆
名けて高天と爲し、凝結なるものは名けて厚土と爲す。厚土の裏に大塊あり、名けて富士峰と爲す。勢、三州を雄壓し、徳、扶桑を鎮護す。高廣一由旬の氷雪、稜稜として白壁を斷るが如く、層巒七八葉の銀英、祭祭として玉蓮を擎ぐるが如し。其の神を淺間大士と爲す。是れ淨利、無量壽尊の垂跡にして威嚴密切なり云々。原漢文(荆叢毒藥)

議する者あり曰く、夫の富士峰の如きは廣高車拔、類を出で倫を離る。故に或は書して不二と爲す。而して今又た此の山を以て富士峰と名く、可ならんかと。余曰く、子の見る所は、只だ巖巒の層高、煙雪の秀麗のみ。若し夫れ無量壽尊の願海深廣にして、光明の普照なるを見れば、或は書して普慈となすも亦た得るなり。且つ彼の前人、至誠の感ずる所、駿陽濃陽豈に二あらんや。然れば或は書して不二と成すも亦た得るなり。

の富士とを以て、元と一にして不二なりと云ふは、前賢未發の大事である。富士山は白隱に依つて、更に一段の光彩を放つた。白隱の富士こそ眞に扶桑鎮護の靈山であり、名山である。嗚呼、美はしき白隱の拈筆！神州の元氣、凝つて茲に芙蓉の峰となり、芙蓉の靈氣、亦た凝つて白隱となつた。即ち是れ富士が三國無雙の名山なるが如く、白隱は也た五百年間出の高僧である。富士が扶桑鎮護の靈山なるが如く、白隱は也た宗門中興の偉人である。

二 白隱の出世時代

家康の雄魂、日光山に眠りてより七十年。秀忠の濃厚、家光の英明、二代相繼いで守成の任を盡くし、更に家綱を経て、英邁果敢、雄志卓抜なる綱吉に至り、三つ葉葵の根も堅く天下に覃びて、卷繪の如き華奢風流に、世は將に泰平を謳ふ元祿の盛時を迎へんとする時に當つて、五百年間出の高僧、白隱は芙蓉峰下に呱呱の聲を擧げた。

延寶八年五月、四代將軍家綱は四十歳にして薨じ、嚴有院と諡られて東叡山に葬つた。乃ち綱吉は三十五歳にして、上州館林より入りて統を繼ぎ、將軍宣下あつて内大臣に任ぜられた。

正に是れ生ける藏經の作者、黄檗の鐵眼道光禪師が示寂の二年前である。

綱吉は家光の第四子で、母は二條關白光平の臣、本庄太郎兵衛宗正の女お玉と云つて柳營の大奥に仕へてお玉の局と稱し、家光薨去の後、桂昌院と稱した人である。綱吉は幼い頃から非常に伶俐であつたので、父家光も殊の外、鍾愛してゐたが「餘り伶俐すぎるから、才氣に任せ仕事をし、却て禍を招くやうにならねば好いが……之れを傳育するには文學を第一とするが可い」と云つた位で、倍す綱吉の天性を啓發して、後年、學問好きな特色を遺憾なく發揮するに至つた。

併し之ればかりではない。或る時、桂昌院が増上寺へ參詣された折、祐天僧正が四方八方の話の序に、「僧徒などは學問を勤め、臘次により次第に昇進いたし候へども、將軍家には機務の暇無くおはします御身もて、典籍に御心を盡くされなば、果てには御精力衰耗して、御病の出でんも測り難し、少しく節量し給はゞ宜しからむ」と、心に思ふ餘りに聞え上げた。すると、桂昌院は容を改め、「こは御坊の詞とも覺えぬ。いま大樹（綱吉）には、測らざるに藩邸より出で、大統を受け繼ぎ給ひしことなれば、天下の爲には何程も精神を盡くし給ふべきは云ふまで

家光と綱吉

桂昌院と祐天上人

學問の奨励

もなし。さて政務の資となるべきは、第一文學に過ぎたるはあらず、よし是れが爲に尊算の促らせ給ふとも、是れは御本意と申すべきことならずや……御坊だちは弘法を以て主とするなれば、その徒に命じ、諸國廻行せしめ、將軍家の斯く政事に勤勞し、文學に心を用ひたまふ由、遍く國々に宣播しなば、四海の果てまでも、其の風采を欣慕し、文學に向化することとなりなれん。これぞ御坊だちの職務とこそ云ふべけれ……さらば學問を節量し給へとは、必ず云ふまじきぞ」と云はれたこの母にして此の子あり、如何に講學に熱心なりしかは、蓋し思ひ半に過ぐるものである。

之れのみではない。日本文學の精華とも云ふべき、絢爛たる元祿文學勃興の機運を促進するに、與つて大に力ある一人の女流文學者がある。

その頃、大奥に於て、三千の寵愛を一身に集め、飛ぶ鳥も落さんばかりの勢に跋扈したのはお傳の方であつた。お傳の方の一顰一笑は直に將軍綱吉の喜怒哀樂となり、縦に政務に容喙し、老中を始め諸有司の崇敬も一方ならず、従つて大奥をも我れ一人と切り廻し、御臺所は在れども無きが如くであつた。之れを眼のあたりに見る御臺所の御附上藤なる萬里小路は、斯く

お傳の方の跋扈

ては將軍家の御一大事と傍に愴き、如何にもして彼の勢を挫かんものと、人知れず日夜に心を痛めてゐた。然るに又、御側御用人の松平伊賀守忠周は、綱吉が頻に新進の士を寵任し、専ら苛察を事とし、政刑嚴峻に流れ行くを見て私に憂ひ、何卒して之れが矯正を謀らんと思ひ立つた折柄、老中戸田忠昌は、公が能樂に數寄を盡くし、今や大將軍の身を以て、能役者に等しき舉動あるを嘆いてゐたが、近く又た今様風流を取り立て給はんと内々御結構あるを見て、斯くでは奥向の風俗日にく鄙猥に赴くを、苦苦しく思つてゐた。この三人の慷慨は品こそ異れ、心は同じ時弊矯正の目的であつたがために、意氣自ら相投合して、遂に御臺所の御稽古事の御相手として京都から、才學勝れ且は容貌なども賤しからぬ女を選び、聽て准后御所に仕へてゐた、常盤井の局を迎へた。これが即ち女流文學者である。

女流文學者
常盤井の局

常盤井の局は關東へ下向し、直ちに御臺所御附の上藤となり、萬里小路の相役を仰せ付けられ、日々御前に伺候して、和歌又は物語の讀合せなどを勤め、又た香合せ挿花、双六、圍棋など何くれと御相手を仰せ付けらるゝに、素より才學勝れたることとて、何一つとして人々の目を驚かさずといふことはないので、御臺所にも一入御懇ろに思召され、聽て源氏物語の講義、

元祿文學の
勃興

儒教中心の
文學

古今集の講義など仰せ付けられ、總女中の向々へも勝手に聽聞致さすやうにした。これが何時しか綱吉公の御聽きに達した。公は元より學問好きであるから、それは珍らしいことである、早速これへと仰せ出だされて、常盤井の局は御前に罷り出て源氏物語を講じた。が、その言簡にして意詳かに、殆んど男子も及ばぬ程なる上に、搦てゝ加へて容貌秀麗にして而も進退の閑雅なること、流石は堂上家の姫君にして、御所に宮仕へせる人なれば、中々に黒鉄の者の女（お傳の方のこと）が、俄か仕込に躡けられたるに比ぶべくもない。公は大に感心ありて御所望の由仰せ出だされ、聽て將軍家御附中藤となり、大奥女中の總支配を兼勤めさせ、女中ども行儀躡けの儀、遠慮なく申し付くべしと命ぜられ、是れより御寵愛第一となつた。

洛陽一輪の名花、遠く武藏野邊に移されて、萬緑叢中に一點の紅を染め、忽ちにして不骨なる關東の氣風を變じて、優艶なる上方風に化せしめ、上の好むところ下自ら之れに倣ひ、天下は翕然として文學の風に靡いた。而して其の文學は、儒學史上空前なる儒教中心であつた。これが聽て平民的特色を帯ぶに至つて遂に二百年後に徳川幕府を倒すに到る素因となつた。即ち百花繚亂、春の如き元祿の文化は、慘風悲雨、寔に落寞たる安政、慶應の時勢を醞酵したの

である。顧みれば、徳川氏は恰も藪を残して死する蠶にも比すべきである。

白隠は此の時に生れ、此の間に育ち且つ死んだ。その生れたのは、儒道的武士道の権化、山鹿素行が江戸に死んで後三月にして、實に是れ貞享二年十二月二十五日である。

三 白隠出世時代の佛教

江戸佛教の分水嶺

元祿の文化を中心として、江戸時代二百六十四餘年間の佛教は、之れを前後に二分することが出来る。即ち白隠は、江戸時代佛教の分水嶺に立つたのである。是れ實に注意すべき一大現象である。

日本の政治史と佛教史

日本佛教史は常に日本政治史と駢行して、政治の中心のある處に必ず佛教の中心があつた。即ち是れ江戸時代佛教の中心が、江戸にあつた所以である。顧みれば、社會政策の上に、如何に佛教を處置すべきかと云ふことに、最も苦心したのは織田信長であつた。續いて豊臣秀吉も亦た頗る深き注意を拂つた。更に徳川家康に至つて、流石は巧に之れを利用した。家康は、決して熱心なる佛教の信奉者ではなかつた。

幕府佛教

崇傳と天海と存應

幕府の佛教政策

秩序の保全と學問の奨励

江戸佛教は即ち幕府佛教である。幕府は初めから寛に保護を加へ、嚴に干渉を試み、而して種々なる手段を弄して制裁を怠らず、七百餘年來儼然たりし、京都中心の公家佛教に壓迫を加へた。蓋し江戸佛教は京都の公家佛教を江戸に轉じ、之れを武家勢力の下に置かんとしたのに始まつて、終に武家の佛教をして、京都公家の勢力を掣肘せしめんとするに至つた。而して最も之れを助けたものは、臨濟宗の崇傳、天台宗の天海の二人である。天海は東叡山を、崇傳は金地院を共に江戸に起し、政治に參與して大に經營畫策する處があつた。更に存應が増上寺に活躍するに至つて、自ら江戸は全く佛教の中心勢力となつた。

幕府は佛教政策の上に、二大方針を立てた。その第一は秩序の保全、第二は學問の奨励である。秩序の保全に依つて、諸大寺に法度を下して、大衆の横暴を牽制し、截然として本末の關係を明白にし、天主教徒の極刑や人別帳が出来て寺檀の關係を生ずるに至つた。學問の奨励と云ふも、开は唯だ其の宗派各自のみに制せられたので、其の結果は、互に宗學上の討議となり終に各自宗門は大爭論が起るに至り、その時に臨んで幕府は最も惡辣なる干渉を遺憾なく進め、盛んに教界の偉材を虐殺した。即ち日蓮宗の日重、日遠、日乾の處刑、天台宗に於ける妙立一

派の革新、曹洞宗の一師印證論、眞宗の三業惑亂論等、悉く皆然らざるはない。此に於て江戸佛教は、已に潑刺たる新生命を失はれてゐた。而も是れ幕府政策の成功である。然らば、白隱の剃髪した臨濟宗の状態は如何であつたか。

臨濟宗の状
宗門中興の祖師

臨濟宗は、鎌倉幕府に依り勃然として興り、室町時代に鬱乎として全盛を極めたが、足利氏の威信漸く地に墜つるや、宗風亦た随つて衰へ、甚だ落寞たるものであつた。應仁以後の亂世を経て、徳川時代に入るに及び、衰頹益す甚しく殆んど收拾すべからざるに至つた。元和僊武の後、嘗て一宗の僧統たると同時に、又た幕府唯一の顧問官たる鹿苑院、並に蔭涼軒の僧録職は、一轉して金地院に移つてから、古來、臨濟の中心たる南禪寺、並に東西五山を初め、足利學校、甲斐の向嶽寺、秩父の圓福寺、遠江の方廣寺等、皆な金地院の支配する所となり、宗門の勢力は、全く一の金地院に吸収せられて終つた。蓋し元和の初、五山十刹諸山の法度が發せられ、互に相獨立して他の五山一派と峙立したのであつた。この間、臨濟の宗風は唯僅に嶺

叢林寂寞の時代

南、澤庵、愚堂、一絲等に依つて維持せられたに過ぎなかつたが、白隱の出づるに及んで、宗風再び世に振ふに至つた。白隱は、實に臨濟宗中興の祖師である。一代の宗政家崇傳が、寛永十年、金地院に寂してより後、十年にして嶺南寂し、越えて二年、正保二年に澤庵、一絲同じく、寂し更に十六年を経て寛文元年に愚堂は寂せり。その後、二十四年にして白隱は生れた。此の前、十四年の間に、黄檗の即非、隱元、鐵眼、木庵と相踵いで示寂して、叢林は轉た寂寞たるものであつた。白隱は正に其の時代と、其の宗門と、其の人物とに於て、宗門中興の大使命を帯んで來たものであつた。

四 白隱出世の本懐

白隱の使命
白隱の憤慨

宗門の中興、叢林の革新、而して眞禪風、眞祖風の宣揚、是れが即ち白隱の使命であり、精神であり、氣魄であつた。この重き使命を雙肩に擔ひ、決然として起つた雄渾卓犖なる白隱は、落寞たる當時の禪風を見て、慷慨禁する能はず、萬丈の氣焰を一篇の『葢相子』に吐いた。曰く、悲しむべし、澆季末代の習ひ、法滅盡時の驗しにやあらむ。多衆圍繞の宗匠、碩徳、高名の

著宿も、徒に空しく無念無心、灰心泯智の死法を以て禪門向上の宗旨とし寂黙枯坐、古廟裏の香爐にし去りて、祖師眞修の實所とす、頑空無記、暗鈍昏愚を以て大事了畢の堂奥とす。點檢し見來れば一丁字も亦知らざる底の鼻瞎忝、破凡夫、何んの力有りてか法城を鎮護し、宗旨を扶起し去る事を得む。又或は一般世智辨聰の大癡人あり、空見に誇り小智を恃んで即ち曰く、佛祖も是れ空寂無相、古則公案、皆是れ空にして、一法の執るべき無しと、佛祖を併吞し諸方を罵詈す、恰も狂狗の聲を限りに吠ゆるが如し、拘下して取るに足らず。唯是れ一肩無頼の頑陋奴、賤賸夫、食堂に放ちて粥飯を貪餐せしむる外、半點の所能なし。何んの備へ有りてか識量寛大、智鑑高明の士太夫をして歸降せしめ、國王大臣、有力の檀越をして佛法ある事を知らしめん。

と、多衆圍繞の宗匠、碩德、高名の著宿を遺憾なく痛罵し去つて、眞個の禪風が果して何處にあると、胸倉取つて拷問したのであつた。更に語を續いて、

悲い哉、大雅枯れて桑間湧き、古曲啞して鄭衛震ふ。百年以來眞風一變して禪徒醜態を成す、禪にして淨土を兼ねる底、麻の如く粟に似たり。昔は外現是聲聞、内秘菩薩行、今は外現佛

心宗、内秘は即ち淨土行、恰も一器にして水乳併せ盛るが如し。進んで曲束木、牀上を望めば、紅羅の大帽を着け、紫錦の方袍を掛く、白拂、裏々として煙を捲き、金鴨、亭々として霞を吐く。形容凛々、威儀森々、十力の調御の如く、四果の聖者に似たり。見る者覺えず腰を屈むるあり、掌を合するあり、頭を叩くあり、涙を垂るゝあり、眞正的々相承底の活祖師、恰も佛魔も近傍し難き者に似たり。財産を聚め收むる事は目蓮の神通あり、在家を證縛することは滿慈の辯才あり。正眼に見來れば、一點見性の筋力なく、一點透過の氣血なし。此故に進むに寂滅の樂なく、退くに生死の恐れあり。と、徒に善男善女の渴仰を集めて居る金欄佛教の無價値を叫び、殆んど完膚無きに至らしめて、似非知識の頂上より眞向に三十棒を喫せしめた。而も猶ほ説いて曰く、今世は種々殊勝の境界を現じて世上を誑惑し、在家に追従して許多の禮拜供養を受くと難も、來世は必ず惡種の底に墮して、肉抹骨磨の苦患、洋銅鐵丸の受報を如何。子細に思念すれば寒毛皆よだつ。此に於て即滅無量罪の佛誓を頼みて、袖裏に竊かに念珠をつまぐり、口中ひそかに稱名念佛して淨刹の迎生を願ふ。寔に憐れむべし、是れ向きに所謂一點見性の筋力な

きの現證なり。是れ向きに所謂一點透過の氣血なきの靈驗なり。恚癡にして傳燈歷代の祖と稱して可ならんや。

と、未徹見の宗師を散々に面斥し、殆んど身を藏くすに地無からしめ、今世の懈怠懶惰、放逸無慚に依つて、私に來世の受報を怖れて念佛禪の邪路に入れるを醜詆し、筆端、慘として恰も長劔の太空に倚るが如き概がある。更に復た進んで、

爾等、身は禪門に在りて肩に心宗の法衣を掛け、口に一員の禪徒なりと稱して、内には竊に稱名念佛して、禪門を汚辱し宗趣を混亂する事は、何んたる事ぞや。若し真正淨業を追慕し、佛名を信受するぞとならば、何んぞ明白に淨家に一員淨業の上人と成りて、總盤を張り木釘を居る、普く四衆を勸化し、晝夜に高聲念佛して、大事を決定せざる。胡爲ぞ其怪しきや、他の獅子皮を着けて、却て野干鳴を成す者とせんか。恰も蝙蝠の鳥にもあらず、鼠にもあらざるが如し。動もすれば禪門宗匠の眞似して、塵拂を擧揚し竹篋を拈じ、拄杖を引く、是れ何の用處ぞ、專唱稱名の人、一個の木釘を据うれば足れらくのみ、何んぞ者般の閑家具を用ゐん、法印の○を貯へ、盲母の鏡を愛するに似たり。

と、巧に揶揄し去つて顔色なからしめた。而も涙は痛腸より出で、此の如き邪禪の流行は宗門の滅亡なることを嘆き、一時全盛を極めたる支那佛教の頹廢を聽いては、

嗟呼、時乎、命乎、未だ二百年を経ざるに、胡爲れぞ其れ此極に到るや。是れ天にあらず、是れ命にあらず、灰心浪智禪門念佛等の邪黨に傷賊せられ、黙照邪禪、無念無心の魔風に吹倒せられて、遂に此の荒蕪を見る。熟らく顧ふに此等の部類は盡く是れ眞風衰滅の大兆、佛道斷滅の大前表、寔に三武の暴逆に過ぎたり、三武は外より責む、此故に久しからずして回復す、七流は内より潰ゆ、此故に佛手も醫する事能はず。譬へば傷風と内症との如し、我が日域佛道の衰滅、漸く久しかるべからず。云ふ事勿れ禪にして淨土を兼ぬるは、虎にして翼を挟む者なりと、錯々。此に人あり、重病を膏肓の間に結ばんに、其人必ず久しからずして死せん、禪若し淨土を兼ねば、其禪必ず久しからずして滅びん、嗚呼、禪乎、禪乎。西四七、東二三、的々相承し來りて實に八宗の綱梁たり。譬へば此に一字の廣廈あらんに、梁棟若し碎け落ちて、其餘見るに足らざるのみ、大唐佛道の斷滅、豈に怪しむに足らんや。と云ふに至つては、全く不惜身命の大誓願にして、言々句々、悉く慈愍大悲の血涙である。白

隠が一代の遊戯三昧は、皆是れ此の血涙の結晶であつた。白隠は唯是れ此の回瀾を既倒に興さんとして起つた。嗚呼、渠も亦た時代の産兒であつた。

五 白隠の生涯

宗教的天才

白隠が一代八十四年の生涯に於て、最も陸離たる光彩を放つものは、渠が宗教的天才の閃きである、白隠は、眞に宗教的天才の偉人であつた。渠が一代の使命たり、精神たり、氣魄たる宗門の中興、眞風の擧揚は、皆な此に宿つて居る。且又た是れに由つて其の人物や性行も、明快に解決することが出来る。殊に其の幼年時代に於て、最も明確に之れを知ることが出来る。即ち雲の變現極りなきを見て、世相の無常を感じたとか。自ら具はる人品骨柄に専念行者が歎賞したとか。地獄の相を聽いて苦患を怖れたとか。天満天神に祈願して感應を待つたとか。觀世音菩薩を信仰して受持尤も勤めたとか。法華行者の威神力に感動したとか。御經を讀めば、微妙の音聲に道行く人をして讚歎せしめたとか。或は柳澤山に登つて自ら修鍊したとか、悉く皆宗教的天才の閃きならぬはない。之れを當時の大活動家たりし、大佛再建の發願者、公慶

宗教的天才の幼時

上人などの幼時と對比して、自ら面目を異にして居る。

活動の權化

白隠が八十四年の生涯は、恰も其の半生たる四十二年を以て、劃然として之れを前後に二分することが出来る。而して其の前半生は、渠が心事了得の修行時代、若しくは奮闘時代と見、其の後半生は、應化時代、若しくは活動時代とも見ることが出来る。但し白隠の生涯を一貫したる主義、或は色彩は、唯是れ奮闘、努力、活動、精進、勇猛である。之れがために白隠は幾度も「山の登れば彌よ高く、海の入れば益す深き」ことを示して居る。斯くて修行の上にも、應化の上にも、常に進んで止む時がなかつた。白隠は全く活動の權化であつた。

修行時代の前半生

前半生の四十二年間は、實に崎嶇崢嶸、波瀾重疊、其の進退動靜は殆んど端倪すべからざるもので、而も其の把住放行は頗る絢爛たる色彩に富んで居る。中に就て出生より十四歳までの在家時代を第一期として、恣に天才の煥發を見るのである。次で十五歳の春、出家剃髮より二十四歳の春、英巖寺に於ける大悟までの九年間を、第二期として根本を見徹したのである。その年、信州飯山に親しく正受老人の鑪鞴に投じ、辛辣なる鉗鎚を受けたるより、二十八歳にして虚堂の偈に語言三昧を識得するまでの五年間を、第三期として深理を研究したのである。

更に二十九歳にして荷葉園々の頌に入得してより、四十二歳にして法華經甚深の妙理に大悟するまで前後十四年間を、第四期として悟後の修行に精鍊を加へたのである。此の如き前半生の活卓々地の大修行、大奮闘が、饒て後半生の活潑々地の大應化、大活動となつたのである。

白隠の心田に植ゑられた一種の靈苗は、漸々として秀で、穂となり且つ實となつた。是れ其の後半生である。後半生は全く圓熟の時代であつた。圓熟したる白隠は、急ち卓朗闊達なる應化となつた。而も之れを前半生の變化に富むに比すれば、寧ろ單調であり、平淡である。若し後半生を春風駉蕩と云ひ得べくんば、前半生は實に秋霜烈日である。前は長劍の凛乎として大空に磨するが如く、後は煙波の洋々として大海を涵すが如くである。而も此の間に多少の逆順縦横がある。

後半生四十二年間も亦た、大凡之れを四期に別つことが出来る。先づ四十三歳の初より五十六歳にして松蔭寺に虚堂録を提唱し、是れより白隠の道價、天下に冠たるまで十四年間を第一期とし、次で五十七歳より六十四歳にして、本光國師入院の法語を聴き、祖門一變の肉を味ひ得たるまでを第二期とし、翌年『槐安國語』の述作より、七十四歳にして愚堂の百年忌の提唱

應化時代

後半生の時代區劃

偉業の完成

及び龍澤寺の開創まで十年間を第三期とし、第四期としては、七十五歳の夏、江戸入府より龍澤寺に示寂せらるるまでの十年間である。而して此の四十二年間こそ、白隠が唯一の使命たる宗門中興の偉業を完成した時期である。即ち鶴林門下無數の龍象は、多くは此の間に養育せられたのである。更に之れを、其の背景たる元祿、寶永後の時代と對比し來つて最も興味がある。白隠は、宗教的天才としての成功者である。其の生涯は誠に崇嚴なるものである、自ら五百年間出の高僧と稱し、長く宗門中興の祖師として、叢林に絶對の尊敬を拂はれて居るも、亦た所以なきに非ずである。

第二章 出家以前の白隠

一 白隠の母

母の愛と力の信仰

白隠の母は、確に賢婦人であつた。白隠をして能く白隠たらしめたのは、正にこの母の愛と力と信仰とであつた。

うとくと結ぶ假寝の夢に、衣冠正しき一人の神官、伊勢太神宮の御符を帯んで、遙に伊勢より來つた我が家の棟に停つたが、犯すべからざる凛々しい威風に打たれ、はつと思ふ間に夢は覺めた。乃ち懐胎したのである。

誕生の日

眼の物の彩もなく、耳に樂しき聲もなき、母が十月の苦勞も過ぎて、甦て貞享二年乙丑の十二月二十五日の夜、丑の日の丑の刻に、満ち來る潮と諸共に、勇ましき呱呱の聲を揚げたのは白隠である。

家は駿州駿東郡浮島原驛杉山氏である。即ちこの第三子で岩次郎と呼んだ。白隠は、賢婦

白隠の家系

人なる母長澤氏の胎教を受けたと共に、その脈管には、忠實勇武なる父杉山氏の血が沸々として漲り、自ら具はる人品骨柄、二つの眼は、熱と光とに輝いてゐた。

そも杉山氏は鈴木氏の一族であり。さては鈴木三郎重家は、源義經に従つて武勳を抽んでゐたが、幾何もなく義經が都を後に奥州へ下向のことを後より知り、然らば最後まで御供仕らんと、一族七騎と共に追つて來たが、所詮、及び難しと知り、乃ち時節を待たんと一族ともに伊豆江梨の里に隠れたものである。更にその先に遇れば、熊野權現の臣神であつて、世々、熊野侍と稱してゐた、幾百年來、流れ來れて來た此の血を受けた白隠の氣象は、自ら穎異勇悍、豪邁果斷であつた。

この穎異勇悍、豪邁果斷なる白隠が十一歳の折に、母に伴れられ村の昌源寺へ參詣した。恰も日嚴上人が『摩訶止觀』を講義して、其の第一卷で十種の發心を説明した第一の地獄心に及んで、

貪欲と瞋恚と愚癡との三つが、段々増長して來ると、殺生、偷盜、邪淫、兩舌、綺語、妄語、貪欲、瞋恚、邪見と云ふやうな、悪い行をするやうになり、且つ又た歴然として私無き因

白隠の母

日嚴上人と地獄心

因果の道理をも信じないで、心に少しも慚愧と云ふことを知らず、現在で悪いことをすれば、必ず未來に業報が來ると云ふことも信じない。従つて尊い佛様の教誡には少しも従はないと云ふ、極悪無智の輩は、遂に怖ろしい地獄に落ちなければならぬ。

その地獄には、八寒八熱、さては火の車や劍の山、火炮り、釜熬り、鋸曳き、罪に従つて攻める數々は一三三六あるぞ。

と、身の毛も卓立つ怖ろしさ、苦患の程を細々と語られた。初めて知つた地獄の苦患と因果の道理、腕白盛りの白隠は、子供ながらも愕然として驚き、懼然として怖れ戦いた。思へば自分分は平生、殺生を好み、蜂や蜻蛉や蟹、蛙、鳥や蟲けらの命を取つたことは數限りない……聽て彼の怖ろしい地獄の苦患を此の身に受けなければならぬかと、坐に小さい胸を痛めてゐた。

或る日、白隠は母と一緒に浴に入つた。母は至つて熱湯が好きなので、下からドン／＼燃した。湯はゴー／＼と鳴り、熱氣は箭の如く肌を刺し出した。と思ふと白隠は、あつと浴槽の籠も破れんばかりに泣き出した。如何したのかと驚いて家中の者が駆け付けて、色々と撫めたが容易に黙らない。時に母は色を作して「女見たいに、其麼弱いことで怎うするー」と叱られた。

因果の道理に怖る

地獄の中に地獄を畏る

權威ある其の一言に、流石の白隠もバツたり泣き止まつた。而して「何故泣くか」と問はれた時、「地獄が恐ろしい……今、お母さんと一緒に入つてゐても斯麼に怖ろしいが、若し自分一人で地獄へ墮ちたならば、どんなに怖ろしいかと思ひ出して泣き出したのだ」と云つた。それを聽いて母は「そんなことに泣かなくとも好い。何程も恐ろしくないやうに出来るから」と云はれたので、白隠は初めて安心して、面を蔽うた愁の雲はすツかり拂はれた。

翌る日、白隠は何時のやうに遊びに出てゐたが、又た俄に地獄のことを思ひ出した。「おッ母さんは、そんな事は心配しなくとも好い、何程も恐ろしくないやうに出来る」と、仰有つたが……「まだ自分には安心が出来ぬ、それを聽きたいと、思つたら矢も楯も堪らないので飛んで來たが、相悪く客が來てゐて、聽けなかつた。が、白隠は不圖思ひ出したやうに「おッ母さん、髪結うて下さい」と云つた。母は、もう日暮方であるに、珍らしく髪結うて呉れと云ふはと、微笑を湛へつゝ「さア結うて進ぜようから此方へ」と明るい縁端へ呼んだ。母は、白隠の髪を持つて結はうとされると、白隠の小さい手は母の手を確と握つた。「さアおッ母さん、地獄の苦患を脱れる道を教へて下さい」と叫んだ。母は驚いて「髪を結つてから聽かせよう」「否、それ

教へてから髪を結へ

を教へてから結つて下さい……教へて下さらねば、死んでもこの手は離しませぬ」と、堅い決心の色を表はした。「……」母は當惑して何とも答へられなかつた。何時しか白隠は小供ながらも佛然として怒つて曰く、「おッ母さんあなたは、其處こと云うて私を隔しなさるのですか……」と云ふより早く復たわアツとばかりに泣き出した。

信仰の指導

母は漸くに諭して「教へて上げる、教へて……さア黙りなさい」と、更に言葉を改めて「お前がそれほどまでに思ふなら、一心籠めて西念寺の天神様へお参りなさい、天神様は乾度お助け下さる。それにはお前は丑の年で、生れた月も日も時も皆丑である。丑は天神様のお使ひと云ふから、これから一心に天神様を信心なさい」と聞き、白隠は初めて母の手を離し、それから一心に天神様を信仰した。

母の死亡

白隠を幼い折から敬虔なる信仰に導いたのは此の母である。この母はこれから十年の後、白隠が三十歳にして美濃の瑞雲寺に馬翁に参じ「禪關策進」に大勇猛心を奮起して寶永元年五月二十七日に亡くなつた。白隠は如何に慟哭し、如何に寂寥を感じたであらう。然し母の死はその修行地の上に、非常なる鞭撻、策勵を興へて居るは云ふまでもない。其の後、寶曆三年に亡

善亡き母の追

き母の五十回忌を迎へたる白隠は、岡崎大侯隠君の侍側の需めに應じて、法語「蘇柑子」一篇を認めて、

昨五月二十七日は、愚母五十年の遠辰に相當候へば、追善の爲め何をがなと考へ見合せ候へども、誦經書寫禮拜恭敬等の佛事も、老來叶ひがたく侍れば、是を幸に貴妙日頃御所望の法語一篇書き認めて、法施供養の一助とも罷成らば何よりの追福ぞと、廿五日の暮方より取りかゝり、同じき廿六日の夜半過ぎ迄に清書致し、翌朝牌前へ手向け申候。處々落字等多く、文字の顛倒も間々相見え候へども此度遞覽致候。管々しき拙語、他見は憚入候へども、近侍の人々には内々に御読み爲聞被成候へば法施にも罷成べく、是亦菩薩行の手習ひなるぞと思つて、時々御読み可被成候（下略）

と書いた。読み來つて七十の老僧が雙眼に、猶ほ熱き涙の光つて居るのを見るやうである。白隠は、幾度か天地の間に唯一人の此の母を憶うては、法衣の袖を濡ほしたであらう。

二 白隠の發心

岩様が起つた

幼いながらも自ら骨格遅ましい白隠が、如何したのか、三歳の折まで未だ能う起たなかつた。利かぬ氣の白隠は、一方ならず之れを心外に思つて、早う起ちたい／＼と頻に習つてゐた。或る日、何時のやうに努めて習つてゐると、ヒヨツこり起つた。あッ起つた！と、覺えず歡喜の色が面に溢れた。それを見た一人の男は「岩様が起つた！と、狂喜して叫んだ。白隠は其のことを能く記憶してゐたと云ふ。

四歳の折に、小夜の中山の村歌を聞き覚え、而も能く暗誦しては遊びに行つた先々で無邪氣に謡つてゐたが、それを少しも誤まらなかつたので、聽く人人は「伶俐な子供だよ」と頻に感心してゐた。

五歳の折、小婢等に伴れられて程遠からぬ濱邊へ遊びに行つた。翠を籠むる磯馴松の下に、沙を洗ふ男波女波に戯れて、貝や小石など拾つて一同は嬉々として遊んでゐた。白隠は何時の間にか其の群を離れて、獨り靜に濱邊に坐し、涼しい眼を、遙に飛ぶ鷗の影を追うて、果てし知れぬ沖の彼方に放つてゐた。

浮雲を見て無常を悟る

忽ち見る海色青光の際、濛々として起る浮雲。或は遠き山の如く、或は怒れる濤の如く、

或は又た天に昇る龍の如く、忽ち湧いたと思へば忽ち消え、忽ち出でたと思へば忽ち去る。一瞬にして現じ、一瞬にして滅す、その變現興沒、暫らくも止む時はない。白隠は恰も石像の如く兀として坐し、眼は遠く雲の行衛を逐うた。その瞬間「如何も不思議ぢやなア」と、電の如く心に感じた。而して「世は無常である。この雲の變現興沒極りなきが如く、世は皆な變現極りなく、一瞬も一刻も大安心の時ではない。眞に果敢ないものである。而も人も我もその果敢ない無常の巷に立つて居るのである。こゝに何の楽しみがあるか……」と、心に深く哀しんだ。

法材の發芽

他日、宗門を覆蔭する白隠が法材の芽は、この時に苗いたのである。誠に無常觀は、佛敎入門の第一歩である。白隠は之れを教へられず、導かれずして自ら豁然として悟つたのである。故にそれが徹底して居る。白隠は無常觀に依つて、信仰の門を敲き且つ開いた。

白隠の無常觀

白隠は「於仁安佐美」の中にも、頻に此の無常觀を説いて居る。昔、悉達太子は、五印度の主じ、淨飯大王の御子にておはしけれども、深く世の無常を恐れさせ玉ひ、十九歳にて耶輸多羅俱夷女等の美夫人達を見捨てさせ給ひ、夜半に王宮を忍び出

で仙人の奴とならせ玉ひ、あらぬさまなる難辛を歴させ玉ひしも、皆是れ生死旋火の苦輪を恐れさせ玉ふ故ならずや。華山の法王の如きは、無常の殺鬼は眞乘の君をも恐れ奉らぬ事を、かねて知ろしめされけるにや、十善帝位をふりすてさせ玉ひ、勿體なくも玉體を乞食法師の身にやつさせ玉ひ、那智熊野などいへる恐ろしき山路を、召しも習はぬ御草鞋に御足は切れ損じ、染めぬ草木も無かりけりなど、今の世までも語り傳ふ。

と説き、次で中將姫、光明皇后、千代女、惠春尼、藤房卿などの得道の因縁を説き、更に又た、刈萱重氏は、筑後、筑前、肥後、肥前、大隅、薩摩、六ヶ國の大將なりけるが、櫻の花の散りて、盃に入りたるを見て、夢幻空華の理を觀じ、愛別離苦をも悟り了りて却て愛し、怨憎會苦をも悟り了りて却て憎むと、獨言して妻子をすて入道し、高野の山に入りて行ひすまじき。四の黨の旗頭、熊谷の庄司次郎直實と云ひし武士は、人々にも恐れられたる無雙の勇士なりけるが、一の谷の合戦に、源平の目を驚かす働して、敵味方の膽を冷やし、拔群の軍功を顯はしたりけれども、敦盛の最後を忘れかね、阿育が七寶も壽命を買ふ事なく、須達が十徳も無常を免かるゝ事能はずと言つて黒谷に入り、入道して蓮生坊と名乗り、目出度く行ひお

ほせたり。有爲轉變の火宅の巷に、夢幻空華の身を宿して、本の露、末の雪にも劣りながら、萬戸の富も何にかせん。(下略)
と、こゝに敬虔なる白隠の信仰がある。而して此の無常觀は、白隠が生涯を通じて變らない信仰である。

三 白隠と專念行者

原の宿に專念行者と云ふが居つた。

何處の人だか知らないが、始め神谷の圓成寺に百年程も住んでゐた。その後、小田原の長興山に登つて、黄檗鐵牛禪師に參じ、その後、又た元山中村に五十年も居たと云ふが、近頃は又た浮島が原へ来て居る。常に尺八を吹いて、一寸、狂氣坊さん見たやうであつた。が、或は又た、行者は、源義經の臣で、義經と共に奥州に落ちた常陸坊海存である。高館に破れてから仙術を得て、何處となく山野の間に棲んで居るのだとも云ひ傳へられてゐた。兎に角、自ら具はつた崇高き骨格氣品に、而もこれが仙人かと思ふやうな神變不思議が間々あつた。従つて多く

の信仰を集めてゐたのである。

白隠の家でも亦た父が信仰して、何時も招んでは供養された。その時には親類や近所の者も大勢招ばれて来る。専念行者は来るたびに、白隠が家の子供として皆と一緒に居るのを見ては「坊！坊！此處へ来い、此處へ……」と呼んでは自分の側へ寄せ、決して俗人と一緒に置かないやうにした。而して白隠が来ると、大きな手を展べて柔かな白隠の背を撫で、は「お前は人相が善い、屹度、偉い坊さんになるぞ」と云つては、又た「お釋迦様は雪山で六年の難行苦行遊ばされた、達磨大師も亦た少林山で九年の間、面壁坐禪をなさつた。お釋迦様や達磨大師ですら左うである、偉い人にならうと思へば、精出して修行せねばならぬ」と言ひ聽かせた。

専念行者に或る時又た未だ幼い白隠に、三つの養生秘訣を授けた。

- 一、食汁の餘は捨てるな。必ず湯を加して服め、
 - 二、蹲居んで尿せよ。決して立つて放てはならぬ。
 - 三、北の方へ大便したり脚を向けてはならぬ。
- この三つさへ能く守れば、必ず長命が出来ると教へた。白隠は夫れを聽いてから、終生、固く

之れを守つた。

専念行者が、白隠に最も偉大なる宗教的感化を與へたことは争はれぬ。殊に此の養生秘訣の如きは、『夜船閑話』に記されたる、白幽真人の相見と共に、特に注意すべきことである。

四 白隠の天神信仰

賢良なる母の教訓に依つて、白隠が敬虔なる天神信仰を持つて、偉大なる信念と勇猛なる氣象を具へたのは、實に十一歳の折であつた。

白隠は丑時から起きては天神經を誦し、燒香作禮しては地獄の苦患を出離せさせ給へと祈願した。然るに父は「此のよた者、毎晩起きては油使つて怎うする……子供の癖にお經なんか讀んで」と叱つた。が、母は傍から「左様にお叱り遊ばすな、貴下が御信心遊ばされぬその上に、子供の信心まで邪魔をなさつて……」と留めて、恙なく白隠の幼き信仰を相續せしめたのである。

この頃、子供の遊び道具に濱箭が流行つてゐた。腕白盛りの白隠は夫れを射ては遊んでゐた。

今日も隠れ忍びに夫れを持つて座敷に一人で遊んでゐたが、唐紙の菊の紋を、これ屈竟の的と、一矢に見ごと射透して見んと、小弓を満月と引絞り、狙ひを定めてハツシと放つた。箭は飛んだ。的は脱れて先方に當つた。床には兄が秘藏の柳涓の筆なる、柳蔭の西行の軸が掛つてゐた。箭は何の恨あつてか、西行の左の眼を射透した。白隠は、失策つた！と怖れ戦いたが、今さら何の詮方も、泣く／＼念する天神様「南無や北野の天満大自在天神、大慈不思議の力に依つて、今の落度を露知れぬやう守らせ給へ」と一心に祈つたが、元より破損の直らう筈もなく、兎角してゐると兄が外から歸つて來た。忽ち夫れを見つけた。兄は佛然として怒り、行きなりその軸を脱すや否や、母の前へ夫れを突付けて、「よた者の横着を御覽なさい」と言ひ捨て、復た外へ出て終つた。

母は擬乎と夫れを見詰めたまゝ、何とも云はなかつた。白隠は又た何とか叱られると思つたに、却つて叱られないので猶ほ辛らい、三百の鋒を以て刺される位に小さい胸を痛めた。

辛らい！と思ひ詰めると共に、白隠は、頼み甲斐なき天神様だと恨んだ。それと共に復た焦熱地獄の苦患が坐に怖ろしくなつて來た。

五 白隠の観音信仰

或る日、白隠は、天神の畫像の前に香を焼き、禮拜して念じて曰く「我が祈願をして満足せしめ給ふならば、この煙を眞直に揚げしめ給へ」と、冥坐默祈した。良久しうしてパツちり眼を開けば、一縷の香煙は蠱々として正しく、直に冲天の氣象を示して居る。「あゝ我が心願成就すべし」と、飛び立つばかりに喜んだ甲斐もなく、一陣の風、颯と吹き來れば、煙は右に左に鼻々として亂れた。「あゝ魔障遂に免るべからざるか」と、白隠は茫然として失望した。

天神の靈前に祈つた香煙が、風に吹かれてゆらく／＼と動いたと共に、白隠の心も亦た少からず動揺した。而して如何にして地獄の苦患を脱るべきかと、日に夜に煩悶した。

折柄、觀世音菩薩が普門示現の利益、廣大無邊なることを聞いた。それは恰も白隠に取つては暗夜の燈の如くであつた。この時に於て、白隠は唯だ早く此の苦患を脱離するを以て、幼き人生の最大目的としたのであつた。故にそれが爲めには何物をも、犠牲に供することを敢て辭さなかつた。乃ち觀世音菩薩の御名を聴くや否や、恰も戰場に向ふ勇士の如く、決然と起つ

て観音の信仰となり、非凡の精力と絶大の勇氣とを傾けて、その日から直ちに普門品を読み始めた。

操人形を見て感奮す

丁度その頃、村の祭があつて、操人形が来た。外題は「日進の鍋かぶり」と云ふので、日進上人の弟子日進が、鎌倉の執権北條時宗の前へ呼び出されて、鞆問される處である。

日進上人の信仰

役人は日進に問うて、「法華の行者は、火に入つても焼けず、水に入つても溺れずと云ふが、それに相違無いか」と云つた。信仰の火、胸に燃ゆる日進は、元より迫害も壓制もビクともしないから、「誠に左様で御座る」と、毅然として答へた。その權威ある一言を、信仰なき役人どもは却て心悪く、思つたから、「それならば試めして遣らう」と、鉞を眞赤に焼いて、さアとばかりに日進の股倉に挟ませた。が、日進は平然としてゐた。然らばと、この度は火花の散るやうに焼かんだ鍋を頭に冠させた。而も猶ほ日進は從容自若として題目を唱へてゐた。これを見た一座の面々、覺えず法華の威神力に感じて、異口同音に南無妙法蓮華經と唱へ出した。

法華の行者

此の壯烈なる一段を見て、信仰に飢ゑたる如き白隠の心は大に動いた。あゝ尊き哉！法華の

行者。之れよ之れ、我が願ふ處は之れであると、犯し難い決心の色が眉宇に表はれた。

出家の決心

白隠は家に歸つた後、「我れも亦た法華の行者である」と、燃ゆるが如き信仰を以て眞紅に焼けた火箸を柔かい股に觸れた。何かは以て堪るべき、チハチハツと皮膚は焦爛れた。白隠は復た茫然として力を失つた。曩には天神様の威徳無く、今は亦た觀世音菩薩の功德もない。然らば自分は、如何して怖ろしい地獄の苦患を脱れることが出来るか……苦患—脱離—法華の行者と、思ひ續けてゐた瞬間、これは出家解脱の淨界にあらずんば、所詮、此の自在の身を得ることとは出来ぬと、遣る瀬なき小き心に思つた。而して父母の前に出家を乞うた。が、父母は撫めつ賺しつして許さなかつた。正に是れ白隠が十二歳の時である。

柳澤山に登る

出家は許されなかつた。而して解脱を求むるの心は火の如く焰々と燃えた。遂に柳澤山に登り、寒流石上に一個の修練場を求めた。聳り立つ巖面に、鑿を以て自ら觀世音菩薩の像を刻つて、こゝを我が解脱の道場として、毎日こゝへ來ては安坐し、金剛經、普門品、大悲咒などを讀み、猛然として修練した。

或る日、二三里隔つた親戚へ行つたが、相悪く降り続く雨に阻てられて三四日も逗留した。

刀を提げて
水を渉る

白隠は「こんなことに愚圖々々してゐてはツマらない、寧ろ歸らう」と、言ひ出したら背かぬ
白隠は、人の止めるのを振り捨て、雨の中を歸つた。差しかゝる河は、降り續く雨に汎濫して
ゐた。それ位のことにはビクともせぬ白隠は直様、眞赤裸になつて衣服は肩へ搭けた。而して短
かい旅刀をズラリと引抜き、これを提げて激流の中を渡り越えた。後で人が「どウして刀を提
げて渡つたのか」と問いたら、白隠は「水の出たときなどには、魔物が出ると聞いてゐたから、
若し出たならば斬り捨てやうと思つた」と答へた。白隠が豪邁勇悍の氣象は躍如としてこの一
小話に表はれて居る。

蛤 觀 音

白隠の枯淡幽逸の畫の中に蛤觀音の密畫がある。海上にある一つの大きな螺蛤が吐唇氣の中に、
端嚴微妙な觀世音菩薩が端坐ましまして、その下には貝、魚、龍、蛇などの海族が隨喜作禮して居
る。而もその贊に「はまぐり身得度者、即現はまぐり身而以說法」とあつて、自ら圓脫洒落の禪機
が窺はれる。尤も之れには古い傳説がある。唐の玄宗帝は格別に蛤が御好物であつた。或る日、
帝は不思議に思はれて香を焚いて祈らるゝと、俄に梵貝具足の觀世音菩薩が現ぜられた。是に於て
愈々敬禮して夫れを興善寺に賜うた。帝は更にこの不思議な因縁に就いて終南山の惟政禪師を召し
て問答され、それより深く觀世音菩薩を信仰された。

第三章 出家と修行

一 白隠の出家

一たび出家解脱の淨界を欣求してから後、白隠の眼には何物も見えず、耳には何物も聽こえ
ず、心に唯だ出家！出家と叫びつゞけたのであつた。白隠は、再び父母の前に出家を請うた。
が、頭として許されなかつた。而も大磐石の如き白隠の決心は動かなかつた、更に三たび出家
を請うた。愛と力との父母は、今は最早その志の奪ふべからざるを知つて、遂にそれを許し
た。

時は元祿十二年、白隠が十五歳の春、軒端の梅も東風に綻ぶ二月二十五日、白隠とは宿世の
因縁ある、本地は十一面觀世音菩薩なる天濂天神の命日に、原宿の松蔭寺へ入り、單嶺和尚を
禮して師と爲し、「流轉三界中。恩愛不能斷。棄恩入無爲。眞實報恩者。」と口に唱へつゝ、緑の
黒髪を剃りこぼち、岩次郎の名を改めて慧鶴と呼び、優しき青道心の姿となつた。正に是れ曹

大磐石の如
き決心

松蔭寺に入
て剃髪す
名を慧鶴と
改む

洞宗七百年の歴史中、著しく色彩を放つた一師一證論に擔つて、霸氣横溢せる叡山和尚が氣稟孤迥の梅峰和尚と共に、遙に東海道を江戸に下る前年である。

師匠の單嶺和尚は、天性自ら大廣にして越格の氣量を持つた宗師家である。白隱を剃髮し終つて曰く「良い坊さんになれよ」と。單嶺は確に頂門に一隻眼を具した衲僧であつた。この時早く白隱が、宗門擧揚の利器なることを看破したのであつた。が、和尚は不幸にして、越えて二年、白隱が十七歳の正月に遷化なつた。

白隱は剃髮の日に、「肉身にして火も焼くこと能はず、水も漂はすこと能はざる人たらずんば、設ひ死すとも休まぬ」と、心に堅く誓つた。白隱が一代の修行、一代の辨道は、此の初發心の大誓願の外に出なかつた。是れ即ち觀音の妙智力を信じ、自ら正に生身の觀世音菩薩たらんと期したのである。

生身の觀世音菩薩たり、法華の行者たらんと期する白隱は、又た法華經を信じた。法華經は如來出世の本懷、一代五時の經王である、受持讀誦の功德も亦た無量無邊であると聽いたから、大勇猛心を振ひ起し、朗々として讀んだ。一部八卷、二十八品を讀み終り、喟然として嘆じて

師僧單嶺和尚

初發心の大誓願

佛經に疑着を挟む

禪叢寺に掛錫す

江湖風月集を聴く

曰く、唯有一乘法、諸法寂滅等の語を除いては、他は皆な因緣譬喩である。此の如きものが若し功德ありとすれば、諸史百家の書も亦た功德がある」と。憤々として佛經に一大疑着を挟んだ。

この後二十七年、白隱が四十二歳にして法華經に大悟するまで、白隱は此の萬重の鐵關に向上の一路を遮斷されてゐたのである。

二 文字に耽溺す

三衣一鉢、身を雲水に托し、悠々として行脚の旅に上つたのは、白隱が十九歳の折である。先づ着いたのは程遠からぬ清水の郷、禪叢寺である。

まだ剃髮しない以前に、『禪林句集』を讀んだ白隱は、こゝへ來て千英和尚か『江湖風月集』の提唱を聽いた。開卷第一に

氷壺凜凜玉龍蟠　吐三出明珠照膽寒
好是山堂無月夜　一天星斗墮蘭干

文字に沈耽す

文字に沈耽す

四四

と誦し來つては、如何に其の若き禪情と詩思とを熱せしめたであらう。
 こゝに端無くも一つの問題に逢着した。偶ま巖頭渡子話に依つて『五家正宗贊』を繙き、
 巖頭と云ふのは、支那、鄂州の巖頭院に住んでゐた全義禪師である。偶ま唐末の騷亂に際し、
 賊徒が巖頭院へ押し込んで來て、遂に禪師を刃に掛けて殺した。
 禪師は或る日、大衆を集めて「老衲が死ぬ時は、呔と一聲唸るだけぢや」と云はれたが、果
 して其の賊刃に墜れられる時、一聲、呔と唸られた。が、その一聲が數十里の外に聴えた。
 と云ふ意味の傳記を読み、白隱は悚然として恐れた。「巖頭は五百年間出の大善知識であつた。
 而も其の臨終は淺猿しくも賊徒の刃に墜れた。斯の人に己に然りとせば、誰か又た三途の
 苦難を遁れ得るであらうか。さても亦た出家の功德は何處にあるか……あゝ出家解脱の淨界に
 入つて、この苦難を遁れんと思つたに、今はそれも泡沫と消えた……と云つて今さら還俗もな
 らず。あゝ思へば情ないことをした……」と、五臟六腑も引裂かんばかりに悔いた。
 如何にせば、堪へ難き此の苦痛を遁れ得るかと白隱は復たも煩悶、懊惱、焦慮した。而して
 翻つて外道の見を起し「如かじ、心を縦にして平生を樂まん」と、慰安を文字に求め、詩

書文學の濃き酒に酔ふた。

これより三年間、白隱は全く詩書に耽つて、詩文は李白、杜甫、韓退之、柳宗元など唐宋の
 諸大家より、書は御家流元祖の尊圓や養拙などを學び、全くその囚となつた。是れ即ち白隱が
 天稟の詞藻を倍す富勝ならしめた所以である。

寶曆九年、白隱が七十五歳の折、遠州高塚の小野田五郎兵衛のために、年まだ若きその娘四
 人が、亡き母などの菩提のために、平假名にて法華經を書寫せるを讚歎して送れる『高塚四郎
 孝記』に平假名を論じて、

古來、眞名字を以て法華を書寫し玉ひたる人々は、數も限も無き事なれども、假名字もて書
 き納め玉ひし人は、漢土にも本朝にも終に聞も及ばぬ。心無き人々は、平假名書きなど云へる
 は、輕々しく拙き事に思すめれど、熟々顧ふに假名文字は、眞名には遙に勝れる事あり。

仔細は、開闢の後、三代以前、一向文字なかりし時、繩を結びて以て萬記の覺えとす、是を
 結繩の政といふ。後來、蒼頡といへる者、鳥獸の足跡を見、虫の木をむしばみたるを見て、
 繩に文字の形を作る、是より文字次第に起る。此故に王導といへる詩人、蒼頡といへる題に

文字に沈耽す

四五

文字に沈耽す
 四六
 て詩あり、見跡成人代結繩、皇風儒教蔚然興と。後來、世衰へ人薄く、中に就きて秦皇暴逆なり。常に酷吏の輩を愛し、世を苦しめ民を食る、尋常世上に文字ある事を憎み嫌ふ。其仔細は、世に文字書籍あれば、古の仁君明主達の寛仁博愛の政道を見習ひ聞覚え、當時無道聚斂刻薄非義の苛政を憎み誹るべしと。此に於て一切の人をして無智昏愚、犬馬に齊しからしめんとて、儒を促らへて盡く坑にし埋め殺し、書籍を集め積み重ね火を放ちて灰燼とす。天下仁道の根を断ち、文字の底を拂て以て足れりとす。然れども天下萬機の政務に於て、文字無うしては事足らず叶ひ難き事ども多し。乃ち趙高、李斯が輩、再竊に文字を制して以て不忘に備ふ。既にして大秦俄に亡び、漢家四百年の帝基を建つ、子房、肅何、韓信、周勃等の諸賢、互に相議し大に文字を起す、枝葉盛んに繁茂し、丁刀相似、魚魯參差たり。天象時候を分ち、生植氣形を羅らね、平仄を定め韻礎を居ゑ、字彙あり韻府あり、數千百萬言、算數も及ぶべからざるに到る。然りといへども凡下の制する所、字形醜拙、笑つべき點畫多し。

忝じけなくも我が日域平假名の如きは、高野山の開祖遍照金剛大士、天然の宿智を圓備せさ

せ玉ひ、渡天して悉檀の微を傳受し來らせ玉ひ、忽然として四十八字の大陀羅尼を説かせ玉ふ。色は匂へど散りぬるを、我世たれぞ常ならむ、有爲のおく山けふ越えて、あさき夢見じゑひもせずと。此偈、古來、諸行無常等の四句の偈に配當すといへども、内秘は實に是三密不思議の大陀羅尼門なり。此の大陀羅尼の文字を以て、純圓獨妙の大經典を清書す、何づれの善行か是に勝るべき。

と云ふが如きは、實に堂々たるものである。且つ又た白隠が、常に通俗に、平易に、平民的に、眞禪の鼓吹を努めたる如きは、偶ま以てその蘊蓄の深きを想像することが出来る。

三 馬翁と『禪關策進』

文字に依つて大安樂境を開拓せんとした白隠は、その頃『美濃の荒馬』と仇名されて、孤危峭峻なる機鋒を藏し、特に突々たる文彩家の馬翁和尚が在ることを聞いた。

仍ち翌くれば寶永元年、二十歳の春、旅の仕度も整へて、遠州から三河と東海道を上り、尾張を過ぎて木曾川を涉り、聽て大垣在の檜木村の瑞雲寺と云ふに馬翁を訪うた。

馬翁の下には、熊澤蕃山の子で出家した穩上座がゐて、初めて相逢うて忽ち十年の知己の如く、互に意氣相投じて斷金の盟を結び、専ら詩文の研鑽に心を用ひた。白隱は此に天馬、空に行くが如き文才を、縦に養つたのである。

猛に精彩を着けて專一に研鑽してゐた白隱の心に、勃然として暗い雲が蔽うた。而して云ひ知れぬ不安と寂寥とに襲はれた。偶々瑞雲寺では書籍の虫干をしてゐた。見れば書架には内外の典籍、山の如く堆く積んである、白隱は進んで禮拜し、心に念じて曰く「儒、佛、老、莊、諸家の道、我れ何を以て師とすべき……南無三世一切の諸佛菩薩、護法の諸天善神、願くは我がために安心の道を教へ給へ」と、瞑目して手に任せて一巻を攫つた。

悪魔となるか、善神となるか、我が運命の決する處は此の一巻にあると、更に心に誓ひつゝ、バツと眼を開けば、开は「禪關策進」であつた。白隱の面は燦然として光明に輝いた。「あゝ我れは猶ほ禪門に宿縁深きか」と頂受し、更に復た「我がために正路を示し給へ」と念じつゝ、繻どけば、斯は开も如何に、引雉自刺の章が出た。曰く、

慈明、谷泉、瑯琊の三人。伴を結んで汾陽に參ず。時に河東、苦寒。衆人これを憚る。慈明、

禪關策進を
見る

瞑目して一
巻を攫る

慈明の引雉
に感奮す

馬翁の鉗錐
に觸る

馬翁、白隱
を看破す

志、道に在り、曉夕、忘せず、夜坐、睡らんと欲すれば、雉を引いて自ら刺す。後、汾陽に嗣ぐ。道風大に振ひ、西河の師子と號す。(原漢文)

これを讀んで白隱は猛然として感奮興起した。而も亦た慈明は常に「古人刻苦、光明必ず盛大なり。我れ又た何人ぞや、生きて時に益なく、死して人に知られず。理に於て何の益あらんと自ら責めたことを知つて、決定心を得るは唯だ刻苦にあると悟つた。

白隱は「禪關策進」を座右銘として、朝より夕に唯だ刻苦した。惡辣險峻なる馬翁の鉗錐に觸れて、何者をか得なければならぬと刻苦した。こゝへ集つた大勢の若い坊さん達は、辛辣な馬翁の機鋒に乗ねて、その中には去つて終つた。が、白隱は「翁の博覽にして而も親切に世話して呉れるのは容易に得られないから」とて去らなかつた。この時に於ける白隱の精神は、恰も白日、霜を飛ばすの概がある。

或る日、白隱が井戸端で大根を洗つてゐた。馬翁は側へ來て「鶴や。起つ鳥は勇いなア」と言つた。廣く玄關を開き、久しく四海の龍衆を接化してゐた馬翁は、早くも白隱が無雙の大器を看破した。

瑞雲寺の一年

美濃の行脚 五〇
瑞雲寺の一年は甚だ短かゝつた。併し馬翁と「禪關策進」は、白隠の辨道に、終生忘るべからざる偉大なる感化を興へた。且つ夫れこの時に當つて、白隠をして白隠たらしめた、最も賢良なる母の訃音に接したのであつた。江山五十里の旅の果に、唯た一人の母の訃音を手にした白隠は、如何に世の無常と悲哀とに慟哭したのであらう。平生、豪邁勇悍を以て誇る白隠が心の奥底に、「人生悲哀」の四字が、烙印の如くに捺された。瑞雲寺は白隠に取つて、歡喜と悲哀との記念道場であり、光明と闇黒との辻であつた。蓋し此の一年は、白隠が八十四年の生涯に、癒えぬ深い傷を残した年であつた。

四 美濃の行脚

美濃は、觀世音菩薩化縁の國土である。西國三十三所の打ち納め、順禮者が親と思ひし笈を、脱いで納むる谷汲山華嚴寺は茲にある。而も白隠が精神的に復活したる瑞雲寺からは、近く三四里である。

白隠は馬翁の下に一年を送り、翌る寶永二年、二十一歳の春、一先づ瑞雲寺を出て、こゝより

觀音化縁の國土

保福寺に南
前和尚を訪

靈松院に萬
休和尚を敲

大巧和尚を
東光寺に見

愚堂禪師の
因縁

り更に北の方數里の山奥なる、武儀郡洞戸の保福寺に南前和尚を訪うた。

唯見る亂山重疊として白雲自ら搖曳し、脚下に潺湲として流るゝは板取川である。白隠は坐して山を看み、臥して水を聴き、溪聲不斷の廣長舌を讚歎し、山色常在の清淨身を瞻仰し、日夜に南前和尚の毒手に禪弄せられつゝ、寂歴たる空山に涼しい夏を過ごした。

秋、保福寺を辭し洞戸の山を南に出で、岐阜に近い山縣郡岩崎の靈松院に萬休和尚を尋ねた。が、機縁、未だ熟せず、幾くもなく去つて、こゝより程遠からぬ伊自良の東光寺に大巧和尚の玄關を敲いた。

大巧は、當時、齡 纈に而立に過ぎなかつたが、而も大に玄關を開いて來賓を接し、來る者には齊しく山色の青きを見せしめて、頗る宗風を擧揚して居つた。道を求めて飽くことを知らぬ白隠は、得々として此の若き師家に參じたのであつた。

然し白隠が東光寺へ行つたのは、親しく大巧の機鋒に觸れんとした外に、更に床しい因縁があつた。夫れは白隠が法の曾祖父にして、而も濟門近時の香宿たりし愚堂東寔禪師が、勇ましくも呱呱の聲を擧げられたのは此の伊自良の村である。而して其の剃髮出家の道場は實に此の

東光寺であつた。足、親しく美はしき其の山水を踏み、身、親しく尊き其の道場に入り、眼のあたり儼然として常在不滅なる愚堂禪師の清淨法身に、大寂定中に相見して、宗門に再び一華五葉の春を開くの消息を商量せんとしたのであつた。而も亦た此の時は、愚堂の滅後僅に四十五年であつた。白隠は東光寺に、愚堂の暖皮肉と活骨髓を得んとしたのであつた。

愚堂の機鋒

愚堂は、當時濟開の光であり、鹽であつた。萬治二年、妙心寺開山關山慧玄禪師の三百年忌に際し、愚堂、偈あり。曰く、

二十四流日本禪。惜哉大半失其傳。

關山幸有愚堂在。續燭聯燈三百年。

愚堂と大愚

と、其の意氣、正に江湖を歴して居つた。大愚宗策、傍に在り見て曰く「大愚も亦た在り、何ぞ幸に愚堂の在る有りと云ふを得ん」と、愚堂、笑うて首肯し、直に筆を執り第三句を改めて「關山幸有兒孫在」とした。愚堂も愚堂なり、大愚も亦た大愚である。當時、二人の意氣、正に大に壯なるものであつた。

この意氣壯大なる愚堂の法孫に、豪邁果敢なる白隠を出したのは決して偶然ではない。

五 『四十二章經』と精進勇猛

松山の正宗寺

四十二章經

山水風土の美はしき美濃の天地に、出入三年、行脚してゐた白隠は、寶永三年の春、限りなき水木の恩を謝し、月漏る板屋もなき不破の關を西に踰え、一たびは若狭へ行つたが、更に二百里の江山を跋涉して、南海遠く伊豫、松山の正宗寺へ行つた。

時に逸禪和尚が『佛祖三經』を講じて居られたので、『四十二章經』の第二十七章、

夫れ道の爲めにする者は、猶ほ木の水に在て、流れを尋ねて行くが如し。兩岸に觸れず、人の爲めに取られず、鬼神の爲めに遮られず、河流の爲めに住められず、亦た腐敗せず、吾れ此の木決定して海に入らんことを保す。學道の人、情欲の爲めに惑はされず、衆邪の爲めに矯されず、無爲に精進せば、吾れ此の人の必ず道を得んことを保す。

と云ふに至つて、白隠は聳然として怖れ、猛然として悟つた。唯だ爲す所は大勇猛精進のみ。辨道の秘訣は、唯だ精進に在ることを痛切に悟つた。これより『禪關策進』と『四十二章經』とは、白隠が唯一の師友となつた。

精進勇猛

或る日、城下の家中から、正宗寺には學問のある坊さんが多いと云ふことを聴いて、御供養申したいから五人来て頂きたいと請待した。白隠もその一人に入った。

さて時候の挨拶も済むと、主人は自慢の書畫骨董を出す。先づ展べる書畫。勿ち讀み悪い一軸に差掛つた。奔放の草書、初めから讀めぬと、一同も殆んど閉口した。一同は『師兄如何で御座る』と問うたから、その裏に手で姑婆の二字を書いた。が、猶ほ解らなかつたので、『姑婆は、稼悪いの義で御座る』と云つたので、一同は手を拍つて哄と笑つた。

聽て出された一軸は、恭しくも錦の囊に桐の箱、最と鄭重にしてあるので、恐る／＼展へて見ると、一向見榮えのせぬ一軸に、これはツと失望しつゝ能く見れば、筆蹟は頗る拙いが紛ふかたなき大愚宗築禪師の手澤である。大愚禪師と云へば、白隠が法曾祖父たる愚堂と同時代の宗匠である。

白隠は感じた。『書は拙い。が、此の如く尊重されるものは、大愚禪師の徳である。あゝ人の尊ぶものは徳であつて、決して詩書文筆ではない……あゝ我れ誤てり。詩書文筆を以て世に起たんとしたのは實に愚であつた……』と翻然として復た大悟し、寺に歸つて来て直に、常に秘

姑婆

大愚禪師の筆蹟

書畫筆墨を焼く

精進の權化

禪堂の本尊

藏して居つた筆道傳授の書畫、處々から貰ひ受け又は寫し來つた祕書及び數十の筆墨を、惜氣もなく一束にして火を付けて灰燼に附した。是れより脱然として文字を捨て、唯だ道を修め徳を修めんとして、愈々金剛力を振ひ起し決然として大勇猛精進した。これ實に白隠が精神界の一大革命であつた。

白隠は之れより後、全く精進勇猛佛の權化となつた。白隠が『於仁安佐美』の中に老僧若年の時、眞言宗の寺に入りて、初て東方降三世等の五大尊の像を見けるに、心に大に怪しみ謂へらく、狼藉なる風情の佛々はある。獨相撲の守神か、當て身、やはらの大尊か、何にもせよ、無公義なる佛なるぞと、笑ひたりしが、近頃思へば、行者勇猛精進の一機を標して、貴とぶべきの靈像なり。四尊勇猛の精進力に守護せられて、中尊大聖不動明王は、嚴然として立たせ玉ふなるめり。つらく／＼顧ふに、四尊惡毒瞋怒の風標は、誰か計らん、諸佛無上の大禪定、金剛無作の戒體にして、盤に和して托出する夜明珠。彼の潜行密用、唯だ能く相續するを、主中の主とする底の、内秘の大事にして、定に祕中の祕訣なる事を。近代立ち枯れ禪法達の、禪堂の大尊にせま欲しき事よ。

と思出を記し、而猛心を以て懈怠懶惰なる當時の立ち枯れ禪者を覺醒せんとした。こゝにも亦た白隠が宗門中興の精神が、潑漣として閃いて居る。

六 伊豫より故郷へ

一たび文字を捨て、心地の革命を叫んだ白隠は、こゝに初めて『不立文字、教外別傳』の妙旨を探らんとした。而して過去四年間の文字の耽溺は、後年、文彩縦横の活衲僧たらしめて、若人、見性、掌上を見るが如くなる事を得んとならば、剛み勤めて須らく隻手の無生音を聞くべし。隻手を聞得て徹底なる事を得ば、捨去りて一切の音聲を止めよ、而して後、精はしく諸史百家の書を究めて、徧く大法財を集め、常に勤めて大法施を行すべし。『八重葎』と喝破して居る。

備後より伊豫へ
故郷に歸る旅

乃ち翌る寶永四年の春、正宗寺を辭し、海に航して備後に渡り、福山の正壽寺に正宗讀會を終へ、而して五年振に懐かしき故郷に歸らんと、五六人の伴と共に東の方に下つた。旅は道伴れ世は情、代る名所を話の友として幾つかの宿を重ねた。が、白隠は獨り『狗子佛

備前の岡山

性の話』に參じつゝ、道中とても一刻も油斷をしなかつた。體て着いたのは備前岡山である。岡山は池田氏三十五萬石の城下、その城樓の壯麗は、蓋し山陽窟指である。加ふるに朝日山や兒島灣、畫のやうな自然の山水。伴れの者達は『怎うぢや、立派なことは……好いぢやないか、見て行つても』と勧めたが、白隠は『我が道末だ成らず、遊んで居るやうな暇はない』と、目を瞑つて見なかつた。

次で播州路に差掛つて或る山寺に宿つた。唯だ見性の外に餘念なき白隠は、兀然として面壁端坐した。

精進の一偈

夜靜かにして天牙え、潺湲として檻前に瀉ぐ溪聲が寒しい。白隠は其の聲を聴きつゝ、心は次第に冴えて鋭い針の如くになつた瞬間、聳然として深く感じ、忽ち一偈を打した。曰く、

山下有^二流水^一。 滾^〇滾^〇無^二止^一時^一。
禪心若^レ如是^一。 見^〇性^〇豈^二共^一遲^一。

見性の誓願

と、白隠は水の如く止む時なく、倍す精進して速に見性せんと誓つた。翌る日、こゝを辭して伴と共に、明石、須磨、舞子と畫のやうな路を歩いた。偶ま一人の友

伊豫より故郷へ

が気分が悪いと云ふので、その包を負んで遣つた。又た行くと一人の友は「私は非常に疲れた。師兄は立派な身體だ、どうだ、扶けて頂けぬか」と云ふので白隠は、平気で「持つて遣らう」と、又たその包を負ひ、自分のと合せて三人前持つたのである。が、心の中に「この少しばかりの功德に依つて、早く見性が出来るやうに」と私に念じ、猶ほ「狗子の話」に参じつゝ草鞋踏み締め歩いて兵庫に來た。

こゝから舟で桑名へ行くことにした。

恰も晴れ渡つた青海原に、濤を輾つて一輪の大月が浮んだ。舷に碎くる金波銀波の美しさに、乗合はせた人々も打興じて談笑に耽つた。白隠は過分な勞力に思ひの外疲れたから、珍しい世間話を他所に聞きつゝ、ぐツすり寝込んだ。

甘眠一覺、あアツと、大伸して白隠が眼を開けば、舟はまだ動かないで港に居る。「おやツ」と驚いて「餘ッ程眠たと思つたに……」と獨語きつゝ、怪訝さうに「オイ船頭さん、まだ出ないのか」と問うた。聽くや否や船頭は聲荒らけ「何だとツ、この寝ぼけ坊主！ 昨夜、少し出ると俄の暴風雨に、一緒に出た十艘ばかりの船は大方難船して終つた、幸ひ金毘羅様の御蔭で

海上の一夜

暴風雨中の甘眠

安住不動の大禪定力

多情多恨の人
馬翁の看護

助かつたのが此の船だけだ……」と、云はれて白隠は吃驚。

見ると傍の人々は何れも顔蒼ざめ唸つて居る。彼方此方も嘔吐一ぱい。白隠は覺えず合掌作禮し念じて曰く「諸天善神の御擁護に依り、その苦痛を知らずして過した」と喜び、「これも亦た昨日、人の包を負んで遣つた陰徳の陽報である」と、深く自ら信じて喜んだ。併しこゝに白隠が安住不動の大禪定力があつたことが知れる。

桑名へ着いたとき、不圖、大恩師たる瑞雲寺の馬翁が久しく病氣で、而も看護の人に不自由してゐられると聞いた。

道のために親切な白隠は、恩義のためにも亦た忠實であつた。馬翁の病氣と聞いたときは、忽ちその眼は涙に曇つた。遂に友と分れ、決然として直に美濃へ行つた。而して荒れ果てた瑞雲寺の門を叩いた。馬翁は思ひ掛けぬ白隠の訪れに實に驚き且つ喜んだ。恐らくは白隠と共に相擁して泣いたであらう。蓋し白隠も亦た多情多恨の人であつた。

白隠は、海よりも深き馬翁が大恩の一滴にも報いんと、心を盡くして看護した。幸に病は次第に癒くなつたので、それより三月を経て十月に馬翁は床を拂つた。白隠は看護に來た甲斐

伊豫より故郷へ

あつたことを喜びつゝ、さらばと別れて瑞雲寺を出た。
 春花秋月こゝに五年、淋しい旅の空に過した白隠は、生れ變つた新らしき人となり、身には昔ながらの墨染の衣を纏ひつゝも、心に錦着て歸る故郷の空。玲瓏として玉を削る恚なき富士の雄姿を仰いで、覺えず溢るゝ微笑を禁することが出来なかつた。
 この冬に富士山は、天地を焦土とせんばかりに大噴火した。

第四章 大悟と菩提心

一 英巖寺の大悟

心火の爆發

富士山が大噴火して幾何もなく、白隠が心中も亦爆發した。それは英巖寺に於ける大悟である。

高田の英巖寺

越後高田の英巖寺に性徹和尚が大に宗乘を擧揚して、北陸の天地を風靡して居ると聞いた白隠は、五年振に松蔭寺に歸つて、其の席未だ暖かならざるに、復た身を雲水の安きに任せて、春とは名のみの正月に、名にし負ふ越路の大雪を踏み分けて英巖寺に行つた。

人天眼目

白隠は『人天眼目』の講義を聴きつゝ、青い眼は徒に文字の上に注がれてゐたが、心は高き雲の上、頻に或るものを求めて遙か天外に翔けてゐた。心こゝにあらざれば聴けども聴こえず、見れども見えず、食へども其の味を知らず、茫々として雲中に坐するが如くである。英巖寺の裏に藩公の廟所がある。白隠は是れ屈竟の選佛場と、本の講義を聴いた後は獨りそ

英巖寺の大悟

豁然大悟の
一夜

巖頭和尚は
健在

慢心の天狗

こへ行つては、兀然として石像の如く端坐した。一日、二日、三日と次第に坐禪三昧に入り、無想の想を想とし、無念の念を念とするもの十餘日。夜一夜、佛の道を尋ねつゝ恍然として曉に達した。折柄、響く遠寺の鐘聲、あゝ鐘が鳴ると思ふ瞬間、忽然として根塵を剝落し、恰も耳邊へ來て殷々と洪鐘を撃つが如くであると思ふ途端、豁然として大悟し、身心共に脱落して、覺えず『ああッ！ 巖頭和尚は健在だなア、巖頭和尚は健在だなア』と二聲叫んだ。

悟つた！ 鬼の頸を取つた！ と喜んだ白隠は、徑ちに方丈に上つて性徹和尚に謁し、所解を呈した。性徹は餘りハキ／＼した返辭もしなかつた。衝天の意氣を持つた白隠は、『え、何を愚圖々々云ふ』と思ふや否や、ピタツと和尚の頬を打つて、後をも見ず出て行つた。更に會中の二三にも示したが駄目であつた。

白隠は忽ち増上慢の天狗となつた。話相手になるやうな奴は一人もゐないと見蔑つて終つて、其處邊にゴロ／＼してゐる坊さん達は恰も土塊のやうに見えた。而して『五百年來自分の如く斯麼に氣持よく悟つたものはない……天下の禪林には恐らく我が機鋒に當るものはないであらう』と、冷やかに笑つた。

新到の安居
僧

無頼漢の屯
所ではない

信州の宗格

白隠は十九歳の春、禪叢寺に『江湖集』を聴いてから丁度今日まで六年間。巖頭！ 巖頭！ と、一日も忘れることが出来なかつた。それが今は廓然として瑩徹し恰も水桶の底が脱けた如くであるから、實に痛快であつたに違ひない。

時に一人の若い坊さんが、安居させて貰ひたいと遣つて來た。見れば骨格逞しく風采自ら秀で、何となく違つた處のある男だ。これは下手に世話は出来ぬと思つたから、白隠の處へ『斯う云ふ男が來たから頼む』と云つて遣ると、白隠は何時／＼手に負へぬやうな奴ばかり持つて來るので、ちよつと意地悪く『こゝは無頼漢の屯所ではない』と出たものだから『否々、決して其處わけではありませぬ、是非、師兄にお世話を願はなければならぬから』と云つて、聽てその男を伴れて來た。

來た男は信州の宗格と云ふのであつた。白隠は傲然として『柄は駿河の慧鶴である。ガンガン怒鳴る性分だから、若しも氣に入らぬことがあれば、遠慮なく出して終ふから氣を付けなさい』と云つた。宗格は柔なしく頭を下げた。而して至つてまめ／＼しく働いて居つた。

白隠は兎に角に一座の長老であるから、毎日『人天眼目』の講義の濟んだ後では、三人、五

正受老人の鉗鉗
人の連中が来ては、彼處はドウである、此處はカウであると、お互に商量してはゆく、宗格は、何時も傍で靜に聽いてゐた。

或る日、外の者が去つて終つた後で、宗格が白隠の前へ来て、「あの人はモウ長くこゝに居るのですか。彼處風に見て居られては困ります」と、更に彼處は師匠が違つて居る、此處は一同が誤つて居る。何處は師匠も一同も共に間違つて居る、が、此の一則は實に美事な見識であると、無遠慮に批評して而も壁立萬仞の識見があり氣概があるので、白隠は愕然として驚き、赧然として今までの傲慢を取ぢた。その恥づかしさを忍んで、「如何して御修行なさつたか」と、最も謙遜な態度で聞き、初めて信州飯山に絶大の作家、正受老人あることを知つた。「あゝ宗門に猶ほ此の人あるか」と喜び、更に大勇猛心を振ひ起して、直に行いて其の毒手に觸れんとした。

二 正受老人の鉗鉗

戸隠、黒姫の連山重疊たる處、滾々として北に走つて越後に入る千曲川の涯、こゝに本多氏

の居城、飯山はある。城下を離れた上倉村に正受庵があつて、道鏡慧端禪師が孤危險峻なる機鋒を藏し、最も多衆鬧熱を惡んで竊に綿密の宗風を擧揚して居られる。これが即ち正受老人である。老人は、愚堂東寔の孫で、正に法を至道無難に嗣いだのであるから、曩に美濃の東光寺に遊んだ白隠には、こゝにも亦た深い因縁がある。

水簾刈る北信濃の春は漸く閑なる四月に、白隠は宗格と共に飯山城外の幽峭深邃なる山徑を分け入りて正受庵を訪れた。

折柄、正受老人が柴刈つて居られるのに遇つたから、宗格が「越後から、駿河の慧徳と一緒に來た」と云ふと、翁は「おう」と云つたまゝ、折角、尋ねて來たものを、能う來たとも云はないで、却て邪魔など云はぬばかりの様子に、白隠も一寸面白くなかつたから、宗格に「杖が來て惡るかつたか知らん」と云つた。

正受老人が一目チロリと睨んだ時、白隠の心の底まで底氣味悪いほど見透された。老人は「此奴、慢心が勝つて居るな」と、口には言はねど心に嗤はれた。天下に我が機鋒に當るものは恐らく無からうと自ら思つた白隠は、正受老人をも猶ほ來て見れば左程でもない、益す慧

に誇り、語に豊にして、相見の折、我れこそはと云はぬばかりに一偈を持つて行つた。正受老人は其の偈を左の手に握つて『這箇は是れ汝の學得底』と罵聲一番し、更に右の手を展べて『那箇か是れ汝の見得底』と叫んだ。『こんな文字が何になる。貴様の眞箇に悟つた處を出して見せよ』と云ふやうな意味で、初めから白隠を側へ寄せ付けない。併し流石は白隠である。それなりで黙つては退かぬ。『若し見得底の呈すべきならば、須らく吐却すべし』と云つて、嘔吐の聲をした。老人は直に一拳を興へて『參は須らく實參なるべく、悟は須らく實悟なるべし。即今、汝、趙州の無。作麼生か會す』と問うた。白隠は言下に答へて『趙州の無。何れの處に向つて手脚を着けん』と云つた。元來、無である。故に會とか不會とかと、手脚の着けられるやうなものではないと、超然獨立の氣象を示した。が、それ位のことでは承知するやうな正受老人ではない。忽ちその手を展べて白隠の鼻をギユツと抑へ『さても大きい手脚の着けやうぢやナ』と云つた。

白隠は身體ビツシヨリ膏のやうな汗を流した。恰も茶無者の如く、一擧に正受の玄關を敲き破つて終まはうと思つた甲斐もなく、却て片ツ端からギユウくと抑へられて、これでもかこ

れでもかと慢心の鼻を折つて終はれた。而して老人は『其麼ことでは駄目だ』と、意氣は正に銀山鐵壁、容易に肯はぬ。

白隠の慢心は未だ眞箇に去らなかつた。幾度か商量しても老人が容易に許さぬに就いて、心竊に不平で『老人は俺の痛快なる見悟を知らないから、斯麼に輕蔑するのである。好矣、今度と云ふ今度は、老人を殺すか俺が殺されるか、命懸けの勝負を遣らう』と、恐ろしい決心を以て入室し所解を呈した。老人は突然『馬鹿ツ！』と嗚りつけた。が白隠は何處までも自分の我見を通さうとした。

老人の眼は怪しく光つた。と思ふと忽ち起つた。猛然として白隠を引捉へ、金鐵のやうな熱拳を振上げて、骨も微塵に摧けよとばかりに二三十ぶツ續けに殴つた。その揚句、阿修羅の如く狂ひ立つた勢に、『この馬鹿ツ！』と云ひさま、力に任せて縁下へ蹴飛ばした。

蹴落された白隠は、全く茫然として自失した。老人は失れを見て、さも心快ささうに呵々と大聲に笑つた。その聲に、白隠は初めてハツと氣が付いた。氣が付いたと同時に、老人の親切と有難さが沁々と骨髄に徹して、辨慶の如き白隠も、ワツと聲を揚げて泣いた。而し心に猛省

正受老人の依囑

する處があつたから、直に堂に上つて所解を呈したが、老人は猶未だ許さなかつた。

白隠は初めて我が愚かなることを知つた。惡辣險峻にして而も眞情流露せる正受老人の機鋒に逢うて、慢心の凝結となつて死んだ白隠は、漸く復活したのである。こゝに見性せずんば誓つて此の座を立たぬと、脊梁骨を堅て、正身端坐した。

或る朝、白隠は例に依つて飯山城下へ托鉢に出た。或る家の前に立つた。すると、婆さんは惶食に『お断りだよ』と云つた。が、白隠は一途に見性を求めて居るので、茫然してその聲を聴かなかつた。婆さんは『お断りだと云ふに、まだ愚圖々々して居る』と云ひさま、持つてゐる竹箒で、打つとはなしに白隠を打つた。

打たれて白隠はバツたり倒れた。而して豁然として大悟した。

いそぐと正受庵に歸つて来た。まだ鬮を跨ぐや跨がさるに正受老人は、さも嬉しうに『慧鶴！ お前は悟つたナ』と云はれた。

三 正受老人の依囑

萬重の鐵關を透過して、正受老人から悟つたナと許された白隠は、殆んど手の舞ひ足の踏む處を知らなかつた。

その夜、淋しい禪床の夢に、白隠が懐かしいお母さんが來られた。見ればそのお顔は光明に輝いてゐた。崇高い感に打たれつゝも懐かしさに、白隠は『お母さん！』と呼んだ。母は、さも喜ばしうに『妾も此の度は、公の道力に依つて出脱して彌勒菩薩の内院へ生れたから安心して呉れよ』と云はれた。白隠は喜び且つ驚いて『それでは今までは何處にゐられたか』と、戦慄く胸を押へつゝ漸く問うた。『北方の都主王の處にゐた』と、母は靜に答へた。白隠も稍や安心して『それでは別にお苦惱もありませんでしたか』と問うた。母は極めて無雜作に『少しも無かつた』と答へられた。が、白隠は、我を安心させるためにあゝ答へられるのではなからうかと、心配でならなかつたから、『お母さん、それぢや、一寸、足を出して御覽なさい』と云つた母は不思議に思ひつゝも、云ふまゝに細い足をスツと伸ばされた。白隠は、恭く其の足を頂禮しつゝ、靜に裏を撫で、見ると、至つて平かに肉付も良かつたので、『左うですね、少しもお苦惱の様子はありませんね』と初めて安心し、拵へ切れぬ歡喜の色が面に溢れた。と思

正受老人の依囑
ふと、母は別を告げて光明赫耀として異香續紛たる中に其の姿は消えた。
まだ他郷放浪の中に早く母を失つた白隠は、半ば人生の希望を失つた。善きにつけ悪しきにつけ、嬉しいにつけ悲しいにつけ亡き母を思ひ出さぬときとはない。今や正受老人の印可を得て、嘗て経験したことの無い歡喜を持つたにつけ、あゝ母在しゝならばと、復も思ひ出したのであつた。

正受老人の依囑

これより益々奮勵して、惡辣なる正受老人の鉗錘を甘じて受け、無相心地戒の眞訣を聞き、洞山五位の妙訣なども問うた。或る日、老人に伴いて壇家の供養に赴いた。偶ま差掛つた險岨の危徑、俯せば倒り立つたやうな千仞の深谷。仰げば落ちんと欲する萬丈の危巖。竦然として寒毛卓立するの時、老人は振り回りさま白隠を引ツ捉へ「靈山會上に於て世尊が金婆羅華を拈じ、迦葉が破顔微笑した時、世尊は「我れに正法眼藏涅槃妙心、實相無相微妙の法門あり、摩訶迦葉に附屬す」と云はれた。この拈華の消息如何ちや、さア言つて見よ、さア」と攻め付けた。一言、若し誤らば身は忽ち千仞の谷底へ突落さるゝのである。白隠は何とも云はないで、突然ビシヤリと老人の口端を拍つた。老人はそのまゝ黙つた。

正受老人も白隠は物になると思つたから、彼此と親切に世話をした。平生能く語つては宗門の衰頹を嘆き、須らく眞風を擧揚すべきことを示した。
又或る日、久し振りに打寛いで世間話をしてゐた時に、老人は持つてゐた團扇で白隠の背中を煽いで「お前どうちや、老衲の後を繼いで此處へ住つては……」と云はれた。思ひがけぬ言葉を白隠は驚いたが、「宗格さんが居られるぢやありませんか」と答へた。老人は「彼は駄目ぢや、氣を養ふことを知らぬから」と云はれたが、果して其の通り、未だ大業を成さずして老人の寂後十年、享保十五年に寂くなつた。或る日、また老人は白隠を顧みて、「お前を拙衲位まで長生させて、宗門の事業をさせて見たい」と云はれた。老人は時に六十九歳で、白隠は正に二十四歳であつた。而して暗に養氣の至要を示された。此の如く實に白隠に囑望してゐたのであつた。

その十一月、偶ま越後から三四人の同參が遣つて來た。が、何れも道心がない。白隠はこゝにゐても自分の生活は城下へ托鉢に出ては支へて、決して寺のものを費さなかつた。が、外の者は左うでない。殊に大勢ガヤ／＼蛙のやうに居るのは老人も亦甚だ喜ばない。と云つて折角

息道和尚の
病氣

歸郷の決心

餞別の垂誠

離別の悲哀

正受老人の依頼

七二

こゝまで来たものを歸れとも云へぬ。かたぐし白隠は、一層のこと二度一緒に出て終つて、他日復た来ようか……兎やせむ、角やせむと思ひ惑うて居る矢先、國許からの便りに息道和尚が病氣だと云つて来たから、今は躊躇すべきでない、忽ち決心して一先づこゝを出ることにした。思へば正受老人の下に給侍すること前後僅に八閏月、機縁相熟して自ら益す奮勵し、老人も亦一箇の新佛を作らうと喜び勇んでゐたのに、今は又思ひがけない別れに悲しんだ。老人は一期の哀別を惜んで、老脚をも厭はず木屐履きで、相語り相悲しみつゝコツ／＼と山道を二里も送られた。何里送られても別れは辛い、お疲れだらうから歸つて貰ふやうにと、送つて来た不自居士に云はしめたので、老人もソレぢや歸らうと、願みて「おい慧徳」と呼ばれたので白隠は側へ進んだ。老人はガツシリ白隠の手を握つて「なア骨折つて、立派な奴を二人ほど作れ。決して大勢作らうと思ふな、大勢作れば碌なもの出来ぬ、確乎した奴が二人もゐたら、宗門の中興も出来ようから……寺へ歸つて看病しても、決して坐禪を怠けるな、確乎遣らな可かぬぞ」と早や老の眼に涙。言々肺腑を突く親切に、白隠も覺えず感泣して辛い別れを告げた。その辛い女々しい顔を見せまいと、白隠は涙を抑へて一走りに走つた。漸く此方の

大器の完成

動靜の矛盾

小峠に差掛つた時、老人も最早歸られたらうと振向けば、老人は未だ凝乎と立つて居られた。白隠は覺えず聲を揚げてわアツと泣いた。正受老人が八閏月の鉗鉗は、全く白隠をして生死の命根を踏断せしめて、眞に宗門中興の大器たらしめた。而して白隠も亦能く慧命を相續して、その依頼を辱めなかつた。亦是れ正受にして能く白隠を出し、白隠にして能く正受を繼いだのである。而もこの生別が聽て死別となり、これより十二年の後、白隠が再び來らんと志は空しくして、享保三年に正受老人は八十歳にして寂くなつた。

四 肺金を病む

春、故郷を出た白隠は、その冬に歸つて来た。短かい行脚ではあつたが、英巖寺と正受庵の所得は、これを前の五年に比して決して少くは無かつた。今は沼津の大聖寺に息道和尚の病氣を看護しつゝも、正受老人の儼命を守つて毎日、香八灶づゝの坐禪を怠らなかつた。が、私に自分の日用の事を顧みると、動靜が頗る矛盾して居るの

肺金を病む

七三

に驚き且つ呆れた。思へば洒脱なるべき去就が洒脱でない。而してこれまで悟つた處のことが明瞭にして居るが、平生の仕事の上に活用が出来ないので、何だか死悟のやうだ。或は静な處で坐禪すれば心も自ら落付いて居るが、一朝、熱鬧な處へ出れば忽ち心が亂れる。知見を立つる時には志氣高邁であるが、愈々これを實行する場合になると、下らぬ舊の習氣が出る。従つて又た順境を愛して逆境を嫌ふ傾きがある。已に順境逆境と云ふやうな差別を見るから、自ら又た喜怒哀樂憎愛取捨の念が生じて制することが出来ない。此の如くなれば悟つたと云つても何の役にも立たぬ。一たび見性した上は、正に龍の水を得るが如く、虎の山に靠るが如く一切處、一切時に大自在を得べきである、その是れが出来ぬのは見性透徹しても、猶ほ未だ命根が斷じ盡きぬからであると、更に精進工夫して殆んど寢食を忘るゝに到つた。

命根未だ斷ぜず

駿府の菩提樹院の正宗講會に、飯山から宗格が出て來た。歸るときに白隠が「正受老人も大分のお年だから、この後は何時遇へるか分らない……」は洞山五位の秘訣を未だ本統に聽いてゐないから、師兄、幸に聽いて傳へて呉れ」と宗格に頼んだ。

洞山五位の傳授

翌年、宗格は約束を重んじ、五位の秘訣を傳へんとして遙々駿河へ來た。能く聽て呉れたと

白隠は喜んで「さア聞かせて貰はう」と云へば、宗格は「中々容易なことぢやない」と云ふので、まア一杯飲んでと、居合せた二三人が心配して酒を估つた。先づ一杯と侷されて宗格は盃を受けた。その手を確と白隠は捉へて「まア話してから飲むが好い」と云ふ、「否、まアその手を放せ」「否、飲んだら駄目だらう」と、道を求むること、渴ける者の水を求むるが如き白隠は、一刻も猶豫しなかつた。宗格が二口三口話しかけると、白隠は「モウ解つた、止めよ」と云ふので外の者は驚いて、「師兄は解つても、吾儕は未だ解らないから」と云へば、白隠は「後で俺が話して遣る」と云つて、宗格に酒を侷め共に大に笑つて別れた。翌日、白隠が「斯うだらう」と話したが果して一言も違はなかつたので宗格も大に驚いた。

再來の手形

白隠は正受老人から一則の公案として「洞山五位」を授けられて居つた。これを再來の手形として居つた。今こゝで宗格から傳へ聽いても決して満足はしてゐない。親しく正受老人に講する心であつたが、志は空しく違つて十年の後は老人は寂くなつた。而して白隠は四十年後の寶曆元年に「洞山五位秘訣」を編した。

洞山五位秘訣を編す

大聖寺に歸つて看病して居る頃から、白隠は却つて病氣となつた、「壁生草」に、この頃の

様子さまようを自ら記かして、
 其後そののち、嶮路けんろ數日すうじつ程ほど。艱辛けんじんを喫くして漸やく郷國きやうこくに歸かへり、如何いかん老師らうしの病床びやうしやうに侍せす。侍せりとも雖いへども正受しょうじゆの儼命げんめいを守まもり、片時へんじも亦またた終つひに怠墮たいだせず、毎夜まいや、八炷ちやうの香かうを怠おこたこと無く、信越しんえつを経て駿陽せんやうに到いたる間あひだ、大悟だいご小悟せうご、數かずを記きせず。悲かなしむ所ところは心火しんか竊ひそかに逆さか上じやうし、肺金はいきん痛いたみ水分すいぶん枯渴こかつし、覺おぼえず難治なんぢの疾しよ疾しよを發はつす、舉措きよそ動靜どうじやう驚おど悲かな多おほく、身心しんしん怯弱けつじやくにして兩腋りやうえき常じやうに汗あせを生なす。動中どうちゆうに一ひと向入かうにゅうることを得えず、常に陰癖いんへきの處ところを尋たづねて死坐しざす、鍼灸しんきう藥やくの救すくふべき所ところにあらず、今更いまさらに飯山いひやまも恥はかしく、普あまく智識ちしきを尋たづねて救すくひを求めんと欲ほつすれども、病牀びやうじやうは片時へんじも離はなるべからず、佛神ぶつじんに祈念きねんすれども靈驗れいげんなく、兎とやせん角かくやせんと心を盡つくす處ところ、怪あやしい哉な師弟しにの發はつ禪ぜん者しや、後のちに龍雲りゆうんの雪店せつてん和尚じやう、遙はるかに老師らうしの病難びやうなんを開ひらき付け、遠路えんろを経て關東くわんとより歸かへり、親おやしく相代あひかりて湯藥とうやくに侍せせんことを請こふ。
 と云いつて居ゐる。正まさに是これ一大快惱だいちゆうの時節じせつである。

五 白幽真人を訪ふ

一大快惱

心神の困倦

多年たねんの辛勞しんらう一時いちじに發はつして、痛いたましくも肺金はいきんを病やんだ白隱はくいんは、茫々ぼうぼうとして死生しせいの巷まちに彷徨ぼうわうした。心火しんか逆上ぎやくじやうし、肺金はいきん焦枯せうこして、雙脚さうきゃく、氷雪ひようせつの底そこに浸ひたすが如ごとく、兩耳りやうじ、溪聲けいせいの間かんを行ゆくが如ごとし。肝膽かんたん常に怯弱けつじやくにして、舉措きよそ恐怖こふおそ多おほく、心神しんしん困倦こんけんし、寐寤みご種々しゆしゆの境界きやうがいを見る。兩腋りやうえき常じやうに汗あせを生なじ、兩眼りやうがん常じやうに涙なみだを帶おぶ。此こゝにおいて遍あまね明師みやうしに投なじ廣ひろく名醫めいいを探たづねると云いへども、百藥やくすん寸功すんこうなし。『夜船閑話』

十二種の凶相

と、白隱はくいん自ら書かいて居ゐる。この症狀しやうじやうは、殆ほとんど白隱はくいんをして廢人はいじんたらしむる、十二種じふにしゆの凶相きやうさうであつた。十二種じふにしゆとは、
 一、頭腦づなう、暖あたかにして火ひの如ごとし。
 二、腰脚こしあし、冷ひやえて氷こおりの如ごとし。
 三、兩眼りやうがん、常じやうに涙なみだを帶おぶ。
 四、雙耳さうじ、交こもも聲こゑを作なす。
 五、陽やうに向むかへば自然しぜんに怖おそれを生しやうず。
 六、陰いんに向むかへば覺おぼえず憂うれひを生しやうず。

白幽真人を訪ふ

- 七、思想を勞す。
- 八、悪夢に疲る。
- 九、睡れば漏精す。
- 十、寤むれば氣耗たり。
- 十一、食、消化せず。
- 十二、衣に暖氣無し。

病軀の行脚

とであつた。雪志和尚の來たを幸ひに、この癡殘の病軀を提げて行脚に出た。先づ東海道を下つて伊勢に入り、更に美濃に入つて岩崎の靈松院をも訪れた。處々の知識を尋ねたが何れも禪病であるからと容易に手を下さなかつた。

慧極禪師を訪ふ

その頃、黄檗木庵の門下に於て、三傑の一と稱せられた慧極道明禪師が、泉州の法雲寺に在りて盛に法施を酬してゐた。白隱はそれを訪れた。禪師は「禪病は醫治さんと思へば轉た重るばかりであるから、最も寂靜の處を尋ね、此山の草木と共に朽ち果てん覺悟で、靜に坐禪せよ、決して死に到るまで諸方に奔走してはならぬ」と、厳しく誡められた。是れ即ち「夜船閑

「話」の序に、

仙人還丹の秘訣

本來の面目

若し是れ參禪辨道の上士、心火逆上し身心勞疲し、五内調和せざる事あらんに鍼灸藥の三津を以て、是を治せんと欲せば、縱ひ華陀、扁倉と云へども、輒く救ひ得る事能はじ。我に仙人還丹の秘訣あり、汝が輩、試に是を修せよ。奇功を見る事、雲霧を披きて皎月を見るが如けん。若し此の秘訣を修せんと欲せば、且らく工夫抛下し話頭を拈放して、先須らく熟睡一覺すべし。其未だ睡りにつかず、眼を合せざる以前に向て、長がく兩脚を展べ、強よく踏みそろへ、一身の元氣をして、臍輪、氣海丹田、腰脚足心の間に充たしめ、時々此の觀を成すべし。我此の氣海丹田、腰脚足心、總に是我が本來の面目。面目、何の鼻孔がある。我が此の氣海丹田、總に是我が本分の家郷。家郷、何の消息がある。我が此の氣海丹田、總に是我が唯心の淨土。淨土、何の莊嚴がある。我が此の氣海丹田、總に是我が己身の彌陀。彌陀、何の法をか説くと、打返し／＼常に斯くの如く妄想すべし。妄想の功果つもらば、一身の元氣いつしか腰脚足心の間に充足して、臍下、瓠然たる事、いまだ篠打ちせざる鞞の如けん。恁麼に單々に妄想し持ち去て、五日七日乃至二三日を経たらむに、從前の五積六聚、

老僧が頭を切り持ち去れ

白幽眞心を訪ふ

八〇

氣虚勞役等の諸症。底を拂て平癒せずんば、老僧が頭を切り持ち去れ。と云つたのと、正に同工異曲である。

白隠はその時に、浴外、白河の山中に白幽眞人と云ふ仙人がゐて、『精しく天文に通じ、深く騎道に達す。人あり禮を盡して咨叩する則は、稀れに微言を吐く、退いて是れを考ふるに、大に人に利あり』と聞いた。

其の白幽眞人と云ふは、唯だ尊い仙人だと云はれて居るので、何處の人か元より分らないが、併し幼い時に石川丈山に事へてゐたところがあつたとか、偶ま病のために其處を辭したが、二十歳ばかりの頃に一人の異人に會うて、仙人還丹の秘訣を獲てから後は、山に入つて隠棲してゐた。一時、丈山の詩仙堂に居たこともあつたが、その後、白河の山中に入つたのである。

白隠は思はぬ話に、且つ喜び且つ勇み、この人こそ醫王の再来と、心の胸に一鞭高く打つて先づ都の方に上つた。實に是れ寶永七年、白隠が二十七歳の正月である。

黒谷を越え直ちに白河の村に入り、路を聞いて溪に沿ひ、竝に山に入ること一里許り、乍ち流水を跨斷して谷窠り、樵徑も亦た盡きた。これは徑を過つたかと途方に暮れて茫然として立

白河の山中

白幽眞人の生涯

清絶なる風致

我は山中の半死人

つてゐると、一人の樵夫が降りて来て、怪訝さうに見てゐたが『白幽眞人の家は……』と問うたので、『あゝ仙人の家か……それ彼方の洞の口に一寸、白う見える處ですよ』と教へて呉れた。白隠は即ち裳を褰けて峻巖を攀ち、木の根、藤蔓、葛蔓を掴み、巖陰に残る氷雪を踏んで、汗ダラ／＼と流しつゝも漸くその家の前へ来た。見れば千巖萬壁、悉く脚底に連り、高下の勢、自ら岬然たり又た自ら泫然として、風致實に清絶にして、別に人間の天地に非ざるを知つた。而も崇高き威嚴に打たれて、わな／＼と顫く胸を漸く鎮め、襟を正して鞠躬如として中を伺へば、臙臙として白幽眞人は目を收めて端坐し、蒼髮、垂れて膝に到る。朱顔、麗うして熟せる猿の如く、爪甲は長きこと半寸ばかり、大布の袴を掛け、軟草の席に坐して居る。窟中は僅かに五六笏にして、而も全く資生の閑家具は無い。傍の机の上には唯だ『中庸』と『老子』と『金剛般若経』とが載つて居るのみである。

白隠は恭しく禮拜して苦ろに來意を告げ、病因を語つて只管に救ひを請うた。眞人は稍や久しうして氷のやうな眼を開き、しげ／＼と白隠を見てゐたが、聽て徐に口を開いて『我は此の山中の半死人である。唯だ榲栗を拾つて食ひ、麋鹿に伴うて睡るのみで、仙人の秘術など

白幽眞人を訪ふ

八一

醫治し難き
禪病

内觀の功を
積み

「夜船閑話」の獲得
八二
は知らない。却て遠い處を上人にお尋ねに預つて愧ぢ入る次第である。どうかお歸りなさい」と云つた。白隱は「否、左様なことを仰有らずと、折角來たのだから……」と、頭を磨り付けて釋んだ。

白隱が誠の心は顔に表はれた。眞人は恬如として白隱の手を執り、精しく五内を窺ひ、九侯を察し、慘乎として齧を擧げて告げて、
已る哉。觀理、度に過ぎ、進修、節を失して、終に此の重症を發す。實に醫治し難きものは公の禪病なり。若し鍼灸藥の三ツの物を恃んで、而して後に是を救はんと欲せば、扁倉、力をつくし、華陀、齧を擧ぐるも、奇功を見る事能はず。公、今既に觀理の爲に破らる、勤めて内觀の功を積まずんば、終に起つ事能はず。是波の起到は、必ず地に依るの謂なり。
と云うたので白隱は覺えず膝摺出し、「願くは其の内觀の要訣を教へ給へ」と、泣くが如くに訴へた。眞人は肅々如として容を改め、不幸なる求道者のために、養生の秘訣を説いた。

六 『夜船閑話』の獲得

内觀の秘訣

生を養ふは
國を守るが
如し

白幽眞人は、白隱のために内觀の秘訣を諄々として説いた。

蓋し生を養ふ事は、國を守るが如し。明君聖主は、常に心を下に専らにし、暗君庸主は、常に心を上に恣にする。上に恣にする則は、九卿、權に誇り、百僚、寵を恃んで、曾て民間の窮困に顧る事無し。野に菜色無く、國、餓殍多し。賢良、潛み竄れ、臣民、曠り恨む。諸侯、離れ叛き、衆異、競ひ起つて、終に民庶を塗炭にし、國脈永く斷絶するに到る。心を下に専らにする則は、九卿、儉を守り、百僚、約を勤めて、常に民間の勞疲を忘るゝ事無し。農に餘まんの粟あり、婦に餘まんの布有て、群賢、來り屬し、諸侯、恐れ服して、民肥え國強く、令に違するの丞民なく、境を侵すの敵國なし。國、刁斗の聲を聞く事なく、民、戈戟の名を知らず、人身もまた然り……須らく知るべし、元氣をして常に下に充しむ、是生を養ふ樞要なる事を……夫大道の外に眞丹なく、眞丹の外に大道なし……孟軻氏の謂ゆる、浩然の氣是をひきゐて臍輪、氣海丹田の間に藏めて、歲月を重ねて、是を守つて守一にし去り、是を養ひて無遺にして去て、一朝乍ち丹竈を掀翻する則は、内外中間、八紘四維、總是一枚の大還丹。此時に當つて初めて自己即ち是天地に先つて生ぜず、虚空に後れて死せざる底の、

『夜船閑話』の獲得

大道と眞丹

長生久視の
大神仙

無観を正観
とす

養生の至要

起死回生の
妙薬

『夜船閑話』の獲得

八四

眞箇長生久視の大神仙なる事を覺得せん。是を眞正丹竈功成る底の時節とす。と、白隠は聞いてダク／＼と膏汗を絞つた。語一語、肺腑を衝き恰も刃を以て肉を刺すが如くである。眞人は更に進んで、

夫観は無観を以て正観とす。多観の者は邪観とす。向きに公、多観を以て此重症を見る、今是を救ふに無観を以てす、また可ならずや……且つ夫内に守るの要、元氣をして一身の中に充塞せしめ、三百六十の骨節、八萬四千の毛竅、一毫髪ばかりも欠缺の處なからしめん事を要す、これ生を養ふ至要なる事を知るべし。

と示し、『我れ今已に公のために、一生受用不盡の秘訣を以てした。この外更に云ふことはない』と、冥黙端坐された。白隠は餘りの嬉しさ有難さに、御禮を陳ぶる言葉も容易に出でず、感極まつて泣いた。

我が前には唯だ死あるのみと、自ら廢棄してゐた白隠は、思ひ掛けなくも起死回生の妙薬を與へられ、前途は俄に輝いて洋々として海の如く感じた。滂沱として衣の袖を濕ほした熱涙、歡喜と希望との花に宿つた露を拂ひつゝ、眞人に送られて、残り惜しくも此の山を下つた。

靈と肉との
復活

白隠は白幽眞人に會うて、靈と肉とに復活した。十二の凶相は自ら滅し、肺金は次第に癒えて、年と共に却て益す壯健になつた。白隠が、遂に八十四年の活動的生汗を送り得たのは全く此の賜物であつた。白隠は慈悲大悲の餘り、後年に至つてこの養生の秘訣を更に人に授けた。これが即ち一篇の『夜船閑話』である。その序には、

師の曰く、爾が輩、心病全快を得て以て足れりとする事なかれ、轉々治せば轉々參ぜよ、轉々悟らば轉々進め。老僧初め參學の時、難治の重病を發して、其憂苦、諸子に十倍せり。進退惟谷まる。尋常心にひそかに思惟すらく、生きて此憂愁に沈まんよりは、如かじ早く死して此革囊を捨んにはと。何の幸ぞや、此の内觀の秘訣をつたへて全快を得る事、今の諸子の如し。至人の云く、此は是神仙長生不死の神術なり、中下は世壽三百歳なるべし、其餘は計り定むべからず。予則ち歡喜に堪へず、精修怠らざる者大凡三年。心身次第に健康に氣力次第に勇壯なることを覺ふ。此において、重ねて心に竊に謂へらく、縦ひ此眞修を修し得て、彭祖が八百の歳時を保ち得るも、唯一個頑空無智の守屍鬼ならば、老狸の舊窠に睡るが如し、終に壤滅に歸せん。何が故ぞ、今既に獨りも莫洪、鐵拐、張華、費張が輩を見ず、

頑空無智の
守屍鬼

不死の神術

重病の憂愁

『夜船閑話』の獲得

八五

金剛不壞の
大仙身

「夜船閑話」の獲得
八六
如かず四弘の大誓を惜起し菩薩の威儀を學び、常に大法施を行し、虚空に先つて死せず、虚空に後れて生ぜざる底の、不退堅固の眞法身を打殺し、金剛不壞の大仙身を成就せんにはと記されてある。即ち眞正參玄の上士をして、共に金剛不壞の大仙身を成就せしむるに外ならなかつた。而して其の説く處は、

養生の綱領

大凡、生を養ひ長壽を保つのは、形を練るにしかず。形を練るの要、神氣をして丹田氣海の間に凝らしむるにあり。神凝る則は氣聚る、氣聚る則は即ち眞丹成る。丹成る則は形固し、形固き則は神全し、神全き則は壽がし、是仙人九轉還丹の秘訣に契へり。須らく知るべし、丹は果して外物に非ざる事を。千萬唯心火を降下し、氣海丹田の間に充たしむるに有のみ。と、是れ其の綱領である。

生身の觀世
音菩薩

白幽眞人に相見せる白隱は、猶ほ尼連禪河の釋迦の如きである。白隱は茲に於て初めて生身の觀世音菩薩となつた。「夜船閑話」は、生ける白隱の大説法である。これに依つて參玄の上士をして、轉た參じ、轉た悟り、轉た進ましめんとした。

出生入死の
端的

遮莫、白幽眞人の教ふる處は、蓋し老子が出生入死の端的に過ぎぬ。眞人が窟中に一卷

心源湛寂の
處

の「老子」を置きしが如き、亦た思ひ半に過ぎるであらう。而も亦如來清淨禪味の一鬮の肉である。白隱は之れを「遠羅天釜」に記して、

蓋し「摩訶止觀」の中に、假緣止、諦眞止と申す事の侍り、只今申し談する内觀の法とは、かの假緣止の大略にて侍り。老夫も若かりし時、工夫趣向悪く、心源湛寂の處を佛道なりと相心得、動中を嫌ひ靜處を好んで、常に陰僻の處を尋ねて死坐す。假初の塵事にも胸塞がり、心火逆上し、動中には一向に入る事を得ず、舉措驚悲多く、心身鎖へに怯弱にして、兩腋常に汗を生じ、雙眼斷えず涙を帶ぶ、常に悲歎の心多く、學道得力の覺えは毛頭も侍らざりき。何の幸ぞや、中頃より知識の指南を受けて、内觀の秘訣を傳受し、密々に精修する者三年、従前難治の重病は、いつしか霜雪の朝曦に向ふが如く次第に消融し、宿昔、齒牙を扶むこと得ざる底の難信難透、難解難入底の惡毒の語頭は、病に和して氷消し、今歳、從心の齡を経ると云へども、三四十歳の時より氣力十倍し心身ともに勇壯にして脇席を濕ほさず、恣に偃臥せざる者、動もすれば二三日を経る事間これあれども、心力衰減せず、三百五百の燕領虎頭に圍繞せられて、經論を講演し語録を評唱して、三旬五旬を経れども、曾て

養生の秘訣
と摩訶止觀

「夜船閑話」の獲得

疲倦の色なき者は、自ら覺ゆ此の内觀の力による事を。と云つた。即ちこの養生の秘訣たる内觀法は、『摩訶止觀』に依つたものであると共に、又更に坐禪の威儀に依つたことは云ふまでもない。

七 菩提心の發起

松蔭寺に内觀を修練す
不安と恐怖
白幽真人から養生の秘訣を得た白隱は、恰も鬼一法眼から六韜三略を授かつた義經の如く喜び勇み、疾風の如く直ちに故郷に歸つた。歸つた其の夕から内觀！内觀！と心に叫びつゝ、松蔭寺の一室に、巍然たる富士山に對し、端然として不思議底の三昧に入り、專一に修練した。白隱は復たも不安と恐怖に満ちた。内觀すれば忽ち金剛不壞の大仙身を成就するものと思ひの外、坐れば坐るほど心火は彌よ逆上して來る。これだ！と更に辛抱して坐ると、更に倍す逆上する。あゝ目だと止めれば、直ぐ頭が靜かになる靜かになつたからと坐れば、復た痛くなる。止めれば癒る、癒るから始める、如むれば復た痛む。而して心火は倍す逆上するのみである。白隱は遂に決心した。逆氣が昂れば必ず死ぬと云ふ。然れば自分は死ぬのであら

死ぬまで遣

う。好矣、死ぬまで遣つて見よう。

下らぬものは焼き、用らぬものは捨て、而して死後の用意まで整へた。天地悠々として今は心にかゝる浮雲もなく、屹然として坐つた。

心火の逆上

心火は逆上して焰々と胸に逼つた。膏のやうな汗が流れる、それを辛抱した。逆氣は胸を衝いて喉を越えた。と思ふ間もなく早や頷を過ぎて激しく鼻を撲つた。流石、豪邁勇悍、肯かぬ氣の白隱も、眼から火の出るやうな思をする、その兩眼が恰も肉の玉のやうに、づボツと飛び出した。あゝ痛い！と、ソツと手を遣つて撫せて見ると、眼はまだ無事だ。あゝ助かつたと思つたが、俄に頭腦が破れるやうに痛い。痛い！痛い！と死ぬやうな思で、猶ほ凝つたと坐つてゐた時、忽然として頭が打ち破れた。破れたと同時に、頭の中にクシャ／＼してゐた重い病氣が、恰も勢の良い鳥が天を睨んで飛んだやうに、スウと出て終つたと思ふと、精神は一時に爽快になつた。

逆氣は止んだ

復活の新生

逆氣は止んだ。

白隱は、眞箇に復活した。

菩提心の發起

悟後の修行

敬虔なる信
仰の人

大善人の再
來

菩提心の發起

九〇

復活した白隠は、こゝに初めて菩提心を得、悟後の修行をしたのである。偶ま無住法師の『沙石集』を繙き、春日明神が笠置の解脱上人に告げて、凡そ拘婁孫佛から以來、一切の智者高僧達が、菩提心なきがために、皆悉く魔道に墮ちて居る。と云ふのを読んで、懼然として恐れ、猶ほ幼い折に地獄の話聞いた位に、覺えず寒毛卓立した。白隠は倍す敬虔なる信仰の人となつた。即ち後に此の菩提心の大事なること『八重葎』に説いて、古今多少の智者高僧、往々に邪道に墮す。今時世間、きは際限も無き國王大臣長者居士、宰官婆羅門、大名高家等の富貴自在の人々を見るに、皆盡く過去前生は萬行萬善、智行兼備、定慧具足の智者高僧、及び積善不退の大善人達の再來下生し來り玉ふ人々なり。誰も淨土に生れん、佛に成らんとて闘み進んで萬善を行じ玉へども、見悟得悟の眼なく、佛國土の因縁、菩薩の威儀を知り玉はず。法施利他の菩提心おはさぬ故に成佛は存じもよらず、淨土の片端も亦見玉ふ事能はず。然れども過去の善行は盡きせず朽ちず、空しからで今の世に高位高官

菩提心の尊
貴

癡福は三世
の冤

衆生無邊誓
願度

富貴自在の身と生る。悲む所は四弘の願輪を知り玉はず、菩提心おはさぬ故に、過去の善行は露塵忘れ果て、富貴に誇り、自在を恃んで、鶴鷹の逍遙を試み、川狩野牧の大悪行を行じ、酒宴遊興の淫樂を好み、多くの美女を貯へ、妖色を集めて、胸中は常に憎意嫉妬の念高く、恰も常夜の闇の如し。此故に限も無き國家の費を悉にし、資財は日に隨ひて乏し、此に於て斂臣を愛し酷吏の輩を放ちて、年々に賦税を切上げ、科役を重ねて國家を貪り萬民を苦しめ、其の身の死後は焦熱無間の惡趣に墮して、無量劫數の苦患を受く、是を癡福は三世の冤といふ。過去の萬善萬行は今生の富貴自在と成り、今生の富貴自在は、未來の三途地獄と成る。是皆眞正の知識に逢はず、悟後の修行を聞かず佛國土の因縁を知らず、菩薩の威儀を學ばず、只自利鄙少の小善を修して、利他の大善行を行ぜざるが爲なり。利他の善行を行せんとならば、妻子眷屬は云ふに及ばず、山海遙に隔てたる遠國他國の人々なりとも、遠近を選ばず親疎を見ず、徧く一切の利益す、是即ち衆生無邊誓願度の大願輪なり。と、この大願輪に依つて能く宗門の中興を成し、長く白隠の遺澤を仰ぐに至つた白隠の生命は、實にこの菩提心、悟後の修行にあつた。

菩提心の發起

九一

白隱は、猛然として菩提心を振り起した。而して金剛不壞の大仙身を成就し得たのである。是れ實に白隱の生涯に於ける一轉機であり、新紀元であつた。

第五章 悟後の修行

一 荷葉團團の頌

伊勢より日向へ

荷葉團團頌

正徳二年の秋八月、白隱は息道の舍利を大聖寺に捨ひ、翌る三年の春復た飄々として行脚の旅に上つた。先づ伊勢の建國寺に義海和尚の虚堂會に行つた。其處で古月禪材和尚が日向の大光寺に在つて大に化門を張り、道譽、正に鎮西第一であり、而も『荷葉團團の頌』に入得されて居ると聞いたから、白隱は一途に其の爐竈に投じ、是非とも此の一段を咨決せんとして建國寺を出た。

『荷葉團團の頌』と云ふのは、南宋時代に傑出した支那禪宗の泰斗たる大慧宗杲禪師の作で、

荷葉團團似鏡。菱角尖尖似錐。

風吹柳絮毛毬走。雨打梨花蛺蝶飛。

と、云ふのであるが、これは又『圓覺經』に

荷葉團團の頌

真妄不二の
境界

廓然として
入得す

荷葉團團の頌

九四

善男子。但だ諸の菩薩及び末世の衆生、一切時に居り、妄心を起さず、諸の妄心に於て亦息滅せず、妄想の境に住して了知を加へず、無了知に於て眞實を辨ぜず。とある、眞妄不二の境界を頌したものである。故に此の眞妄不二の境界に到達し得ずんば、遂に荷葉團團の頌に入得することは出来ぬ。

白隠は建國寺を出て西に、『坂は照る／＼鈴鹿は曇る、間の土山、雨が降る』と詠はれた鈴鹿峠に差掛つた。降り続いた雨の後、麓の溪川は氾濫してゐた。白隠は、衣を裹けてザンブと飛び込んだ。押倒す凄じい流れを横切り、滑り勝な足を踏み締めつゝ、漸く數百歩も涉つた時、廓然として荷葉團團の頌に入得した。

久しい間、心の奥底にあつた重い蟻りが、釋然として氷の如く一時に解けたので、嬉しさの餘り白隠は水の中に打仆れて起きようとしぬ。偶ま通りかゝりの人が夫れを見て驚き、早速、起して遣つた。起された白隠は有難うとも云はず、その人の顔をシゲ／＼怪訝さうに見てゐたが、あつは／＼と大聲に笑つた。その男は『は／＼ア狂僧ぢやな』と呆れて、そのまゝ過ぎ去つた。

古月の家風

若狭行

未見の知己

聽て京都へ着いて或る寺に宿つた。偶ま古月禪材の下にゐた舊友が歸つて來たのに會つたから、自分の志を陳べて古月の家風を問うた。その僧は盛んに古月を賞揚し、兼ねて母親が文殊菩薩を信仰して授かつた子だとか、幼い折に楞嚴經を讀んで感じたとか、殆んど眞禪に觸れてゐない平凡な話を聞いて聊か失望した。時に傍に一人の僧がゐて、若州小濱の圓照寺に鐵堂和尚が大に宗風を擧揚して居ることを語つた。殊に鐵堂は法を愚堂に續ぎ、彼の正受老人とは叔姪の間である。かた／＼斷然、方針を變更して北の方若狭に入つた。その道すがらを白隠は『壁生草』に、『太平記』の東下りのやうな句調で、

遠ち近ち知らぬ法の道、進む心は若狭地や、人の心は黒谷の、磨けばいつか白川や、浮きつ沈みつ笹小舟、焦れ行く身のしほもなや、小濱にこそは辿り行く。

津々として泉の如き興趣を以て書いた。が、鐵堂は白隠に満足を與へなかつた。白隠は一夏を裏日本の涼しい汐風に吹かれて送つた。

斯くて白隠は、遂に古月に相見しなかつた。が、古月と白隠とは、未見の知己とも云ふべく、後に白隠が芙蓉峰下に玄關を開いたとき、その爐竈に投じ來つた者の中に、前に古月の鉗鎚を

荷葉團團の頌

九五

蔭涼寺の夜雪

九六

受けたものが多かつた。殊に白隠門下の錚々たる人物の、良哉、東嶺、快巖、大休、天統、長堂、愚庵など、皆な古月の門を敵いたものであつた。古月は、白隠に長すること十七歳、この時正に四十七歳の男盛りであつた。その後、寛曆元年に八十五歳で寂くなつた。

二 蔭涼寺の夜雪

片時も間断なく踏み進んで、自心の源底を掀翻し、生死の命根を踏断して、虚空消殞し、鐵山摧くる底の大歡喜を得んとする白隠は、今や火中の蓮の如く、烈火に向ふ毎に倍す麗はしき色香を放つて居る。

火中の蓮

蔭涼寺の鐵心

若狹を去つて復た郡に上り、聽て泉州信太に蔭涼寺を訪れた。

蔭涼寺は曹洞宗にして、鐵心道印禪師が開堂演法の道場である。鐵心は囊に黄檗隱元とも商量されて、自ら超然獨脱の家風があり、晩年に蔭涼寺を開いて大に龍象を蒙つたが、常に法門の陵夷じて宗風の甚だ振はざるを嘆き、特に峻峭なる機鋒を藏して専ら綿密なる宗風を擧

揚し、當時、禪門の泰斗であつた。過る延寶八年、即ち白隠が出生前五年に八十五歳を以て寂くなつた。白隠は頻に鐵心が謙嚴卓犖なる遺風を慕つて、その滅後三十餘年にして蔭涼寺に來り、親しく大寂定中の鐵心が微笑を拜せんとした。

白隠が或る日、若い坊さんと一緒に後園を掃いてゐた時、そこに頼れかゝつた小屋があるのに氣が付いた。見るともなく中を覗くと、斯は不思議、破れ机の上に『大涅槃經』が整然と載つてゐた。白隠は怪んで『誰が居るのか』と聞くと、『壽鶴道人である』と答へ、更に道人は久しく鐵心に侍いてゐたので、坐禪も確乎出來ては居るが、一風變つて狂氣のやうで、大勢の中で誰も交際はないと話した。

一 道の光明

それを聽いて白隠は竊に喜んだ。實は蔭涼寺へ來て見たが、禪規は徒に嚴烈にして却て鐵心の新生命の失はれて居るのに失望してゐた折柄、この人ありと聽き、恰も暗夜に燈を得た如く、端無くもこゝに一道の光明を認めた。

逢ひたい、早う逢ひたいと思つても、壽鶴道人はドウしたのか容易に姿を見せない。漸つと見付け出して逢つて見ると、聽きしに勝る異様の風體、散髮蓬々として面は土の如く、身に纏

壽鶴に逢ふ

蔭涼寺の夜雪

九七

蔭涼寺の夜雪

九八

ふは荒布のやうな纏纏、宛然で狂人である。白隠は側へ寄つて「貴下が壽鶴道人で……」と言葉を掛けると、道人は返辭もしないで、さつさと山の方へ逃げた。白隠はその後を追つた。逃げる、追ふ——逃げる追ふ——逃げたのを追つて路の窮まる處まで行つた。白隠は遂に道人の法衣を確と引捉へ「モシお待ち下さい。私は鐵心禪師の遺風を慕つて態々此處へ來たのであります。承れば老兄は久しく禪師にお侍きになつたとか……大慈大悲、私にお聴かせ下さい」と涙ながらに頼んだ。壽鶴は愕然として驚いた。唯だ無言のまゝ熟と白隠の顔を見つめてゐたが忽ちその手をガツシリ握つて、「能く來て呉れた……宗門は衰へて、未だ一人も眞面目に先師の道を尋ねて來る者はない。誠に怒な有様である。その中を尊公が來られたとは……拙納も實に嬉しい」と、早や老の眼に涙の露。

壽鶴は、思ひがけなくも先師の道を尋ねて來る大道心に感じ、一笑して十年の知己の如く、法を惜まず白隠は提撕した。白隠は又「此の人に依つて亡き鐵心禪師の其鐵心を得なければならぬ」と、恰も蚊の脛の如き小力士が、巖の如き大關に打ッ付かるやうに、力を惜まず精進した。

鐵心の遺風

壽鶴の驚喜

白隠の精進

接心端坐

或る時、二人は誓つて七日七夜、不臥の接心坐禪をした。青竹を切つて警策と爲し、二人の間に置いて、若し誰でも眠つたら直ぐ之れを以て眉間を打ち破らうと、兀々として脊梁骨を堅て、坐つた。遂に七日間少しも目扣きもせず、二人の手は其の青竹に觸れなかつた。

一夜、大に雪が降つた。白隠は端然として坐つた。忽ち簌々として窓を打つ雪を聴き、豁然として悟つた。覺えず、

聞かせばや篠田の森の古寺の

小夜更け方の雪の響を

と口誦んだ。

霏々として降るこの雪！こゝに鐵心禪師の暖皮肉はあり、活骨髄はある。白隠の一句、能く鐵心が大寂定中の微笑を見たのである。

三 『大燈語録』と一隻眼

白隠は破竹の如き勢で萬重の關鎖をドン／＼破つた。

『大燈語録』の一隻眼

九九

破竹の勢

雪夜の大悟

保福寺の夏

偶ま慧極和尚が示された、深山の草木と共に朽ちんとの静寂の境を思うた。而して懐かしい美濃に來り、七寸の草鞋に百峰の雲を踏破して、北の方遙に洞戸に入り、瑠璃を溶かしたやうな板取川の流れに十年振に嗽いだ。然るに白隠が折角心あてにして來た菅谷の草庵は何時しか朽ち果て、今は一畦の麥畑となつて終つて居るが、幸に保福寺の南禪禪師はまだ恙無いので、復た涼しい夏を此處に送ることにした。

大燈語録と文字禪

こゝに初めて『大燈國師語録』を讀んだ。時に一人の坊さんがゐて『私が若い頃に或る一老宿が、大燈の語録は、機語峭峻にして恰も雷霆の石壁を劈くが如き氣概があると思つてゐたが、讀んで見て實に閑言刺語ぬ文字禪に呆れて終つたと示されたことがあつた』と語つて、大燈語録の見るに足らぬことを云つた。それを聽いて白隠も、『あゝ左様だらう。元明以來、宗門に傑出の宗師なく、その語録類の如き、殆んど碌なものはない、大燈の語録も何も變つた處はないのだらう』と一笑に附し、遂に捨て、讀まなかつた。

が、その後三十五年を経て六十五歳の折、松蔭寺の安居の者からは是非、大燈録を提唱して呉れと頼まれた時、初めて披いて見て實に其の識見高邁、器量卓落として絶大の宗教なるに驚き、

槐安國語

岩崎の靈松寺

放逸の大家と精進の白

大安樂の境

且つ三十五年前に、下らぬ言葉に惑はされて、今日まで之れを知らなかつたことを悔いた。後にこの評唱と偈頌とを添へて一篇の『槐安國語』となつた。

その秋、保福寺を辭して岩崎の靈松寺に萬休禪師を訪うた。

當時、靈松寺の僧堂には五十餘名の雲水がゐたが、憐れむべし、唯だグラ／＼と朝から晩までを過すのみで、坐禪しても、坐つて居ると云ふのみで宛然で徳利みたやうで、お粥を吸つては後は睡つて居る。何の工夫もなく起きては睡り、睡つては起き、夜臥る時になると『ああッ安氣だなア』と、さも嬉しさうに、今日も一日終んだとばかりに、ゴロリ、ゴロリと臥るものばかりである。が、白隠は獨り大勇猛心を奮起して誓つて腋を席に付けず、片時も亦た熟睡せず、却て一同の大安樂は、我が不臥不眠を警策するの善巧方便であると喜んで、倍す自ら奮勵して居つた。

或る夜、五六人のものが『どうだ、彼奴は可哀想でないか……まだ大安樂の境界を得ないで、何時までも苦しんで居るが……』と叫いたのを聽いた。白隠は心の中に、『さう云ふお前等こそ實に可哀想だ』と嗤つた。

『大燈語録』と一隻眼

一〇二

白隠は大勢の雲水が、茫々惘々として空しく光陰を渡ることを、獨り窺に悲しんだ。或る時、方丈に上つて咨叩て、『今、會中の雲衲は實に懈怠である、あのまま死んだならば必ず地獄に墮つるであらう……地獄に墮つれば却て和尚をお恨み申すであらう』と云つた。和尚は『他人のことは用らぬ世話だ、そんな處へ手出ししないで、まア自分のことを精出すが好い』と云つた。白隠は更に突込んで『手出しするなと仰有るが、和尚は彼麼風で悟の眼をお開きになりましたか』と云つた。和尚は飽までも鋒尖を脱して、『老僧の眼なんか心配しなくても好い』と云つた。白隠は更に夫れを捉へて、『一同は和尚を手本として居るから、和尚の眼も心配しなければならぬ』と詰寄つた。『否、老僧も若い頃には悟らうと思つて、随分難儀をした』『したならば、何故、一同にも難儀をさせて早う悟の眼を開かせませんか……今のやうな有様では、死んでも悟の眼は開かせぬ、のみならず、死ねば必ず地獄に墮ちて苦しまねばなりません』と、無遠慮に攻め付けたので、和尚は『他人の心配せずと、自分の眼に氣を付けよ』と云ひ放つた。白隠は猛然とし『某甲の眼は、縦へ百貫の玄能を以て撃つても、破れるやうなものではない』と、キツパリ云つた。その一語を聴いて萬休は答ふる言葉もなく、唯だ微笑を

漏したのみであつた。白隠の脚跟は益す牢實になつた。

四 岩瀧山の隠棲

山居の地を求めて洞戸に入つて空しく歸り、暫らく錫を靈松寺に留めた白隠は、偶夢窗國師の甲州建徳山の山居苦行談を聴き、轉た憧憬に堪へず、決然として靈松寺を辭し、長良川を渡つて東の方、虎伏す野邊の當て所もなく虎溪山に上つた。

寒流、玉を唄く土岐川を隔て、名にし負ふ木曾の御嶽山は巍然として當面に聳え、儼然として恰も王者の如く、濃信二州の群山は齊しくその下に朝宗して居る。その宗嚴なる自然を懐にした『一筋の道だにたへぬ山奥』の虎溪山へ、枯木寒巖を攀ぢて夢窗國師は來り、猛く精彩を着けて、

たのむぞよ若しもまどろむひまあらば

吹きおどろかせ峰の松風

と詠じて、心なき蜂の松風を友として自ら警策し、無情の説法を聴取して居られた。何時しか

比ひなきその勝鬪を知つた江湖の雲衲は、我れ先きにと雲の如く虎溪山に集つた。國師は、却て道行の妨げらるゝを心憂く思はれて、世のうさにかへたる山の淋しさを

訪はぬぞ人のなさけなりけると、優しい心を示された。

白隠は迴然として塵外に逍遙せる夜窗國師の遺蹟を忍びつゝ、獨り虎溪山に登つて來たが昔に變る今の状態に痛く失望した。而してこゝに邂逅した友の教を受けて、更に轉じて加茂郡の山の上の岩瀧山へ行つた。

こゝには信心の施主、鹿野徳源老人がゐて何かの世話をして呉れた。空山寂歴として遙に人烟を絶して居る。一日、纔に一掬の米を粥となし夢窓國師の勝鬪に倣ひ、窃にこの山の草木と共に朽ちんと、慧極和尚の示誦を守つた。

或る日、白隠は山奥へ入つた。忽ち嶮然として聳り立つた千尺の危巖。萬蔓に縋つて漸くそれへ躡ちて見ると天地豁然として開け、群壑、脚底に連つて風景頗る奇峭である。白隠は遠い

岩瀧山に入る

鹿野徳源

山中の危巖

谷間に丁々と響く伐木の音を聴きつゝ、暫時、恍惚としてその巖の上に坐禪した。すると、遠い處から『おーい、おーい』と呼ぶ聲がするので、振り返つて耳をとめた。その人は『その巖へ登つちや危険い、早う降りて來なさい』と云つたので、白隠は其のまゝ降りて來た。

その夜、白隠は何時もの如く坐禪して、深々とふけ渡つて天地寂然、萬籟、聲なき丑滿刻に至つた。忽ち覺然たる人の足音が響いた。これは不思議!と、耳を聳つる間もなく、ガラリツと戸を開けて入つて來た男! 見れば丈は八九尺もある、蓬々たる鬚髮、炯々たる眼、その形は苦行仙人のやうである。凄い眼で白隠をチロリと睨み、洪鐘のやうな聲で『慧鶴! 慧鶴!』と呼んだ。白隠は黙つて返辭をしなかつた。暫らくすると其の男はスーウと出て行つた。後は一層静寂になつた。白隠は怪しんだ。漸く起つて戸口の處へ行つて見た。が、戸は依然として締つて居る。更に人の入つて來たやうな様子はない。白隠は『あ、山の神が來て俺を試めしたナ』と、獨り靜に點頭いた。

翌る朝、一人の樵夫が來て『昨夜は何も變つたことはなかつたか』と問ふので、白隠は『どうして』と問いた。否、『貴僧が昨日登られた彼の巖は、山の神の住家で、あれへ登れば必ず

深夜の巨人

樵夫との問答

恐ろしい祟りがあります」と、昨日、吃驚して呼び降したことを話して聞かせたから、白隠は平氣で前夜の一條を物語つたが、聞いた樵夫は懼然として「テモさても偉い和尚さまちや」と畏敬てゐた。

微妙の音楽を聴く

白隠は毎日、小さい木魚をポク／＼敲いては御經を讀んでゐた。而して讀んでゐると、心は何時しか纏縛として高い／＼處く上るやうで、何とも言ひ知れぬ有難さを感じるのであつた。或る夜、例の如く木魚を敲いて御經を讀んでゐると、俄に空中に微妙の音楽が嘯唳として響いた。白隠は靜に耳を側けてゐたが、自ら恍惚として我を忘れて終つた。そんなことが一夜ならず二夜三夜、はては六七夜も續いた。それが無上に有難かつた。或る日、白隠は坐禪して居つて、「あ、あれは氣の迷ひだ、唯心の所造だ。この山中に彼の聲のあるべき筈はない」と忽然として知つた。それから再び天樂を聴かなかつた。

内魔と外魔

白隠は後に能く衆に示して、「深山に獨居すると、魔魅が出ては色々な邪魔をするものだ。御經に」内魔、動くときは、外魔、便りを得る」とあるのは是れである」と云つた。又、或る夜、坐禪して居ると俄に怖ろしくなつて來た。白隠は自ら勵精して問うて曰く、「何

何が怖いのだ
妖怪同士

が怖いのだ」「妖怪が出さうだから」「その妖怪と云ふのは畢竟、何ちや……彼が妖怪なら汝も妖怪ぢや、妖怪同士で何が怖い……汝が佛なら彼も亦た佛である、佛同士なら猶更ら怖いとはない。魔佛同體、邪正一如、而も我が心即ち是れ法界である。この中、何を以て彼とし、何を以て我とするか……」と考へ來たら、身心自ら廓然として更に怖くなくなつた。この時から白隠は、心に動着なく苦樂を以て一となし、尊貴の前へ出ても我が臥内に居るやうに暢氣であり、絲竹管絃の嬌めかしい聲を聴いても、枯淡冷嚴なる我が禪室に居るやうになつた。春、この岩瀧山に登つてから。早や夏と過ぎ秋と逝いて、今は朔風凜烈たる冬となつた。寒い山居の夜にも、古聖先徳の修行の勝躑を偲んで、

苦樂一如

わすれては寒しとぞ思ふ床の雪を

はらふひまなき人もありしに

と口誦んで、更に此の山の草木と共に朽ちんとしてゐた。

雪中の山居

五 松蔭寺の歸坐

松蔭寺の歸坐

岩瀧山の一年

故郷の使者

父の病氣

松蔭寺の荒廢

子の行衛

松蔭寺の歸坐

白隠は凜然とし枯木寒巖の如く、山中元より曆日無きも、嚴陰の雪も何時しか消えて鶯が幽谷を出る春は、躑躅花咲き杜鵑啼く夏となり、尾花咲き蟋蟀啣く秋となり、今は早や白山や御嶽の峻嶺が雪の銀冠を頂く冬となつた。

或る日、一人の老人が路に迷ひつゝ岩瀧山に登り白隠の草庵を敲いた。訪ふ聲に白隠は振り向き、愕然として實に驚いた。それは故郷駿州よりの使者で、我が家に久しく働いてゐる忠僕夜計七兵衛であつた。「お前どうして来た?」と云つたまゝ、姑し言葉も出なかつた。七兵衛は漸く白隠の姿を見て嬉し泣き。涙の内に語る下の一條。

貴僧は何も御承知ないが、國に残り給ふ父宗露様は長の御病氣……それに付けてもお嘆き遊ばさるゝは松蔭寺のこと。松蔭寺は叔父の大瑞様が御開基になり、清見寺の天祥禪師を御請待申して中興し、長い間の御辛勞、夥しい心血をお運ぎになつて漸つと出来上つたのである。

然るに貴僧様が寺を留守にしての長の御行脚で、寺は段々荒れるばかり、老の眼にこの荒廢を見るに堪へぬ……貴僧が何時までもお歸り無うては、今に松蔭寺も狐狸の住家とならうも知れぬとお嘆き……それを聴きまして此の七兵衛が、旦那様、決してお嘆き遊ばすな。久しく

慧鶴様がお歸りにならぬとても、まだ天へお昇りになつた譯ではありませぬから、南は熊野路から西は九州筑紫の果までも、石を起し草の根分けても屹度、私が尋ねて参りますと申上げ、早速お暇頂いて駿河から遠州、三河と處々方々を尋ね、尾州からこの美濃路へ入りまして、この岩瀧山に修行者が居ると聞いて、尋ねて参つたのであります。

と細々と物語り、「さア私と一緒にお歸り下さるやうに」と、涙を絞つて云つた。白隠は靜かに聽いて、「七兵衛、お前の忠義には感心した……なれども、昔から危邦には入らず、亂邦には居らずと云ふ……祢は歸らぬ……」と云ふや、七兵衛は聲荒らげ、「如何なる天魔の魅入りしか、如何に出家の御身とは申しながら、唯た一人のお父上のお心に背き給ふとは情なや、殊にその御病氣は、明日をも知れぬ御容體、臨終の時に唯だ一言能く歸つて呉れたとお喜ばせ遊ばせや、お終にも考順は至道の法なりとあるでは御座りませぬか……さア早うお歸り下さい」と、涙と共に訴へた。流石の白隠も、忠義一徹なる七兵衛の熱心に動かされ、一たびは草木と共に

暫ちんと決した心を翻し、父の臨終に看護せんと、遂に岩瀧山を下つて松蔭寺に歸つた。實に是れ享保元年の十一月、白隠正に三十二歳の冬であつた。白隠の歸つて来たのを見て、父

孝順は至道の法なり

下僕七兵衛の忠言

松蔭寺の御坐

故郷に歸る

法華經の大悟

歸家穩坐の消息

父の死

は重い枕を擧げて喜んだ。殊に七兵衛が忠義を泣いて喜んだ。爲に病氣は癒くなる位。
 松蔭寺は荒果て、臥ては星を拜み、雨降れば家の中を傘差して歩くと云ふ有様。従つてその日／＼の食ふ物もない。こゝにも覺兵衛と云ふ爺さんがゐて、白隱のために身體を惜しまず働いて、薪採り水汲みまで親切に能く世話して呉れた。白隱は夫れが坐に嬉しく、時折は岩瀧山中の事など思ひ出して、ある時に、
 情けあるもつらきも遠くなり果てぬ
 うれしや餘處の山は尋ねじ
 と詠み、歸家穩坐の消息を高唱した。
 父宗彝は翌る年の十二月に大往生を遂げた。白隱は幸に末期の水を汲み、兼ねて親しく野邊送りの回向をした。

六 法華經の大悟

十三年來一處不住の行脚僧として、旅の人となり、山の人となつてゐた白隱は、今や全く寺

寺の人

故郷の幸福

夢中の母

二面の古鏡

の人となつた。故郷の人となつた。
 寺の人となつてから殆んど十年。松蔭寺に在つて専ら枯淡を旨とし、嚴勵を宗とし、具に艱辛を嘗めた。而も此頃より漸く十五年來の蘊蓄を傾けて、羸直に菩提心の一路に進んだ。
 『豫言者は其の國に尊つとばれず』と云ひ、『他國坊主に國武士』と云はれて居るが、故郷の人となつた白隱は却て幸福であつた。その一つは、確に天下無雙の秀麗なる天地であつた。白隱は此の靈山秀水の間に起臥し、嘯傲して、思ふがまま禪情詩思を弄して聖胎を長養した。この間に妙心寺に轉位して、白隱と號したのであつた。而して朝な夕なに亡き父母の墓に香華を捧げ得たのは、如何に白隱を喜ばせたであらう。
 或る夜。白隱は復た夢に懐かしい母を見た。母は紫色の立派な衣服を白隱に與へた。白隱は『それは有難う』と貰ふと、兩方の袖が非常に重いので、中を搜つて見ると直徑五六寸位の古い鏡が一面づゝ有つた。而して右の袖のは、皎然として一點の曇無く、玉のやうな光は我が心肝にまで透き通り、自身及び山河大地まで、恰も一碧の澄潭に底無きが如く、萬衆森然として形影相現じて居る。これに反して左の袖のは、全面、一點の光なく恰も甕の如くである。如

心の眼が開いた

何して斯麼だらうと怪しみつゝ、手に取つて見てみると、次第々々に光が出て来て、全面忽ち光耀して、更に右の鏡よりも百千萬倍も優つて居るやうになつた。この夢を見て以來、白隠の心地は更に玲瓏透徹して、萬物を見ること自己の面を見るが如くになつた。白隠の心の鏡は、母から貰つた古鏡よりもモツと光つた。而して是れ即ち我が如來の正眼を開き得て、佛性を徹見したのであると知つた。白隠が心の眼は炯然として開いた。山河大地、悉く如來の大光明を放ち、草木國土、悉く如來の大説法を讚嘆し、塙壁瓦礫亦た悉く如來の清淨大法身となつて居る。

法華經に契當す

享保十七年秋七月、白隠正に四十二歳の折である。鼻々と風に靡く香煙の下に心靜かに法華經を讀誦してゐた。讀んで譬喩品に到つた時、忽ち啣々として庭に鳴く菘の聲を聞き、豁然として法華深甚の妙理に契當した。三十年前に發した法華經の疑惑は、釋然として一時に消融し、而も従前多少の悟解了知が猶ほ大に誤つてゐたことに氣が付くと共に、法華經が正に如來出世の本懷で、誠に經王中の嚴大王なることを沁々有難く感じたので、覺えず聲を擧げて泣いた。茲に於て初めて孤危險峻なる正受老人が平生の受用をも徹見した。

妙法華經の解釋

花の君子

白隠は、三十年來法華の爲めに轉ぜられてゐて、未だ出身の活路を得なかつたが、今日、端無くも眞に法華を轉じ得て、直に大自在底に透徹したのである。法華轉、轉法華の大道人となつたのである。後に此の妙法華經の四字を解釋して、

久繫曰く、妙法蓮華經の説、得て聞つべしやと。曰く、妙法は人々本具の眞性にして體なり、蓮華は譬にして用なり。問ふ、春花秋葉、算數も盡すべからず、中に就いて獨り蓮華を以て妙法の譬喩とするは何んぞや。答へて曰く、本具の性、萬物の根元、天地の太祖として、最も貴き御法なれども、一切衆生の無明塵勞の淤泥の底に在りては、尊貴も下賤も、宮も藪屋も同一無明の泥土にして分曉なき事、恰も蓮の泥土の底に在つて、葦根、蘆根、菖蒲根、只一同に泥土なるが如し。池水の澤を受け、春夏の暖を得る則は、荷葉團々として根莖萌し出で、一華僅に開敷する則は、色香尊貴、亭々たる花の君子なり。萬紫千紅互に嬌色を逞しうすといへども、日と同じうして語るべからず。人々本具の眞性も亦斯くの如し、精鍊刻苦して心華發明せざる以前は、是れ一枚塵勞の泥土なり、一旦豁然として貫通するに至りては、天地一指、萬物一馬、長河を攪して蘇酪となし、荊棘を變じて梅檀林となす。諸佛も是を得

善巧方便の譬喩

常在靈鷲山

金剛不壞の人

法華經の大悟

一一四

て無上正覺を唱へ給ふ、是を失ふ則は諸佛も亦一枚の毛道凡夫なり。此故に一切衆生をして佛知見を開かしめんが爲に、唯是れ暫時善巧方便の譬喩ならんのみ。『八重葎』

白隠は正に法華經を我が心に讀んだ。法華經の有難さが分つた。而してお釋迦様の尊さが初めて解り、而も如來の法身は不滅にして、常に靈鷲山に在つて説法教化し給ふことを知り、松蔭寺即ち是れ靈鷲山にして、白隠自らは釋迦なることを知つた。

白隠は此の時より、自由の人となり、解脱の人となり、無礙の人となり、圓通の人となり、施無畏の人となり、吉祥安樂の人となり、妙不可思議の人となつた。而して三十年來、苦辛懊惱せる、火も焼くこと能はず、水も漂はすこと能はざる金剛不壞の人となつた。

第六章 機鋒と教義

一 佛國土の因縁

準備時代

白隠が四十二年の前半生は、全く是れ準備時代である。今や整然として其の準備を完成した。乃ち思ふ存分に多年の蘊蓄を傾けて嚮勃たる一大抱負を披瀝した。

遠離行

大凡、出家遁世の上士は、人の發起勸請を待たず、常に勤めて法施を行すべし。縁に隨ひ機に應じて普く一切の利益す、此故に佛は常に遠離行を好ませ玉ふなり。所謂遠離行とは、一切の諸佛は、最初菩薩行の時より常に利他法施の行を好ませ給ふ故、勸請を待たず、近遠を論ぜず行きて教ふるを以て自行とせさせ玉ふ。『八重葎』

煩惱魔軍の戦陣

是れ即ち白隠の純潔熱烈なる信仰であつた。この信仰の鎧を着て、猛然として煩惱魔軍の戦陣に立つた。その武者振の雄々しさ、恰も蒙古來の聲に『大事到來せり』と、決然として起つた相模太郎も斯くやと思はるゝばかりである。而して無縁の大慈悲を抽んで、佛國土の因縁を

佛國土の因縁

一一五

成就せんとして曰く、

唯願はくは、一切衆生を見る事一子の如く、老幼尊卑を揀ばず、緇素男女を觀せず、志を定め力を合せて教諭して、塵劫を歷るとも退轉せず、無縁の大慈悲を抽んで、一切衆生と共に無上菩提を成ぜんとす、是を佛國土の因縁といふ。問ふ、作麼生か是佛國土の因縁。答へて曰く、一切衆生の類、盡く是佛國土の因縁なり。原るに夫諸佛の刹土は虚空の如し、金銀を鏤めたる飛樓湧殿の經營莊嚴全く無し。須らく知るべし、諸佛の刹土は菩薩を以て莊嚴する事を、山林廣野、樹下石上何れの所にもせよ、佛、端坐して說法せさせ給ふ時、無量の圓頓、大權の諸菩薩、前後に圍繞して大法會を補佐し玉ふ、是即微妙の大莊嚴なり。

『八重葎』

と。即ち此の敬虔なる信念が發して、下化衆生の勇猛精進となり、更に四十二年間の活潑々地の用機となつた。白隠が出世の本懐は正に此處に在つた。

白隠法華大悟の後、大に玄關を開いて四來應化の人となつたのは、享保十二年四十三歳から十年ばかりの間であつて、庄司察女、杉山政女、石井玄徳、杉澤宗信、古賀兼通等の優婆塞、

佛國土の因縁

微妙の大莊嚴

十年の接化

優婆夷、及び快俊、鐘山、良哉、惠通などの銅頭鐵額が奔走し松蔭寺に詰掛け、元文元年の秋には、僧堂まで建つた。この間に、『臨濟錄』や『虚堂錄』、『維摩經』や『碧巖集』などが盛んに提唱された。

元文二年の冬、白隠が初めて伊豆の臨濟寺の請に應じて『碧巖集』を提唱した時に、その會に連つた良哉等が、愕然として『今までの風とは餘程異つて來た』と驚嘆の眼を睜つた時に、白隠は『山の登れば彌々よ高く、海の入れば益々深きが如くであるから、以前よりは別に長所があるであらう』と云つて、公案の微妙と共に暗に自ら勉めて休まぬ豪邁の氣象を示したことがあつた。白隠は飽まで努力主義で後にも、

夫れ法は山に登るが如し、隨つて登れば隨つて高し、唯だ能く退住無きを以て要と爲す、我れ曾て正受の室に入つてより、寐寤にも安んぜず、今冬六十七、幾んど雲林門中に遊ぶが如し。

と示して、大に會下を激勵した。白隠は恰も努力主義の權化の如く、最後まで此の努力を續けた。

豪邁の氣象

努力主義の權化

二 孤危険峻なる機鋒

白隠の禪機

白隠の禪機は孤危険峻にして、その家風は實に嚴勵枯淡であつた。「夜船閑話」の序に、師、鵝林に住する事、大凡四十年。鉢囊を掛けしより以來、雲水參玄の布衲子履に門闥に跨れば、師の毒涎を甘なひ、痛棒を滋しとして、辭し去る事を忘るる者、或は十年或は二十年、鵝林林下の塵と成事も、亦總に顧みざる底あり、盡く是叢林の頭角、四方の精英なり。各々東西五六里が間に分れて、舊舎廢宅、老院破廟、借て以て菴居の處として清苦す。朝艱暮辛、晝餒夜凍、口に投する者は菜葉麥麩、耳に觸るゝ者は熱喝垢罵、骨に徹する者は噴拳痛棒、見る者鮮を攪め、聞者肌汗す、鬼神もまた涙を浮べつべし、魔外もまた掌を合せつべし。其初め來る時は、宋玉、何晏が美貌有て、肌膚光澤凝れる膏の如くなる者も、久しからずして恰も杜甫、賈島が形容枯槁顔色憔悴するが如く、或は屈子に澤畔に逢ふが如し、參玄驅命を顧ざる底の勇猛の上士にあらざるよりんば、何の樂しみ有てか片時も溘泊する事を得んや。是故に往々に參窮、度に過ぎ、清苦、節を失する族は、肺金いたみかじけ、水分枯

鵝林の家風

老婆の臭乳

肉は即ち靈なり

雨中の托鉢

渴して、痲痺地痛難治の重症を發せんとす、是を憐み是を愁ひて、師、不豫の色有る者連日、乍ち忍俊不禁にして雲頭を按下し、老婆の臭乳を絞つて、是に投るに内觀の秘訣を以てす。慘澹たる有様が歴々として目に観るが如くである。この苦行のために未だ道心薄き參玄の衲子、多くは可惜、赤肉團を破壊した。

肉は即ち是れ靈である。人々悉く是れ無位の真人である。故に肉を破るは即ち是れ靈を殺すのである。慘澹たる松蔭寺の叢林生活は、實に由々敷一大問題であつた。此に於て内觀の秘訣を授けて、これを救済したのであつた。

松蔭寺は元より豊かでない。掛錫して居る雲水は、毎日、宿から村へと托鉢に廻つた。或る日、潜と降る雨に、雲水達も今日ばかりはと托鉢の支度もしないで居ると、白隠は何時ものやうに支度を整へて玄關へ出て見ると誰もゐない。ドウしたと聽けば、雨が降るからだと云ふ。これを聽くや否や白隠は聲を勵まして「東海道は人が通らぬかツ」と呶鳴つた。

この一語、以て能く白隠が孤危険峻なる禪機と、飽くまでも辨道に忠實にして少しも油斷、懈怠の無いことが知れる。

孤危険峻なる機鋒
二二〇
白隠は松蔭寺に在つて、堂々として正令を全提してゐたが、而も清規猶未だ全からず、種廢無慚の徒が斷えず出入して、怪しい空氣が漠々として禪林を壓して居つた。白隠は之れを痛罵したのであつた。

復た恐る、近世、道微にして法衰へ、不羈の晩進、無頼の後世、其の始めて到る時、閑雅の態度、寔に愛すべく、善順の志氣、寔に貴ぶべし。將に謂へらく生死を念じて透過を求むる底の眞正の衲子なりと。既にして未だ一月を経ざるに、龜鏡を泥視し、鴻規を塊看し、伴を引き黨を結んで横放縱逸、庭階に涉つて喚呼し、廊廡に立つて諷詠し、宗師も伏すること能はず、耆舊も制することを得ず、或は井索を截斬し、鐘鼓を推落し、虎關を窺ひ出で、狗寶を穿ち入り堂前に環列して野舞村歌し、山後に蟻聚して雷同浪泊し、菜刀を暗路に栽ゑ、水瓶を歩廓に積み、厠上の坂を鋸て、人をして尿坑に陷墜せしめ、竈下の柴に洒ぎて、人をして晨爨に困苦せしめ、醜態を茶店に逞しうし、鄙陋を酒肆に盡くす、叢社の中に在つて精鍊刻苦する者、千百人なりと雖も、九旬、門閭を越えざる故に、人その光儀を見るなく、街市の外に趨つて縱逸醜惡する者は兩三輩と雖も、多日、露明にある故に、誰かその黒業を

知らざる。噫、龜放を恣にする者は七八個にして、瑕玷を蒙る者は幾萬個なるや、玉石共に焼かれ金鐵皆な爛る。此に於て善信男女、沙門を賤みて泥猪の如く、僧儀を蔑して癩狗の如く、行人の詞鋒に罹り、處士の口碑に銘せらる、悲しい哉。原漢文『息耕錄開蓮普說』
慷慨の志、激越の言、祖道の頹廢を痛嘆して切に學者の大懺悔を絶叫した。且つ是れ等の無慚無愧の徒を呼んで、『剃頭の闍提』『方袍の外道』『肉身の魔羅』『地行の波旬』と、有らゆる罵倒を極めた。

時代の木鐸となり、宗門の中興を期する白隠は、姑らく取て第二義門に下つて法旛を翻したのである。是れ即ち白隠が、四十二年間を終始一貫したる應化の眞精神である。是れが即ち白隠の禪機である。家風である。蓋し亦た白隠が豪邁果斷なる氣象の反影である。

遂翁は鶴林門下の麒麟兒であつた、白隠は一個の新佛を打出せんと、殊に鉅鎚を極めた。遂翁は一則の公案を拈じ、奮然として參禪商量した。が、未だ容易に徹底しなかつた。白隠は之れを激勵して『若し七日にして徹底し得ずんば、寧ろ海に投じて死せよ』と、一言、恰も寒夜に霜を聴くが如く、遂翁は更に肅然として思量した。一日一夜——三日——五日——七日と

夢の間に過ぎ去つた、而も依然として模索不着である。遂翁は泣いた。而して最早や再び白隠に見ゆるの面目はないと覺悟した。忽ち死を決した。

悄然として濱邊に立つた遂翁は、雪山崩るゝ怒濤を目がけて、さんぶと許り飛び込んだ。その瞬間、豁然として大悟した。

遂翁は恙なく再び白隠に相見した。

不惜身命の覺悟

白隠は、法を求むるに不惜身命である。常に門下に、命を捨てゝ大事を證得せよと戒めたのである。白隠は此の如くして、嘗て正受老人に鉗鎚せられたる辛辣なる手腕を、無遠慮に而も遺憾なく發揮した。

三 見性と内観

松蔭寺の旗

『見性と内観』とは松蔭寺僧堂の規矩であり、準繩であり、旗幟であつた。而して是れ白隠の生命であり、經綸であつた。これが爲めに念佛禪を排し、默照禪を痛罵した。即ち見性と内観のことを説いて、

且つ戦ひ且つ耕す

兵法にも亦云はずや、且戦且耕 是萬全之良策也。參學もまた爾り、工夫は且戦ふの眞修、内観は且耕の至要、鳥の雙翼の如く、車の兩輪の如し。内観の秘訣は、予向きに江湖參玄の衲子の爲に『夜船閑話』に書し了れり。予常にこれ等の趣を以て衲子の禪病を救ふ事、幾人と云ふ數を知らず。中に就て重症必死に垂んとする者八九を治す。學者必ず内観と參學と共に合せ並べ貯へて以て、生平の本志を成ぜよ。學道の人、縦ひ參じて五派七流の大事を究め得るとも、若し夫れ短壽ならば、何の用を成すに堪へんや、縦ひ又内観の力に依て、彭祖が八百の歳時を閱すと云ふとも、若し夫れ見性の眼無くんばたゞ是れ一個老道の守屍鬼、何の好事かあらん。若し又枯坐默照を以て足れりとせば枉て一身を錯り、大に佛道に違せん。『遠羅天釜』

斯の精神に依り鶴林門下の鸞雛鳳兒をして、齊しく靈肉雙全の衲子たらしめんと瞋めたのであつた。

虚堂の眞風

元文五年の春、『虚堂録』を評唱した時には、大に虚堂の眞風を擧揚した。乃ち衆に示して曰く、

我れは是れ禪門宗師の粕糟なりと雖も、若し破叢林、放蕩不羈の後生あらば、嚴責痛棒を加へん。執役の者、照顧せよ。

令、嚴にして諸士亦慘として驕らず、これより白隠の道價は天下の禪林を風靡した。而して見性内観の雙全を誡めたのであつた。

學飢饉中の參

延享四年の秋、偶ま飢饉に遇うて、一時集つた江湖の雲衲は且らく鶴林を離れた。而も猶ほ白隠の膝下に在り、形枯を誓つて去らなかつたものが二十人もあつた。その十月の五日、達磨忌に際して白隠は一偈を拈じ、大衆が金鐵の心肝を喜んだ。曰く、

風。捲。怒。濤。田。苑。荒。 分。離。吾。野。鬼。閑。神。

心。肝。挾。鐵。二。十。輩。 共。嚙。菜。菹。二。甘。苦。辛。

この慘澹たる苦辛に堪へ得らるゝ者は、正に是れ内観修養の力であつた。而も更に萬事を放下して直ちに參禪見性せずんば、未だ以て真正の衲子たること能はざるを痛言して居る。

須らく知るべし、真正參禪の衲子の前には、塵務なく世事なき事を。譬へば茲に一人あらんに、往來絡繹たる巷、稠人廣衆の中に於て、錯まつて二三片の金子を遺落したらんに、人目

妙道と黄金

しげしとて棄てや置くべき、物騒がしとて尋ねずやあるべき、多くの人々を押わけ、かいくどりつも、一回尋ね出して我手に入らざらん限は、心頭体罷する事能はじ。然らば則ち塵務繁しとて參禪を怠り、世事煩しとて工夫を廢せん人々は、諸佛無上の妙道をもつて、彼兩三片の黄金程には貴び惜まざる者に非ずや。塵務の上、世波の間に於て、彼の黄金を遺落したりし人の如く、專一に究明したらんには、誰か歡喜の眉を開かざらんや。『遠羅天釜』

祖苑荒寥として宗門の衲子、多くは心中無價の寶を遺落し、茫然として自ら之れを拾はんとするものなきを慨いたのである。

見性を主一とす

素と内観と見性とは車の兩輪の如しと雖も、真正參禪の衲子は、先づ見性を主一とするのである。これ塵務多しとして閑却すべからざる所以である。道のために不惜身命とは、即ちこゝを云ふのである。この見性を透徹するために、即身即佛を保護して内観の修養をも要するに至るのである。この見性と内観の二つを圓滿せしめる處に、鶴林の聲名が天下の叢林を壓倒したのである。

内観の修養

四 『神社考』と垂述説

享保十八年、白隠は林羅山の『本朝神社考』を読んだ。

羅山は實に排佛論者の先驅である。顧みれば、中古以來、纔に佛教の一隅に傳はつてゐた神儒二道の學問は、江戸時代の初から相尋いで僧侶の手を離れて漸く獨立した。此に於て神、儒、佛の三道は自ら鼎峙の狀を呈し、初めて神儒二道の學者から排佛論が出るやうになつた。その火蓋を切つたのが羅山である。

羅山は白隠が生れる前二十八年、即ち明暦三年に七十五歳で逝くなつたが、野中兼山と時を同うし、東西相呼應して朱子學を鼓吹した。初め建仁寺に入つて學んだが、三年にして家に歸り、十八歳の折、始めて朱子學を講じた。後、藤原惺窩の門に入つて四傑の隨一と稱せらるゝに至つた。家康が惺窩を召んだ時に、惺窩は、天海、僧傳等が帷幄に參じて居るのを肩しとせず、羅山をして是れに代らしめたものである。羅山は嘗に漢學に達したるのみならず、日本の學問をも兼ね、制度、朝禮、祭儀、外交の事、總て顧問を受けて頗る推重せられた。が、

排佛論の先

林羅山の思想

舊習に依つて祝髮して法印と稱し道春と號して居つた。羅山は『本朝神社考』を著はして頻に神佛混淆を排斥し、奈良時代から傳へられた本地垂述説を攻撃した。この猖狂なる思想が三百年後に實現して、明治維新當時に於ける極端な廢佛毀釋となつたのである。白隠は當時既に此の説を反撃した。

垂述説の信

願ふに夫れ佛は三世貫通せる大聖なり。神も亦三世洞明佛と異なる事なし。是内密同體なる故なり。願ふに夫れ我が六十州の扶桑、八萬軀の鎮座有りて、高明の徳を懷けり。靈驗妙應寔に在すが如し。佛日桑枝に上りてより後千有餘載、豈八萬軀の佛像のみならんや。豈千萬軸の經卷のみならんや。是れ本地無二、水波同體なるものにあらずや。『專使兔稿』

白隠の敬虔なる信仰は、本地垂述を以て水波同體となし、神即ち佛、佛即ち神、神と佛と圓融無礙にして、山河大地悉く大光明藏中に在ることを説き、堂堂として羅山の説を破した。これ當然である。この垂述説を信することに於て、初めて觀世音菩薩—富士山—白隠の妙現を知ることが出来る。白隠は自ら觀世音菩薩の應現と信じて居つた。即ちこれ垂述である。白隠は此の信仰あるが故に、自ら佛たると共に又た神たることをも信じて居つた。即ち白隠

觀音の應現

『神社考』と垂述説

壁生草明神

金剛の正體

の自叙傳たる『壁生草』に、
 予も亦縦ひ患難に罹ること有りとも、永く佛恩を報ぜんが爲に、箇の護法善神を頼み留む、
 御名を壁生草明神と稱し奉る。此神世上に立たせ給はん中は、枯坐黙照不生の黨、縦令天下に瀰満しありとも、必定眞風の地に墜つること無けん。是れ亦予が大願海なり。
 白隠は、不生不死般若の正體を指して直ちに壁生草明神と呼んだ。即ち是れ白隠が金剛の正體である。觀世音菩薩の現身說法である。更に又た白隠自ら禪風擁護の護法善神を以て任じてゐた。こゝに不可思議の妙智力がある。此の高尙幽玄なる垂迹説は、遂に偏狭なる羅山等の渴仰すること能はざる處であつた。白隠は恐らく『本朝神社考』を癡人の寐語として、一笑に附し去つたのであらう。

宗門滅亡の猛火

遮莫、三百年後その癡人の寐語が、澎湃として天を拍つ怒濤の如き變を以て、散々に我が佛教の岸を潰崩すに到ることを、白隠は不幸にして夢にだも知らなかつた。否、否、否、白隠は三百年後を顧みるの餘裕がなかつた。即ち脚下に焰々として燃えつゝある宗門滅亡の猛火を消さなければならなかつた。

儒道の抱擁

白隠は實に宗門滅亡の火災を救うた、健氣なる消防夫であつた。

五 三教一致の思想

本地垂迹説を信する白隠は、儒道をも猶ほ華藏世界中の一光明と見て、これを抱擁し、これを融和し、洋々として海の如き思想を示した。

漢に傳毅あり、牟子あり、呉に大傳、關澤あり、晋に隆遺民あり、陶元亮あり、唐に虞世南、杜如晦あり、房玄齡、蕭瑀あり、彼の善惠大士李長者、及び寒拾二賢士の如きは各大權の垂迹、補處の化現にして、是を散聖と道ふ、凡愚の輩の漫りに可否すべき類にあらず。

『兔專使稿』

と云つて、茲にも本地垂迹説を主張して、古來幾多の賢聖を補處の化現として、佛法護持の菩薩としたのである。この高遠なる思想あるが故に、眼孔、豆の如き偏狭なる儒者を見ては、寧ろ憐愍に堪へなかつた。

晦庵曰く、異端の虛無寂滅の教、其高き事大學に過ぎたれども實なしと言へるは、是れ晦庵

佛法護持の菩薩

三教一致の思想

佛の暗疾妬害の陋臆より起りし取るに足らざる鄙詞なり——文公大小大の老儒、惜むべし、排佛の妬眼、佛道の高明なるを明らめず、識量狭くして大學の寛宏なるを量らず、若し大學の高明たるを明らめば、何ぞ佛道の高明なるを怪まん、佛道の寛宏なるを量らば、何ぞ大學の寛宏なるを知らざらん。彼の清淨寂滅の諸説の如きは、有爲住相の衆生の爲に設く、有爲住相の病いえば、何ぞ寂滅の衆を留めん、然るを寂滅の所説を以て、佛教を高しとして是をなみせば衆生の象を探りて、終に全象を見る事能はざるが如し。『兎專使稿』

卓拔なる識見、高く地歩を占めて排佛者の愚を笑つて居る。更に當時の固陋なる囚はれたる儒者一輩を誨へて、

近代朱子流の學を嫌ふ人ども多く候由、夫は中々狭々敷了簡に候。聖人は常の師なしと申事の侍れば、朱子に限らず、程子に限らず、婦人小子の語と雖、實學の助けならんは捨おかす、工夫を下して力を得る様に心懸け候をこそ、學好む共、達人共可申候へ、只手前の淺はかなる了簡を恃みて、先賢を輕んじ、契はぬ小智を飾りて、彼此評判致候は、片腹いたき事共に候。『兎專使稿』

忌憚なく痛撃した。白隱は夙に儒道に對して一隻眼を具して居るので、鞏退之や朱子などの學説を批評して、常に佛理の源底と仁道の根本とが相一致することを説いて居る。これが即ち『三教一致辨』となつて表はれて來る。曰く、

三教一致、一致三教、畢竟如何、在止至善と書き送りけるに、至善の兩字得てきよつべしとの書面、近頃奇特千萬の好一撻、隨喜の餘り取りあへず。大略書付け進覽致し侍り、大凡三世を貫通の古今を鎖融するものは至善なり。大凡、聖經賢傳諸子百家數萬卷の書籍を超越して、最尊最上第一なるものは至善なり。昔、黃帝遙に廣成子が巖窟を尋ねて、大道の至要を求め給ふ。廣成子が曰く、陛下、若し大道を求め給はば、齊戒沐浴、七日を経て來り給ふべしと。帝、教へに任せて三七齋戒して行きて道を求め給ふ。廣成子が曰く、至道の極、昏々黙々たり。至道の精、杳々冥々たりと、言ひ畢りて眼を收めて總にも言はず。大凡十方の聖賢、古今の智者、至善に止まることを勤めて、而して後に明德を明かにし、大道を成就す。

禪門には是を自性本有の至要とし、律家には是を無相心地の戒體とし、密乘には是を阿字不

三教一致の思想
一三二
生の月輪とし、台教には是を法性寂然、圓頓止觀の大事とし、淨家には是を唯心淨土、六十恆河俱底那由多句の如來とし、老莊は是を虚無の大道とし、神家は高天原と相傳す。三世古今の間に至善を精修せずして、法成就に至るものは半箇もまた無し。
正に是れ唯一乘法、無二亦無三で、巧みに幽玄なる三教一致を鼓吹して、森森たる萬法を一佛乗中に歸せしめたのである。

今時儒釋の學人、百端を究めて窺ひ探ると雖も、他家の門關戸庭も亦臨み見ること能はず、背後に立つ事も亦得じ、末代の悲さは、人毎に外學を勤めて却て實徳を排せんとす。佛者は儒人に交るを見て喬木を下るの意をなし、儒人は佛者に交るを見て幽谷に入るの思ひを生ず、特に知らず人々儒佛の名を以て染汚すべからざる實徳ある事を。夫れ人の性の上には一物を添ふべからず、恰も紅爐の片雪の如し。但し儒佛は名にして皮毛の如し、大道は實にして骨髓の如し、有道の士は大道の骨髓のみを見て、皮毛の儒佛ある事を見ず。輕薄の族は骨髓の大道を求めず、却て皮毛の儒佛を隔つ、甚しき者は恰も冠屨の如くす、是誰が過ちぞや。只是古學亡びて至道を隠し、鄙習盛にして實徳を棄るの致す處なり——豈知んや、人々本具

の佛性は、是を菩薩と名づけ涅槃と稱し、儒門は是を至道と名づけ明德と稱す。李聃は虚玄と名づけ、孟軻は浩然と云ふ、各々の所見淺深なきに非ざれども是れ只一也。一なりと雖も諸稱一も相當らず、是を儒なりと言はんとすれば、丈夫面上、眉を畫くが如し、是を佛と言はんとすれば、新婦領下に鬢を栽るが如し、傍觀、腹を抱へつべし。儒に非ず佛に非ずして能く仁に、能く義なるものは其れ只心性か。徳、天地に齊しくして邊表を見ず。明、日月に並びて終始なく、天地と參つなる底の大物なり。儒釋の間に隠蔽すべからず、陰陽を吞吐し造化を取放し、秋葉春花みな他の恩力を受く、是故に云ふ、聖人は有言の天地なり、天地は無言の聖人なりと。自ら佛と稱し自ら儒と稱するものは、郎を呼んで奴と成す、終に實徳を失し、覺えず二教の區域に投入して互に吳越相隔つ、錯れるに非ずや。『兔專使稿』
白隠は最も該博なる知識と、精緻なる觀察とを以て評論し去り、遂に老子の復古的思想や、孔子の現實的思想は、佛陀が三世通貫の大思想に歸入すべきことを信じて、常に寛容なる態度を以て、抱擁主義を主張したのであつた。而も三世通貫の大思想とは何である。曰く禪である。松蔭寺の僧堂に提唱せられたる禪の眞面目、亦た窺ふに足ることが出来る。ここに宗門中興

の氣運は熟した。

六隻手の聲

魔軍摧伏の旗幟

白隠が全力を濺いで排斥したのは、滔々として叢林を壓倒してゐた默照枯坐と念佛往生との禪風であつた。而して白隠は、關鎖向上の眞風を鼓吹してこの法滅の魔軍を摧伏せんとして、鬱勃たる滿腔の經綸を傾けた。その旗幟が謂ゆる『隻手の聲』である。

白隠が宗門中興の大勇猛心を振ひ起したのは、正に是れ正受老人の提撕と依囑とに由つたのである。

一日、師、難透數段の因縁を擧揚し、鶴林に示して曰く、此は是れ宗門奪命の神符、法窟の爪牙なり。四七二三の列祖、唯此の些些子を傳へて今に到る。寶鑑國師行脚の後、此の道、今人棄て、土の如し。天下滔々として唯だ二乘小果の族有るのみ。當家眞正の種草を求むるに、宛も日裏に星斗を尋ぬるが如し。今、扶桑國を一掃して唯だ此の正受一員あるのみ。自ら恨むらくは未だ附屬の人を得ざることを。大法の慧命、懸絲の如し、偏、勤めて粉骨碎身

開國中興の功臣と爲れ

し、此の已墜の眞風を挽回せよ。彼の斷見に魔黨を粉碎して開國中興の功臣と爲れ。若し法滅の黨を折伏せんと欲せば、須らく千仞の荆棘叢を透過して、向上の關鎖を推倒すべし。若し未だ荆棘を透過し、關鎖を推倒すること能はずんば、爭か法滅の魔軍を摧伏することを得ん。旃れを勉めよ。原漢文『正受老人崇行錄』

古今獨歩の隻手の聲

憂宗の熱淚、潛々として痛腸より出づ、誰か之れを聽いて感奮興起せざるものあらんや。白隠は乃ち起つて粉骨碎身し、此の已墜の眞風を挽回せんとした。これ實に白隠が唯一の使命であつた。この使命を全うするために、古今に獨歩して『隻手の聲』を恣に弄した。

蓋し隻手の聲とは如何なる事ぞとならば、即今兩手打合せて打つ時は丁々として聲あり、唯隻手を擧ぐる時は音もなく香もなし、是れ彼の山姥が云ひけん、一丁空しき谷の響は無生音をきく便りと成るとは此等の大事にや、是れ全く耳を以てきくべきにあらず。思慮分別を交へず、見聞覺知を離れて單々に行往坐臥の上に於て、透間もなく參究しもして行き侍れば、理盡き詞究まる處に於て、忽然として生死の業根を拔離し、無明の窟宅を劈破し、鳳、金網を離れ、鶴、籠を抛つ底の安堵を得、此時に當りて何時しか心意識の盤根を擊碎し、流轉常没

耳を以て聴くべからず

の幻境を撥轉し、三身四智の寶聚を運出し、六通三明的の神境を超過す。
 貴ぶべし、隻手纒に耳に入る時は、佛聲、神聲、菩薩聲、聲聞聲、緣覺聲、餓鬼聲、修羅聲、天堂聲、地獄聲、世間所有の一切の音聲、毫釐も聞殘す事なし是を清淨の天耳通と云ふ。
 隻手纒に耳に入る時は、自界他界、佛界魔宮、十方の淨刹、六趣の穢土、一見に見做して掌果を見るが如し、是を清淨の天眼通と云ふ。
 隻手纒に耳に入る時は、廣大劫來輪轉昇沈の跡、塵點劫後往復遷流の影、照々焉として寶鏡に對するが如し、是を清淨の宿命通といふ。
 隻手纒に耳に入る時は、喫粥喫飯、運動施爲是れ修得底にあらず、學得底にあらず、人々本具の活三昧なる事を徹了す。此時に當つて華嚴の四種の法界、法華の唯一乘、空手にして鋤頭を把り、歩行にして水牛に騎る。穢土を轉じて淨土となし、凡身を變じて佛身と成す等の大事、燦然として目前に充塞す、是を清淨の神境通と云ふ。
 隻手纒に耳に入る時は、自心、他心、親戚心、佛心、神心、衆生心、一見に見透して疑惑なし、是を清淨の他心通と云ふ。

隻手纒に耳に入る時は、人々本具の心上、一點の無明なく一點の生死なし、廣大圓明、高閑虚凝、是を清淨の漏盡通といふ。
 此時に當りて百千の法門、無量の妙義、世間所有の功德、聚世間所有の寶莊嚴、盡く自己の心上に具足して、毫髮ばかりも缺闕なし、初めて知る、六度萬行、體中に圓なる事を、人間天上の善果、何事か之に勝らん、三賢四果の歡喜も豈に此に過ぎんや。「叢柑子」
 隻手の聲とは、自受用三昧である。三昧王三昧である。白隱を知らんとせば、先づ此の隻手の聲を聽かねばならぬ。隻手の聲を聽き得たならば、又た能く粉骨碎身の大勇猛心をも知ることが出来る。白隱が粉骨碎身の大勇猛心を知り得たならば、白隱が出世の本懐を知ることが出来る。出世の本懐を知つて、初めて一代の生涯を知ることが出来る。即ち白隱の外に隻手の聲なく。隻手の聲の外に白隱はない。白隱と隻手の聲、隻手の聲と白隱は、二にして不二、不二にして即ち二である。隻手の聲は、白隱の廣長舌であり、常在不滅の清淨法身である。今も猶ほ儼然として『隻手の聲』は在る。これを聽くのが即ち白隱と相見するのである。否、現在ばかりではない、未來兆載永劫の後までも丁々として響き渡つて居る。これを聽いて悟る者

お三婆の入
得

は賢か、これを聴いて迷ふ者は愚か。若し一步を過れば忽ち無間獄中の惡鬼とならねばならぬ。白隠は寶曆七年の春、信州下伊那郡の興禪寺へ請に應じて行つた。其處にお三と云ふ婆さんがゐた。嘗て鐵文禪師に參じて大悟して居つたが更に白隠に參じた。白隠は豁達なる禪機を弄して『隻手の聲』を示した。お三婆さんも然る者、言下に一首の和歌を呈した。

白隠の隻手の聲を聞くよりも

兩手を打つて商ひをせよ

と、『隻手の聲』の眞消息を喝破した。若し『隻手の聲』のために轉却せらるゝの癡漢ならば、宜しく兩手を打つて商ひをするのである。こゝに『隻手の聲』の生命がある。

白隠は、お三婆さんのために、竹箒の圖を描いて遣つた。婆さんは自らこれに

日本の惡知識らを掃くはうき 先づ第一に原の白隠

と題した。亦た是れ知己の言で、婆さんは克く白隠が關鎖向上の眞風を鼓吹しつゝあるに隨喜の心を運んだのである。

白隠が應化時代は、唯だ是れ『隻手の聲』一則の公案である。

第七章 應化と示寂

一 『十句觀音經』 『五位口訣』 及び 『槐安國語』

白隠は全く觀世音菩薩の化現である。隨處に應現して無盡の大説法を續けてゐた。

その頃、江戸幕府の家臣に井上兵馬と云ふ者があつた。夙に延命十句觀音經を信仰して、久しく有縁の道俗に印施して居つた。或る日、卒然として死んだ。而して地獄へ行つた。平馬は、威儀嚴めしい閻魔大王の前へ呼び出された。閻魔は『平馬、其方は娑婆に在つて十句觀音經を流通して居るが、それは誠に奇特なことである。然し其方が遣るだけでは、元より微力のことであるから充分に弘めることが出来ぬ。この頃、駿河には白隠禪師が居らせらるゝ、若し其方が禪師の力を手倚りにしてこれを弘めたならば、忽ち有縁の人々を導くことが出来て、その功德は實に廣大である……其方を徴したのは只だ此れのみである』と云うたと思ふと、平馬は勃然として蘇くつた。

『十句觀音經』 『五位口訣』 及び 『槐安國語』

井上平馬と
十句觀音經

『十句觀音經』『五位口訣』及び『槐安國語』

一四〇

平馬は餘りの尊とさに暫しは夢かと怪しんだが、早速、手紙を白隠に届けた。白隠も難値難遇の因縁を随喜して、これより専ら十句觀音經を弘通した。實に是れ延享二年のことである。後に『延命十句經靈驗記』一卷を書いたのは、即ちその敬虔眞摯なる信仰の告白である。白隠は寛延元年の夏、忽然として五位偏正回互の秘奥を徹證した。この問題は四十年前、正受老人の爐竈に於て初めて觸れた一大公案であつた。その後、特に宗格に請うて其の秘奥を傳へて貰つたが、白隠は其の言、半ならずして『解つた〜モウ聴かなくとも好い』と云つて、却て宗格をして驚かした。爾來こゝに四十年、白隠は夢寐にも其の參究を怠らなかつたが、遂にその淵源を究めて今日端無くも徹證するに至つては、心地更に一段の妙趣があつたであらう。越えて二年、寶曆元年に『洞上五位偏正口訣』一篇を著はして須らく密々に體究すべきことを勧めた。

この五位と云ふは、支那の洞山良价禪師の作られたものと傳へられて、幽玄なる禪の宇宙觀を示したもので、

正中偏。偏中正。正中來。偏中至。兼中到。

の五つであるが、更にこれを君臣の儀に譬へて位など云ふ字を付けるやうになつた。更に又た之れを華嚴の教理や易經と對比して愈々精緻を極めて居る。即ち、

- | | | | | |
|------|------|--------|------|------|
| (五位) | (四智) | (四法界) | (君臣) | (易卦) |
| 正中偏 | 大圓鏡智 | 事法界 | 君視臣 | 巽 |
| 偏中正 | 平等性智 | 理法界 | 臣向君 | 兌 |
| 正中來 | 妙觀察智 | 理事無礙法界 | 君用臣 | 大過 |
| 偏中至 | 成所作智 | 事々無礙法界 | 臣轉君 | 中孚 |
| 兼中到 | 四智圓滿 | 三身具足 | 君臣道合 | 重離 |

と云ふ形になる。而して正は宇宙平等の實在を指し、偏は現象差別の状態を云ひ、正中偏は平等の中に差別あることを説き、偏中正は差別の中に平等あつて、理事無礙の理を明かし、兼中到は一切の相對を絶した事と無礙の妙理を示したのである。

要するに不立文字、教外別傳の禪の教理を、姑らく簡明に示したものであるが白隠は之れに

白隱の識見

日本の碧巖集

大燈語錄の因縁

『十住觀音經』『五位口訣』及び『槐安國語』

對して一家の識見を示したので、自ら心性を徹見して、宇宙の大精神と脈絡貫通する處があつたのである。

白隱が五位に徹證した翌年、その一代の快著たる『槐安國語』は出來た。『槐安國語』は即ち『大燈語錄』の評唱であつて、『日本の碧巖集』とも云ふべきである。その『大燈語錄』と云ふは、妙心寺の開山關山慧玄禪師の師匠たる大徳寺の開山宗峰妙超禪師のことで、後に大燈國師と謚された。その人の語録である。

白隱は恰も三十五年前、美濃の保福寺に在つて初めて之れを繙いたが、偶ま一老宿が『此の如き閑言剩語底の文字禪』と罵倒し去つたと聽いて、その儘擲つて復た顧みなかつた。が、後にその無意義なることを知つてからは、片言隻字を聞く毎に牙戦ぎ股震うたと云ふ。然るに此の頃に至つて門下の雲衲が、頻にその提唱を乞ふので終に之れを許し、大燈國師の禪機は、波瀾浩渺として涯埃を窺ひ難し、輕しく手を挿むべけんやと堅く誠め、自らは一唱三嘆、悲喜交も湧いて、

一には此の如き大光明、此の如き大寶聚、終に人の顧るなきを悲しみ、二には澆末輕浮

白隱の暖皮肉

の遠孫。薄福昏愚の野夫、何の幸ひか此の金文を拜披するかと喜ぶ。と云ひ、更に又た國師を激賞して雲門の再來である。雪竇に勝ること七歩であると云つた。白隱は、恰も群王府に入るが如く、曇華林に立つが如く、讚歎と歡喜とに満ちつゝ、満身の心血を灑いで下語した。『槐安國語』こそ、正に白隱の暖皮肉であり、活骨髓である。

二 三大供養

三所の大法會

白隱の應化時代に、三つの大なる報恩供養會があつた。その一つは寛延元年十一月駿府臨濟寺に於ける開山圓滿本光國師大休禪師の二百回忌である。次は越えて八年、寶曆六年の四月、駿河の高林寺に於ける大應國師南浦紹明禪師の四百五十回忌、この後二年にして美濃の瑠璃光寺で大圓寶鑑國師愚堂禪師の百年忌、これが即ち第三である。

宗休は、駿河の太守今川義元の歸依を受けて臨濟寺を開いた。その齊會の終つた後、一僧が白隱に『臨濟の三關を捩轉し、長沙の七步を超過すと云ふは、何う云ふ意味か』と問うた。白隱は愕然として驚いて、『そんな洒落たことはお前の分際ではない、誰か云つたのか』と問

宗休禪師の法語

三大供養

ふと、その僧は「實は本光國師が入院の時の法語である」と答へた。本光國師の法語と聞き、白隠は蕭然として容を改め禮拜して曰く「大燈、關山の二禪師以來、祖庭久しく荒涼に歸し、宗風全く地を拂うたと思つて居つたが、二百年後、この老和尚が有らうとは知らなかつた」と、且つ悔い且つ喜んだ。而して「僅かこの一語を聽いて遙に國師の機鋒と識見とを知つた。それは恰も梅子の話をして口に液が生じ、一觸の肉を咬つて其の鍋全體の味が解るやうなものである」と云つた。

虛堂禪師の語道三昧

白隠と美濃

大應國師の法會には特に國師が虛堂忌の拈香を提唱した。乃ち國師は虛堂に印可せられたので白隠は又その偈「相送當門有修竹。爲君葉葉起清風。」を讀んで、語言三昧の妙趣を大悟し爾來、虛堂を以て傍に案頭の知己として居つた、今日、國師のために、爐中に一瓣香を挿むことは、無上の歡喜とする處にして、正に萬感、潮の如くその胸を拍つたのであらう。更に愚堂の百年忌を美濃に迎ふるは、正に白隠の鐵心肝をして熔けしめんかと思はるゝ位である。秀靈なる美濃の山水は、久しく白隠が涙の歴史を語つて居る。その第一は、初めて美濃に來た時に、白隠が最も戀ひ慕うてゐた母が亡くなつた。その次には毒焰、膽を照し、怒氣、

骨に徹する『大燈語錄』を、閑言剩語の文字禪と一笑に附し去つて後に悲憤の涙を絞つた。更に岩瀧山に隱棲しては、この山の草木と共に朽ち果てんと覺悟してゐたのを、據なき父の言葉に終に涙を振つて山を下つた。その思川多き美濃に來り、この秀麗なる山水の生んだ宗門絶大の師家にして而も我が法祖なる愚堂のために焼香する時、白隠も亦愚堂が嘗て關山の三百回忌に「關山幸有愚堂在」の氣慨を思ひ出で、顧みて落寞たる宗門の現状を思つては、正に斷腸の悲痛があつたのである。

瑠璃光寺の大會

白隠は此の時正に七十四歳の高齡であつたから、遠い美濃まで行かれるのはと門人等は何れも氣遣つたが、元より法のために命を惜しまぬ白隠は、敢然として之れを斥けて其の請に應じて瑠璃光寺へ行つた。而も白隠は私に自ら最後の大會と思つたのであらう、書を四方に發して「老僧この度寶鑑國師百年忌の因み、瑠璃光寺に於て報恩供養のために『碧巖集』を提唱する。苟も國師が罔極の慈恩に報いんと欲する者は、感來つて熱香禮拜せよ」と云つた。従つて曩に鉗鎚を受けた良哉、鐵肝、靈源、空印、天瑞などの麒麟兒が雲の如く集り、東嶺も亦連つて分座説講した

白隠は自ら末後の大會を莊嚴するために、更に愚堂派下の諸老宿に書面を出し記念事業として愚堂の語録を出版したいと勧めた。於戲、憐むべし、信仰なく懈怠懶惰の輩は下らぬ理窟を付けて一向賛成せず、衆議紛々として遂に決しなかつた。白隠は實に憤慨した。『葦原や絶えて久しき法の道を踏み分けたるは此の翁かな』と自ら歌へる愚堂の兒孫が、その法祖の稀有の太盛事に際し、その語録の上梓すら出来ざるは何事ぞ。咄、無慚無愧無道心の輩よと泫然として泣いた。その潛々たる熱淚を磨つて墨と作し、熱烈、火の如き慷慨を寄せ、終に『寶鑑胎照』一卷を書いた。而して寶鑑國師の兒孫の無道心を痛撃して殆んど完膚なからしめた。白隠は復た美濃の山河に憂宗の涙を濺いで去つた。

三 無量寺と龍澤寺

白隠は澤山の門下を出し、大勢の信者があつた。而して後半生の多くは松蔭寺に居つた。白隠に若し寺を建てたいと云ふ野心があつたならば、金の上にも時間の上にも將た又た處の上にも、必ず自由に得られたのであつた。が、唯だ眞風の擡揚に汲々として更に餘念が無かつた。

殊に白隠の教ふる處は、伽藍佛法、形式佛法、外見佛法ではなかつた。否、恐らくは久しい間の舊習に囚はれた是れ等の佛法を一槌に撃破し、眞正堅固の禪門を建設せんとして、唯一條の宗門中興の路に向つて、獅子吼して奮直に進前したのであつた。それでも因縁あつて無量寺と龍澤寺には、開祖の位牌を祀られた。

無量寺は寶曆二年、白隠が六十八歳の四月八日に落慶式を行つた。白隠は請ぜらるゝまゝに開山第一祖となつたが、寺務は弟子の東嶺をして掌らしめた。初め元祿の頃に信州の獨園と云ふ人が或る廢寺の趾を拓いて庵を結んでゐた。その後、脱上座がこゝにゐた。それから延享の頃に夫龍が復興しようとしたが果さずして寂くなつた。それ等の人々の志を憐んで石井玄徳、古瀬平七、杉山總左衛門等が力を協せて成功したのであつた。石井や古郡は已に二十餘年前から白隠に參じて居つて、一時は比奈の三公三伯と稱せられた連中である。比奈と云ふは無量寺の村で、寺の前には彼の『竹取物語』發祥の遺跡と傳へられた、頗る詩的の處である。この冬には京都の世繼政幸が佛舍利七粒を無量寺に納めた。

無量寺が建つて後七年にして豆州の龍澤寺が出来た。正に白隠が七十五歳の春である。龍澤

龍澤寺の建
立

龍澤寺
禪
昌寺との關
係

白隱が墳墓
の地

無量寺と龍澤寺

一四八

寺は舊と弘法大師の開創したのであつたが久しく頽廢して居つた。それを江戸時代の初めに天
外と云ふ人が臨濟宗にしたが、不幸、久しからずして滅くなつた。それを此の度再興したので
ある。山を圓通山と號するの、白隱が信仰の觀世音菩薩を本尊とするからである。而してこ
ゝの開基となつたのは、飛驒の禪昌寺の檀家たる武川久兵衛、法名を徳元院遠山良遊居士と云
ふのである。而して寺號の龍澤は元と禪昌寺の山號である。のみならず、山號の圓通の字も
亦た禪昌寺と關係がある。禪昌寺は、飛驒國益田郡中呂に在り、舊と大雄山圓通寺と稱し、後
圓融天皇の勅願所となつてゐたが、その後、義に十刹に列せられたる龍澤山禪昌寺と合併した
ものだ云ふ。白隱は先年、寶鑑國師百年忌齋會を美濃の瑠璃光寺に終へてから、關の梅龍寺
や上有知の清泰寺、さては神淵の龍門寺などを経て飛驒に入つて此の禪昌寺へも行つたので、
武川氏との化縁を結んだのであつた。

龍澤寺は白隱が一世一代の寺であつて、武川氏等の因縁に依り、自ら心血を瀝いで經營した
ものと云つて差支ない。而して白隱は大にこゝが氣に入つた。或る日、庭を歩いてゐたが「あ
ゝ好い處だ。拙衲が死んだら此處へ埋めて呉れ」と云つた。白隱は墳墓の地として龍澤寺を建

てたのであつた。

痛快なる復
讐

宗門には昔から『粉糠三合持つたら孫寺へ住職するな』と云ふ語がある。白隱が剃髮し且つ
住職し、久しく法輪を轉じた懐かしい松蔭寺は、興津の清見寺の末寺で謂ゆる孫寺である。白
隱が如何に氣衆豪邁なりと雖も、既に寺を持つて居る以上は、絶對無限なる本寺の權勢に、或
は壓制せられ、威嚇せられ、或は脅迫もせられた。宗門では人よりも寺である。背かぬ氣の白
隱は、これ見よとばかりに龍澤寺を建てた。龍澤寺は妙心寺の直末で、堂々として敢て清見寺
の下に立たなくとも好い。實に是れ痛快なる復讐であつた。
無量寺は其の後廢絶し、松蔭寺は又た火災に罹り、獨り龍澤寺のみが恙無く儼然として百五
十年後の今日まで、白隱研究の豊富なる史料を保存して居る。龍澤寺は眞に白隱の唯身舍利の
在る處である。

四 普門示現の利益

東海道の一宿たる原の松蔭寺には、江戸へ參觀交代する因みには白隱を訪うて禪要を問うた

普門示現の利益

一四九

池田侯の歸
敬

人が多かつた。備前岡山の城主池田織政侯の如きも亦たその一人である。

播鉢の所望

白隠は行脚時代の因縁もあつた、寶曆元年の春、岡山の少林寺で金剛經を講じた。その折に池田侯は屢々参見した。その後、江戸へ参観の砌、原宿の本陣渡邊氏に宿り松蔭寺に白隠を訪れた。丁度その時、庫裏の典座の僧が過つて大播鉢を破つた。白隠は「時節到来ちや、破れたものは仕方がない」と、小言も云はないで池田侯を迎へた。侯は請ぜられて書院に通じ、久し振に悠揚たる白隠の風貌に接し、四方八方の清談に時を移した。歸りがけに侯は「今日は微行のことゝて甚だ失禮して何も持参致さざりしも、若し老師がお望みの品も御座りますれば、何なりとも追つてお届け致しますれば……」と云つた。白隠は「あゝさうか夫れは忝ない……然し別に不足のものも御座らぬが、唯だ先刻庫裏で播鉢を破つた……どうか播鉢でも貰ひたい」と笑つて云つた。侯は白隠の清廉恬淡なるに感じ愈よ歸敬したが、後に國へ歸つてから名物備前焼の大播鉢を松蔭寺へ届けたと云ふ。

黍餅の垂示

或る時、西國の大名某が松蔭寺に白隠を訪ひ、一場の垂示を乞うた。折柄、宿の農家から黍餅を御佛前へと持つて來た。白隠はこれ屈竟の茶菓子と、それを殿様の前へ出し「さア召上

白隠の現身說法

れ」と執つて進めた。が、元より山海の珍味に飽いた高貴の育ち、争かそれが口に入らうや、殿様は頗る當惑の體であつた。白隠はそれを叱して「是非ともお召上りあれ……せめて民百姓の困苦の程もお解りにならうぞ、老僧が垂示、この外には御座らぬ」と、毅然として云つたので、殿様も初めて夫れと氣付き、深く慚愧し且つ感謝した。

白隠の接化は概ね斯様であつた。これ亦た觀世音菩薩の現身說法で、大名身を以て得度すべきものには大名身を現じて爲めに說法するの妙がある。實に圓通無礙の大說法である。

白隠が岡山の少林寺からの歸途、京都に寄つて世繼氏に宿つた折、その頃、京都に在つて畫名漸く天下に聽えんとせる池大雅が來て禪要を問うた。大雅はその後二十五年、白隠の滅後八年にして安永五年に五十四歳で歿なつたが、一代に三十餘度も遙々京都から來て富士山に登つたと云ふ。大雅が富士山の秀靈に此の如く憧憬れたと共に、その化現たる白隠の禪機に深く歸敬したことは云ふまでもない。大雅は白隠の高弟たる遂翁と最も親密であつた。それがために遂翁は参禪の餘暇、畫を大雅に學んで翰墨に遊戯三昧を弄した。而して白隠の高逸淡雅なる

池大雅の参得

風流畫は、多く遂翁から學んだと傳へられて居る。大雅は禪を白隠に學んだが、畫は遂翁を通じて白隠に教へて居た。白隠と大雅とは互に相弟子たるものである。大雅は白隠や遂翁に參じて終に彼の『隻手の聲』を聴いた。この參禪に依つて得た思想が筆に表はれて、清肅幽遠なる畫風となつたのである。

池大雅の參見した頃、白隠は又た鳥原の遊女大橋女をも濟度した。女は素と江戸の武臣の家に生れたのであつたが、故あつて浮川竹に身を沈めた。紅燈綠酒の間、絃歌醉舞の中に待遇して、而も苦界解脱の要徑を一客に教へられて、獨り窺に參禪工夫して居つた。後に一素居士に聘れた。而して居士と共に白隠に參じた。その後又剃髮して尼となり慧林と稱したが居士に先づて死んだ。居士は白隠の高弟東嶺を請じて、尼のために追善供養を修した。東嶺が來て見ると佛前には一幅の觀音像が掛けてあるのみで、供養の佛たる尼の位牌が出てないので、『位牌は何うした』と問うた。すると居士は、『慧林は觀世音菩薩の化現で、謂ゆる婦女身を以て得度すべきものには、婦女身を現じて爲めに説法したのであるから、觀音像が即ち位牌である』と云つた。

大橋女の接
化と觀世音
菩薩

在家化導の
白隠

在家化導としての白隠は、實に圓脫洒落であつて、決して惡辣な手段を弄しなかつた。これ亦た觀世音菩薩が普門示現の利益である。

五 江戸の教化

白隠一たび松蔭寺に住してより、春花秋月早や四十餘年、富士山頂の雪は幾たびか積み且つ融けた。而も白隠は四十年一日の如く、猛然として宗門の維新を大獅子吼して居つた。

江戸に入る

龍潭寺の落慶式を終へて後、寺務は一切之れを東嶺に任せ、白隠は、江戸の醫者半田氏の請に應じ、七十五歳の老驅を提げて箱根山の險を踰えて初めて江戸に入つた。實にこれ寶曆九年の七月である。正に是れ服部南郭の卒せる年で、九代將軍家重が將軍職を辭するの前年である。

江戸は將軍の城下である。白隠はこゝで一つ理想を實現したいと、大なる抱負を持つて來た。而して江戸も場末な深川引籠町の臨川寺と云ふ小さい寺へ入つた。白隠禪師來るの聲は、江戸八百八街を撼かした。それにしても彼の臨川寺ではと噂に上り、鯉の吹流しみたやうな江戸ッ兒の落首となつた。

臨川寺の留
錫と落首

江戸の教化

名僧をひっこみ町の臨川寺

藪の中にも香の物かな

『藪の中にも香の物』と云ふ諺は、鎌倉時代からあつたものだが、その出處は支那で、魏の奇龍二年に司馬懿が諸葛亮（孔明）と渭南と云ふ處で對陣してゐた時司馬懿が文帝に上表して決戦を請うた。この表文中に『豈知野夫有二功者一也。』とある。それが段々と轉化して俗諺となり『塵だめの中に鶴』と云ふ意に用ひられた。

白隠は此處に居つて『碧巖集』を提唱して、盛に家風を宣揚し、韓々として踵を繼いで來る緇林の龍象、武林の英傑の四來を提擲して居つた。道譽自ら高く諸方の歸仰を受けた。

白隠は或る日、時の寺社奉行たる小出侯を訪れた。侯は名を英持と云ひ、丹波園部の城主であつたが去る延享三年に寺社奉行を兼ねたのである。一度お尋ね申さうくと約束して居つたのが、段々と遅れてゐたのであつたが、その日には侯は相悪く他出であつた。先づ請ぜらるゝまゝに書院に通つて暫らく持つた。そこへ家臣が來て『是非に一筆御揮毫下さるやうに』と、金屏風を出した。白隠は無雜作に筆執つて、少時、小首を傾けてゐたが忽ち莞爾として、

小出侯の屏風

小出々々と待つ日にこいで

待たぬ日に來て屏風書く

と、墨痕淋漓として滴らんばかりに書いた。白隠の風流洒脱の境界が躍動して居つた。

白隠はその冬十二月、一先づ江戸を去つて龍澤寺に歸つた。

その後六年を経て明和二年に至り、白隠は正に八十一歳であつたが、春から少し病氣で松蔭寺へ行つて臥てゐた。東嶺は江戸へ出て至道無難禪師の舊蹟たる小石川の至道庵を再興して、白隠が閑居の道場とせんとして其旨を手紙で申送つたが、松蔭寺にゐた門弟の者等はそれを肯かなかつた。

東嶺と至道庵

翌年の正月、東嶺は弟子の文恭を態々遣はして白隠を邀へた。白隠も近頃は半分衰弱したが、江戸へは出て見たい氣もするし、且は至道庵も再興されたと云ふから、遂に文恭に従いて駕に乗つて出た。その夜は箱根の宿の天野氏に宿つた。

然るに松蔭寺にゐた門弟四人、後追つ驅けて來て、『さア駕を戻せ、御師匠様を返へせ』と呶鳴る。文恭はそれへ出て『お前達は何故そんな解らぬことを云ふか』『否、老師は近來大變

再び江戸に入る

お衰りになつた、それを強て遠い江戸までお伴れ申さば、却てお身體のために善くない……殊に又た後に残された私等は、誰を手頼りにして参禪しますか……」と泣かんばかりに訴へる。而し文恭は「その心配は御無用である。老師には姑く江戸へ出て御養生をなさるのだ、快くなれば復た直ぐお歸りになる、のみならず老師御自身から大變に進んで御座る、それをドウしても返へせと云ふのか……お前の方で返せと云へば、此方はドウしても返へさぬ」と云つて肯かぬ。追つて来た者も仕方なくその儘歸つた。

白隠は江戸に入つて相變らず諸方の接化に多忙を極めたが、夏、三島の福聚寺からの請に應じて歸つて来た。

前後二度の江戸行も、その年既に衰老であり且つその日も浅いので目覺ましい活動も出来なかつた。

六 大 叫 一 聲

明和五年戊子、白隠は正に八十四歳の春を、我が墳墓の地と期した龍澤寺に迎へた。

龍澤寺の正月

玲瓏たる芙蓉の峰に棚引く春霞、吹く風さへも駭蕩として暖かく、白隠は蕙然として「あゝ、好いお正月ぢや、老僧は八十四になつたが、こんな好い正月を迎へたのは初めてぢや……これも東嶺和尚のお蔭ぢや、あゝ目出たい」と大喜びであつた。

松蔭寺に病を示す

近來殊に衰老した白隠は、正月から却て非常な元氣で處々の應化に無盡の法益を施してゐた。何時しか春と過ぎ夏と去つて、草間に啣く蟲の音も涼しい秋となり、暖かき巖南にも雪の降る十一月には、白隠は松蔭寺へ歸つて来た。而して衰老とは云ひながら、病は次第に重るばかり。十二月七日に古郡氏が診察に來た。呼吸、脈搏ともに異常は無い。「別にお變りも御座りませぬ」と云ふと、白隠は之れを叱して「馬鹿ッ、三日前に人の死を知ることが出来ないで、良醫と謂へるかッ」と。古郡氏は唯々として去つた。白隠は自ら既に死を知つた。その十日には後事を遂翁に依頼し、翌る十一日の曉、右脇にして高臥してゐたが、「あゝ苦しい」と大叫一聲、「ウーン」と一聲唸つたまゝ示寂した。

大叫一聲の臨終

白隠の最後は唯だ是れ大叫一聲である。遺偈を留めず、閑葛藤を弄せず、言端語端に涉らず、少しも飾らず、作らず、氣取らず、苦しいのを苦しいと無雜作に云つて洒々落々たるは、

恰も巖頭の臨終の如くであつた。白隠は行脚の初め清水の禪叢寺に於て、巖頭渡子の話に撞着し、後ち越後の英巖寺に在て「巖頭健在なり」と叫び、而してその臨終は巖頭の如く大叫一聲するのみ、亦た是れ白隠は現在の巖頭にして、巖頭は過去の白隠であつた。白隠が八十四年の生涯は、唯だ是れ大叫一聲のみ。この外更に何の求むる處もなく、何の尋ねる處もない、猶ほ是れ彼の玉陽明が「我が心光明、又何をか言はん」との臨終と相一致して居る。

於戯、大叫一聲！白隠滅後百六十七年の今日、猶ほ其の響は轟々として天地を撼かして居る。未來兆載永劫の後までも白隠は唯だ大叫一聲して居る。この大叫一聲と隻手の聲とは、二にして不二である。前の白隠は隻手の聲にして、後の白隠は大叫一聲である。而も前の白隠を知つて後の白隠を知らざる者は迂である。後の白隠を知つて前の白隠を知らざるものは愚である。而して前と後とを二面に見て白隠を知らんとするものは癡である、妄である、迷である。若し隻手の聲を聞き得ば、大叫一聲も亦た聞き得ん。大叫一聲を聞き得ば、隻手の聲も亦た聞き得ん。隻手の聲と大叫一聲と、眞に二にして不二なり。唯だ是れ一聲である。この一聲！是れ古今超越の一聲である。乾坤打破の一聲である。法界彌綸の一聲である。この一聲！即ち是

れ常在不滅の白隠である。白隠を知らんとする者、先づ唯だ此の一聲を聴くべきのみ。願れば、白隠の一代は唯だ努力である。奮闘である。精進勇猛である。白隠は去る寶曆十三年の冬、龍澤寺に在て或る夜、夢を見た。白隠が近頃出来た隠寮の上間に坐つて居る。その傍には結城の節首座を初めとして大勢の舊友知己が圍繞して居る。下間を見れば白隠が平素から歸仰して居る愚堂、大愚、無難、正受續いて陽春、古月、巴陵、定山等の諸老宿、處狭きまですらりと列坐して居る。スルと舊友中の一人が歎息して「イヤ私共は機根下劣で行解相應せず、皆様に顔合すもお愧づかしい」と云つた。これを聴いた節首座は冷やかな笑を浮べて、「それはお前達は二字不足して居るから、サウ云ふ愧づかしい思をしなければならぬのだ」と意味有りげに云つた。一座の者も愕然として驚き、「その二字とは何で御座る」と、言ひ合はせたやうに一同が問うた。が、節首座は「云うても駄目だ」と語らない。さう云はないで、聴かせて下さい——駄目だ——聴かせて下さいと押問答する。下間に居る愚堂等も、亦た同じやうに「聴かせて貰はうぢやないか」と云ふので、節首座は「それではお話し申さう」と一座を見下し、言葉を改めて「二字とは、唯だ此の勇猛の二字のみである」と云つた。その聲には力

があつた。あゝ我れ等の不足は確に勇猛であると、一同は大に賞讃した。白隠は靜に之れを聴いてゐたが、能く／＼考へて見れば、こゝに居るのは皆な先きに死んだ人ばかりである。と思つたから白隠は聲を勵まして『俺はお前等と一緒にならぬぞッ、』と云つた。その刹那、夢は豁然として覺めた。

白隠は門下の者に、この一場の夢物語をして、吾人唯だ勇猛あるのみなることを示した。而して『老僧はこの夢を見て大變元氣付いた』と語つた。

白隠は實に努力の人であつた。而して其の一代の努力は、宗門の中興であつた。

白隠の滅後、舍利を分ちて松蔭、龍澤、無量の三處に塔を建てた。翌年六月、朝廷、特に勅して神機獨妙禪師と謚られた。去る明治十七年、勅して正宗國師と追謚せられた。白隠の行く處、草木も亦たその徳に化せざるなく、その胸中に藏する處の禪は、正に神なり、妙なり、古今に卓絶して獨立せり。神機獨妙の四字、定に能く偉大なる人格を盡せりと云ふべきである。

肉の白隠は死んだ。而し靈の白隠は永遠に生きて居る。玲瓏たる富士山、普門示現の觀世音菩薩、是れ即ち白隠の清淨法身である。白隠は、過る寶曆三年に正受老人の三十三回忌を迎

賜號の追謚
常在不滅の
法身

へた時に、香語を拈じて曰く、

掀倒天源一滴流。飯山深處使人愁。
嫉焰妬火懈拈出。留與兒孫結寇讎。

と、是れ正受老人の常在不滅の法身にして、偶々以て白隠自ら儼然として常在不滅なることを説いて居る。

七 鵠林の門下

白隠の出世は實に禪門の革命であつた。而して中興の偉業を大成せしめたものは、門下に俊才を輩出したことである。

鵠林の門下、鬱乎として多士儕々なりと雖も、指を先づ遂翁と東嶺の二人に屈せねばならぬ。二人が副貳轉化の功に依つて、能く鵠林の宗風をして宣揚せしめたのである。猶ほ是れ曹洞宗の瑩山禪師門下の峩山と明鋒との如きである。

由來『大器遂翁、微細東嶺』と稱せられて、各々一特色を具して居つたから、二人を打して

遂翁と東嶺

初めて一大人格を完成し得たのである。蓋し鶴林門下の天下を風靡したのは此の二人があつたからである。その何れの一人を缺いても、恐らくはその事業は成功しなかつたであらう。遂翁は東嶺に長すること四歳、寛政元年十二月、七十三歳で寂くなつた。

遂翁の参學

和尙は召すとも我れは召さず

遂翁は年三十餘にして初めて白隠に松蔭寺に参じた。一旦、紀州熊野に山居してゐたが、再び出て白隠に見えた時、白隠は色を作して『闇を恐れて静を樂し、深山に入つて木石と伴を爲すが如き、何の長處かある』と喝出して、惡辣なる手段を弄して、更に向上の一路を示した。遂翁は久しく松蔭寺を去る三十餘里、葦原の西青島に庵居して、譯日にあらざれば決して來なかつた。講終れば直ちにサツサと歸つて行く。或る日、白隠が偶また遂翁を呼んだ。が、その時は已に去つた後であつた。侍者が追うて漸く求め『老和尙召し給ふ、速に來れ』と告げた。遂翁は、『和尙は召すとも我れは召さず』と、袖を拂つて行つた。

天資卓犖にして太だ酒を嗜み、自ら醉翁と號して居つたが、人の言葉に従つて遂翁と改めたのである。細事に拘はらず、言行多くは繩墨の外に逸して放縱自如であつた。白隠の滅後、松蔭寺の席を繼いだが、偶また來り参する者有つても『我れ何をか識らん、去つて東嶺に參ぜよ』

寧ろ急に失するも緩に失するも勿れ

東嶺と宗門無盡燈論

雪中庵蓼太の参見

と、竟に一語を出して人に示さなかつた。而もその會下に隨ふ者、常に七八十人を下らなかつた、遂翁、常に衆に示して曰く『古人云ふ、寧ろ緩に失するも、急に失すること忽れ。と我れは則ち然らず、寧ろ急に失するも緩に失すること忽れ』と。

その孤危險峻な機鋒は、云ふまでもなく白隠の鉗錘に打出せられたものであるが、又た能く『大器遂翁』の面目を發揮して居る。

東嶺は白隠に見え、數年にして悉く室内の事を参得したが、而も辛鍊苦修のため遂に病を得て殆んど死に瀕した。自ら謂へらく『我れ既に宗趣を究むと雖も一旦、溘死せば何の益あらんや』と、即ち心血を瀝いで『宗門無盡燈論』を著はして白隠に呈し、『この中若し採るべきものあらば、正に後世に貽さむとす。はた杜撰ならば火に投ぜんのみ』と、白隠一見して驚歎し、『斯は後世聖眼の藥となすべし』と云つて喜んだ。が、東嶺は切に内觀の要を感じたので白隠を辭して京に行き、嘗て白隠が白幽真人を訪ねたる白河の邊に關を掩うて病を養ひ、遂に生死悠々たる自在の境遇に到つた。

江戸の俳人、雪中庵蓼太は、嘗て白隠に松蔭寺に参じたが、後又た東嶺に龍澤寺に相見して

垂示を乞うた。東嶺即ち

飛込んだ力でうかぶ蛙かな

と句を題して與へた。蓼太深く契悟して益す歸敬したと云ふ。

東嶺の機峰

東嶺、嘗て嵯峨にありて説法した。時に天寒くして衆皆な畏色になつた。東嶺大喝して曰く「寒を畏る者は、須らく早く俗に還るべし、禪を學びて何かせむ。汝等、何ぞ各々諸を心に求めざる。魚は水中に在つて水あることを知らず、人は妙法裏に在りて妙法を知らず」と、時に座下に心學者中澤道二あり、この言を聴き豁然として悟り曰く、「説法、吾が心を外にせず、即身成佛これなり」と。

微細綿密の行持

微細綿密なる東嶺の行持は、遂翁とは殆んど反對の方向を歩み非常な成功をして居る。而して頗る經營の才に富んで龍澤寺の建立、至道庵の再興等、實に偉大なる功績である。平生垂示の法語等を集めて「快馬鞭」と名け、盡んに世に行はれて居る。白隱の年譜たる「龍澤開祖神機獨妙禪師年譜因行格」二卷も亦た東嶺の撰する處である。

この外、鶴林門下の家參禪子の第一人として、後に比奈の無量寺に住せる脱首座白隱が一見

鶴林の龍象

して文殊來也と叫べる文彩縱横なる良哉。續て峻機妙用、大作家の手段あつて愚溪、行應、隱山、卓洲、閔堂の五神足を接得して、鶴林の門風をして一時に振はしめたる峩山慈棹。平生、人に接するに白刃を座右に置き、擬議すれば即ち刀を揮うて逐ひ、白隱に十倍せる險峻なる手段を弄せる葦津。その他、靈源、圓柱、快巖、環溪、悟庵、梁山、提洲、天鏡、斯經、大同、層巖、頑極、長堂、劫運、天崖、愚庵、長沙、關捩、大休などは、悉く皆な一方の宗匠で、各々鶴林の宗風を擧揚した人々である。

古月禪材

猶ほ鶴林門下と密接の關係あるは古月禪材である。古月は鎮西に在りて頻に眞正の宗風を擧揚してゐたので、白隱も一たび之れを訪はんとしたのであつた。その後、古月は寶曆元年に八十五歳で寂くなつた。而して其の門下の多くは遙に東海道を下つて白隱の爐竈に投じたのであつた。

人物の養成

白隱が宗門中興の努力は、即ち人物の養成となつた。これ其の革命の成功したる所以である。

八 白隱の詞藻

禪は不立文字なり

禪は不立文字、教外別傳である。若し文字を以て禪を解せんとせば白雲萬里である。この故に白隠は『隻手の聲』と示し、大吽一聲した。而も此の『隻手の聲』の第一義を、姑く第二義門に下つて講演するもの法語となり、語録となり、文字となつた。この文字、是れ即ち白隠の暖皮肉であり、活骨髄である。

荊叢毒藥 九卷

槐安國語 五卷

息耕錄開筵普說 一卷

寒山詩闡提記開 三卷

寶鑑貽照 一卷

毒語心經 一卷

寒林貽寶 一卷

以上漢文

遠羅天釜 四編

寶鏡痛記 一卷

假名法語 一卷

辻談義 一卷

藻鹽草 一卷

邊那以智語 一卷

籤柑子 一卷

兎專使稿 一卷

夜船閑話 二卷

壁生草 二卷

於仁安佐美 一卷

八重葎 二卷

假名葎 一卷

等の外に、

白隠の詞藻

坐禪和讃。

大道ちよほくれ。

子守唄。

藥病相治説。

御代の腹鼓。

草取唄。

主心お婆粉引歌。

與察女書。

等の短編物もある。

白隱は少壯時代に、一時非常に文字に耽溺した。而して天稟の詞藻を鍛錬したのであつた。瑰麗雄偉の文字、能く辛辣險峻なる機鋒を表はして居るが、而も深く語言三昧に入り、時代の趨勢に鑑み、平易明暢に世間禪を説いて、平民的に禪を布教したのは、終に白隱の名を今日に成さしめた所以である。白隱は、實に江戸時代に於ける禪文學者の第一人である。

安心ほこりたる記。

施行歌。

三教一致辯。

御洒落御前物語。

見性成佛丸方書。

寢惚氣廻眼覺誌。

おたふく女良粉引歌。

附 録 夜 船 閑 話

白 隱 禪 師

序

寶曆丁丑の春、長安の書肆松月堂何某とかや聞えし、遠く草書を裁して、吾が鶴林近侍の左下に寄せて云はく、伏して承る、老師の古紙堆中夜船閑話とかや、云へる草稿あり。書中多く氣を練り精を養ひ、人の營衛をして充たしめ、専ら長生久視の秘訣を集む。謂ゆる神仙鍊丹の至要なりと。是の故に世の好事の君子是を思ふ事、荒旱の雲霓の如し。偶々雲水の徒侶竊に傳寫し來るあるも、秘重し珍藏して人をして見せしめず。天瓢むなしく櫃にをさめて匿たるが如し。願くは是れを梓に壽ながふして、以て其の渴を慰せむ。聞く老師常に人を利するを以て老後を樂しみ玉ふと。若し夫れ人に利あらば、師豈是れを蓄しみ玉はんやと。二

虎含み來つて師に呈す。師微笑として笑ふ。此に於て諸子舊書櫃を開けば、草稿蠹魚の中に葬らるゝ者中葉に過ぎたり。諸子即ち訂正傳寫して、既に五十來紙を見る。即ち封裏して以て、京師に寄せんとす。予が馬齒一日も諸子に長たるを以て、此の端由を書せんとす。予も亦辭せずして書す、云はく師鶴林に住する事大凡四十年、鉢囊を掛けしより以來、雲水參玄の布衲子纒に門閭に跨れば、師の毒涎を甘なひ、痛棒を滋しとして、辭し去る事を忘るる者或は十年、或は二十年、鶴林林下の塵となる事も亦總に顧みざる底あり。盡く是れ叢林の頭角、四方の精英なり。各西東五六里が間に分れて、舊舎廢宅、老院破廟、借て以て菴居の處として清苦す、朝艱暮辛、晝飯夜凍、口を投ずるものは茶葉麥麩、耳に觸るゝものは鷲鳴垢罵、骨に徹するものは噴舉痛棒、見るもの額を擡め、聞者肌汗、鬼神もまた涙を浮べつべく、魔外もまた掌を合せつべし。其の初め來るときは、采玉、河晏が美貌ありて、肌膚光澤凝れる膏の如くなる者も、久しからずして恰も杜甫、賈島が、形容枯槁顔色憔悴するが如く、或は屈子に澤畔に逢ふが如し、參玄軀命を顧みざる底の勇猛の上士にあらざるよりんば、何の樂みあつてか片時も湊泊する事を得んや。是の故に往往參禪度に過ぎ、清苦節

を失する族は、肺金いたみかじけ、水分枯渴して、疔癬塊痛、難治の重症を發せんとす。是れを憐み是れを愁ひて、師不豫の色あるもの連日、乍ち忍俊不禁にして、雲頭を按下し老婆の臭乳を絞つて、是れに授くるに内觀の秘訣を以てす、乃ち云はく、若し是れ參禪辨道の上士心火逆上し、身心勞疲し、五内調和せざる事あらんに、鍼灸藥の三ツを以て是れを治せんと欲せば、縦へ、華陀扁倉と云へども、輒く救ひ得る事能はず、我に仙人還丹の秘訣あり。儼が輩試みに是れを修せよ、奇效を見る事、雲霧を披いて皎日を見るが如けん。此の秘訣を修せんと欲せば、且らく工夫を抛下し、話頭を拈放して、先づ須らく熟睡一覺すべし、其の未だ眠につかず、眼を合せざる以前に於て、長く兩脚を展べ、強く踏み揃へて一身の元氣をして臍輪氣海丹田腰脚足心の間に充たしめ、時々此の觀を成すべし。我が此の氣海丹田、氣海丹田腰脚足心、縦に是れ我が本來の面目、面目何れの鼻孔かある。我が此の氣海丹田、總に是れ我が本分の家郷、家郷何の消息かある。我が此の氣海丹田、總に是れ我が己身の彌陀、彌陀何の法をか説く、淨土何の莊嚴かある。我が此の氣海丹田、總に是れ我が己身の彌陀、彌陀何の法をか説くと打ち返し、常に斯くの如く妄想すべし。妄想の效果つもらば、一身の元氣いつしか

腰脚足心こしあしこころの間に充足じゆうじゆうして、臍下せいか瓠然こぼんたる事こと、いまだ篠打ちしのうちせざる鞠まりの如ごとけん。恁麼かくのごとくに單々たんたんに妄想まうさうし將たち去まさつて、五日いちにち七日にち乃至にち三七日にちを経へたらんには、從前じゆうぜんの五積しやく六聚りくく氣虛ききょ勞役らうやく等らうの諸しよ症ぢやう、底そこを拂はらつて平癒へいゆせずんば、老僧らうそうが頭かぶを斬きり將たち去まされ。此こゝに於おて諸子しよしよ歡喜くわんき作禮さくらいして、密々みつみつに精修せいしゆす。各々おの／＼悉ふしく不思議ふしぎの奇效きかうを見る。效かうの遲速ちそくは進修しんしゆの精進せいじんに依よるといへども、大半たいたん皆みな全快ぜんくわいす。各々おの／＼内觀ないくわんの奇效きかうを讚嘆さんたんして休やすまず、師しの曰いはく、爾なんじが華心くわしん病びやう全快ぜんくわいを得えて以もつて足たれりとすること勿なれ。轉うつた治ぢせば轉うつた參さんせよ。轉うつた悟ごらば轉うつた進しんめよ。老僧らうそう初しよめ參學さんがくの時とき、難治なんぢの重病ぢゆうびやうを發まつして、其その憂苦いうく諸子しよしよに十倍じふばいせり。進退しんたい惟たゞ谷やまる。尋常じゆんじやう心にひそかに思惟しゆいすらく、生きてこの憂苦いうくに沈しづまんよりは、如ごとかじ早く死しして此輩こゝかた囊なうを捨すてんにはと。何なんの幸さいひぞや、此こゝの内觀ないくわんの秘訣ひけつをつたへて、全快ぜんくわいを得える事こと今の諸子しよしよの如ごとし。至人しじんの曰いはく、是こゝれは之これれ神仙しんせん長生ちやうせい不死ふしの神術しんじゆつなり。中下ちゆうげは世壽せいじゆ三百さんひゃく歳さいなるべし。其その餘よは計はかり定さだむべからず。予即よすなはち歡喜くわんきに堪たへず、精修せいしゆ怠おそらざるもの大凡たいぼん三年さんねん。心身しんしん次第だいに健康けんかうに、氣力きりよく次第だいに勇壯ゆうさうなる事ことを覺おぼふ。此こゝに於おて重ねて心に竊ひそかに謂いへらく、縦たがひ此こゝの眞修しんしゆを修しゆし得えて、彭祖へんそが八百はちひゃくの歳さい時ときを保たもち得えるも、唯ただ是こゝれ一箇いっかん頑空こんくわう無智むぢの守屍しゆし鬼きならくのみ。老狸らうりの舊案きゆあんに眠ねるが如ごとし。遂つひに壞滅くわいめつに歸かへせん。

何なんが故ゆゑぞ。今既いますでに獨ひとりも葛洪かつこう、鐵拐てつがひ、張華ちやうくわ、費弱ひぢやくが輩はいを見みす。如ごとかじ四弘しやくの大誓たいせいを憤ふん起おこし、菩薩ぼさつの威儀ゐぎを學まなび、常つねに大法たいほう施しを行いひ、虛空こくうに先まづて死しせず、虛空こくうに後かれて生しやうぜざる底そこの不退ふたい堅固けんこの眞法しんぽう身しんを打だ殺ころし、金剛こんかう不壞ふくわいの大仙たいせん身しんを成じやう就じゆせんにはと。此こゝに於おて眞正しんしやう參玄さんげんの上士じやうし兩三りやうさん輩はいを得えて、内觀ないくわんと參禪さんぜんと共ともに合あせ並ならべ貯たくはへて、且かつ耕かし且かつ戰たたかふ者もの、蓋けだし茲こゝに三十年さんじゆんねん、年々ねん／＼一員いんを添そへ、二肩にけん、増まし得えて、今既いますでに二百にひゃく衆しゆに近ちかし。其その中方ちゆうほう來らいの衲子のつす勞屈らうくつ疲倦ひけんの族うぢ、或あるは心火しんか逆ぎやく上じやうし、正ただに發狂はつきやうせんとする底そこを憐あはれ、密ひそかにこの内觀ないくわんの至要しじやうを傳授でんじゆし、立所たちどころに快癒くわいゆせしめ、轉うつた悟ごれば、轉うつた進しんましむ。馬年ばねん今歲こんさい古稀こきに超こえたりと雖いんも、半點はんてんの病患びやうわんなく、齒牙しご全ぜんく搖落ゆらくせず。眼耳がんじ次第だいに分明ぶんめいにして、動うごもすれば靈變れいへんを忘わする。毎月まいげつ兩度りやうどの法施ほふせ遂つひに倦怠けんたいせず。請こひに陀方たほうに應おうじて三百さんひゃく五百ごひゃくの海衆かいしゆに聚會くわいけして、或あるは五旬ごじゆん七旬しちじゆんを經へ、又緣またえんに雲うん水の所望しよぼうに隨したがつて胡說亂道こせつらんどうするは、大凡たいぼん五六十ごじゆ會かいに及およぶと雖いんも、終つひに一日いちじつも罷講はいかう齋さいを鎖ささず、身心しんしん健康けんかう氣力きりよくは次第だいに二三十にさんじゆ歳の時ときよりは遙はるかに勝かされり。是こゝれ皆みな彼かの内觀ないくわんの奇效きかうに依よる事ことを覺おぼふ。住菴ぢゆうあんの諸子しよしよ各々おの／＼悲泣ひきなき作禮さくらいして曰いはく、吾わがが師し大慈だいじ大悲だいひ願げんはくは内觀ないくわんの大略たいりやくを書しせよ。書しよして留とどめて後來こうらい神病しんびやう疲倦ひけん吾わがが輩はいの如ごとき者ものを救すくへ。師し即すなはち領りやうす。立處たちどころに草稿そうごう成なる。稿こう

中何の説く所ぞ。曰く、大凡生を養ひ、長壽を保つての要、形を鍊るに如かず。形を鍊るの要、神氣をして丹田氣海の間に凝らさしむるにあり。神凝るときは氣集まる、氣集まるときは即ち真丹成る。丹成るときは形固し。形固きときは神全し。神全きときは壽ながし、是れ仙人九轉還丹の秘訣に契へり。須らく知るべし。丹は果して外物に非ざる事を。千萬唯心火を降下し、氣海丹田の間に充たしむるに有るらくのみ。住菴の諸子此の心を勤めて勵み。進んで怠らすんば禪病を治し、勞役を救ふのみにあらず。禪門向上の事に到つて、年來疑團あらむ人々は、大に手を拍して大笑する底の大歡喜あらむ。何が故ぞ、月高くして城影盡く。

維時寶曆丁丑孟正二十五書

窮乏菴主飢凍炷香稽首題

夜船閑話

山野初め參學の日、誓つて勇猛の信心を憤發し、不退の道情を起激し、精鍊刻苦する者、既に兩三霜、乍ち一夜忽然として落節す、従前多少の疑惑根に和して氷融し、曠劫生死の業根、底に徹して漚滅す。自ら謂へらく、道人を去る事まことに遠らず、古人三十二年是れ何の捏怪ぞと、怡悅踏舞を怠るゝもの數月、向後日用を回顧するに、動靜の二境全く調和せず、去就の兩邊總に脱洒ならず。自ら謂へらく、猛く精彩を着け、重ねて一回捨命し去らむと。こゝに於て牙關を咬定し、雙眼晴を瞪開し、寢食ともに廢せむとす。既にして未だ期月に互らざるに、心火逆上し、肺金焦枯して、雙脚氷雪の底に浸すが如く、兩耳溪聲の間を行くが如し。肝膽常に怯弱して、舉措恐怖多く、心神困倦し、寢寤種々の境界を見る。兩腋常に汗を生じ、兩眼常に涙を帯ぶ、此に於て遍く明師に投じ、廣く名醫を探ると雖も、百藥寸效なし。或人曰く、城の白河の山裏に巖居せるものあり、世人之を名づけて白幽先生と云ふ。靈壽三四甲子を閱し、人居三四里程を隔つ。人を見る事を好まず、行くときは必ず走つて避く。人其の賢愚を辨する

ことなし。里人専ら稱して仙人とす。聞く故の丈山氏の師範にして、精しく天文に通じ、深く醫道に達す。人あり禮を盡して咨叩する時は稀に微言を吐く。退いて之を考ふるに大に人に利ありと。此に於て寶永第七庚寅孟正中浣、密に行纏を着け、濃東を發し黒谷を超え、直に白河の邑に到り、包を茶店に下して幽が巖栖の處を尋ぬ、里人遙に一枝の溪水を指す。即ち彼の水聲に隨つて遙に山徑に入る。正に行く事里許に乍ち流水を踏斷す。樵徑も亦なし、時に一老夫あり、遙に雲烟の間を指す、黃白にして方寸餘なる者あり。山氣に隨ふて或は現はれ、或は隠る。是れ幽が洞口に垂下する所の簾簾なりと。予即ち裳を塞げて上る。巖巖を踏み蒙茸を披けば、氷雪草鞋を咬み、雲露衲衣を壓す。辛汗を滴らし、苦膏を流して、漸く彼の簾簾の處に到れば、風致清絶、實に物表に丁々たる事を覺ふ。心魂震ひ恐れ、肌膚戰慄す。且らく巖根に倚て歎息するもの數百、少焉あつて衣を振ひ襟を止して、畏づ／＼鞠躬して簾子の中を望めば、臙臙として幽が目を收めて端坐するを見る。蒼髮垂れて膝に至り、朱顏麗ふして棗の如し。大布の袍を掛け軟草の席に坐せり。窟中纔に方五六笏にして全く資生の具なし。机上只中庸と老子と金剛般若とを置く。予即ち禮を盡くして、苦ろに病因を告げ且つ救ひを請ふ。少

焉幽眼を開いて熟々視て徐々として告げて曰く、我は是れ山中半死の陳人、糧粟を拾ふて食ひ、麋鹿に伴つて睡る。此の外更に何をか知らむや。自ら愧づ遠く上人の來訪を勞すること。予即ち轉た咨叩して休まず。時に幽恬如として予が手を投らへて精しく五内を窺ひ、九候を察す。爪甲長きこと半寸、慘乎として齧を擽めてつけて曰く、已哉、觀理度に過ぎ、進修節を失して終にこの重症を發す。寔に醫治し難きものは公の禪病なり。若し鍼灸藥の三つの物を恃んで、而して後に之を救はむと欲せば、扁倉力をつくし華陀藥を撰むるも、奇效を見る事能はじ。只今既に觀理の爲めに破らる。勤めて内觀の效を積まずんば、終に起つ事能はじ。是れ彼の起倒は必ず地に依るの謂なり。予曰く、願はくは内觀の要秘を聞かむ。學びがてらに之を修せむ。幽肅々如として容をあらため、從容として告げて曰く、嗚呼公の如きは問ふ事を好むの士なり。我が昔聞ける處を以て徴しく公に告げんか。是れ養生の秘訣にして、人の知る事稀なり。怠らすんば必ず奇效を見む。久視も亦期しつべし。夫れ大道分れて兩儀あり、陰陽交和して人物生類、先天の元氣中間に默運して、五臟列り經脈行はる。衛氣營血、互に昇降循環するもの、晝夜に大凡五十度、肺金は耗藏にして隔上に浮び、肝木は壯藏にして隔下

に沈む。心火は太陽にして上部に位し、腎水は大陰にして下部を占む。五臓に七神あり、脾胃
 各々二神を藏す。呼は心肺より出で吸は腎肝に入る。一呼に脈の行く事三寸、一吸に脈の行く
 事三寸、晝夜に一萬三千五百の氣息あり。脈一身を巡行する事五十次、火は輕浮にして常に騰
 昇を好み、水は沈重にして常に下流を務む。若し人察せず觀照或は節を失し、志念或は度に
 過ぐる時は心火熾衝して肺金焦薄す。金母苦しむ時は水子衰滅す。母子互に疲傷して各々五位
 困倦し六屬凌奪す。四大増損して各々百一の病を生ず。百藥功を立つる事能はず。衆醫總に手
 を束ねて、終に告る處なきに到る。蓋し生を養ふ事は國を守るが如し、明君聖主は、常に心を
 下に専らにし、暗君庸主は、常に心を上にて恣にする。上に恣にするときは、九卿權に誇り、
 百僚寵を恃んで、曾て民間の窮困を顧る事なし。野に茶色多く、國餓季多し。賢良潛み竄
 れ、民臣瞋り恨む。諸侯離れ叛き、衆夷競ひ起つて、遂に民庶を塗炭にし、國脈永く斷絶する
 に至る。心を下に専らにするときは、九卿儉を守り、百僚約を勤めて、常に民間の勞役を忘る
 る事なし。農に餘まんの粟あり、婦に餘まんの布ありて、群賢來り屬し、諸侯恐れ服して、民
 肥え國強く、令に違するの丞民なく、境を侵すの敵國なし。國刁斗の聲を聞く事なく、民戈戟

の名を知らず。人身もまた然り。至人は常に心氣をして、下に充たしむ。心氣下に充つるとき
 は七凶内に動く事なく、四邪また外より窺ふ事能はず。營衛充ち心神健かなり。口終に藥餌の
 甘酸を知らず、身終に鍼灸の痛痒を受けず。庸流は常に心氣をして上に恣にする。上に恣に
 するときは、三寸の火、四寸の金を尅して、五官縮まり疲れ、六親苦しみ恨む。是の故に漆園
 曰く、真人の息は、是を息するに踵を以てし、衆人の息は、是れを息するに喉を以てす。許俊
 が曰く、蓋し氣下焦にあるときは、其息遠く、氣上焦にあるときは、其息促まる。上陽子が曰
 く、人に眞一の氣あり、丹田の中に降下するときは、一隔また復す。若し人始初復の候を知ら
 んと欲せば、暖氣を以て、是れが信とすべし。大凡生を養ふの道、上部は常に清涼ならむ事を
 要し、下部は常に溫暖ならむ事を要せよ、夫れ經脈の十二は、支の十二に配し、月の十二に應
 じ、時の十二に合す。六爻變化再周して、一再を全ふするが如し。五陰上に居し、一陽下を占
 む。是を地雷復と云ふ。冬至の候なり。真人の息は、是れを息するに踵を以てするの謂か。三
 陽下に位し、三陰上に居す。是れを地天泰と云ふ。孟正の候なり。萬物發生の氣を含んで、百
 卉春化の澤を受く。至人元氣をして下に充たしむるの象。人は是れを得るときは營衛充實し、氣